
HEAVEN ! ヘヴン ! HEAVEN ! 2

coconeko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HEAVEN!ヘヴン!HEAVEN! 2

【Nコード】

N7713A

【作者名】

coccone ko

【あらすじ】

HEAVEN!ヘヴン!HEAVEN!(http://cocode.syosetu.com/n5896a/)の続編です。要望が多かったので続編を決意。若干八歳にして凄腕ハンター少女と、推定八百歳超えの見た目青年老人の、どたばたコンビによる探し物の旅は今日も続く。

始まりはいつも困難（前書き）

す、すいません。ミスって一回削除してしまいました。読者の方々には大変ご迷惑をお掛けいたしました。まことに申し訳ありませんでした。ちゃんと連載続けますので、ご安心ください。

始まりはいつも困難

「えーっと」

セインは辺りを見回した。

部屋の中には大雑把に置かれたテーブルや棚があり、その上には金銀の煌びやかな食器や小物、はたまた人形などが、それなりに綺麗に飾られている。

壁には古臭そうな甲冑や、サーベルが数本。他にも、異国のものらしい、珍しい織物やカラフルな衣装が吊り下げられていた。

そして、かく言う自分はいえ、剣の姿のままで、鎖でがんじ絡めにされて壁に飾られている状態だ。

「ここ、どこですか？」

自問してみるが、答えは出なかった。

事の発端は多分昨日。

駅馬車を降りて歩くこと数時間。

いいかげん足も痛くなって、お腹もすいて、キャロットと二人で町で買った地図に文句を言いながら、森の中を歩いていた。

辿り着くはずの村はいくら歩いても見つからず、コンパスで見ても、今まで辿ってきた道を地図の上で引き返してみても、道は間違っていないというのに、目的地はみつからない。

これは自分達が迷子になったのではない、地図が間違っているのだと結論がつき、引き返そうとしたがあたりは既に薄暗く、野宿をしようと、へとへとになった身体に鞭打っていた頃だった。

「ああ、キャル。幻かなあ、お屋敷が見えるよ」

「へ？」

深い緑色の木々の枝の上に、赤い屋根が見えた。

「あんたにしてはでかしたわ！セイン！」

「はー、ひとこと多いよ？」

ひよんなことから一緒に旅を始めてもう三ヶ月になる、小さな八歳の少女から、あんまり嬉しくないお褒めの言葉をいただいて、乾いた笑いを漏らす。

ふわふわの金髪の少女キャロットことキャルト、その隣に肩を並べる長身の眼鏡をかけたセインとは、これでも一応浅はかならぬ仲だ。なにせ少女の方はこの年で凄腕のヘッドハンターで、間の抜けた見かけの眼鏡青年の正体は、三ヶ月前にキャルトに引き抜かれ、五百年の長い眠りから覚めた伝説の聖剣、セインロズドだったりする。人のくせに何故剣なのかといえば、話せば長くなるので割愛。とにかく、これ幸いとばかりに屋敷の門をくぐれば、セインはなんだか不思議な感覚に囚われた。

「なんか、寒い？」

「そりゃそうよ、もう日が暮れているんだもの。すみませーん誰かいませんかー！」

キャルトは腕をさするセインにお構いなしに、屋敷の扉を叩いた。「すーみーまーせーん！」

どんとどんと、扉を叩きつけながら二、三度呼びかけただろうか。

ギ、ギギギギーイイイイイイイイ・・・

重苦しく蝶番の金属が軋む音と共に、中から真っ赤なドレスを身につけた少女が、ティベアを抱えながら出てきた。

「だあれ？」

年のころはキャルトと同じくらいだろうか。

あどけない少女の瞳は榛色で、縦ロールのツインテールは漆黑。陶器のように白い頬はふつくと自前の紅がさし、形は良くても、まだまだあどけない唇は仄かに淡いピンク色。一瞬、等身大の人形が、動いて扉を開けたかのように錯覚する。

稀に見る美少女だった。

「きゃあ！あなたかわいいわ！お人形みたい！」
初対面の少女に、キャルトが歓喜の声を上げた。

「キャルト、失礼だよ」

「だって、かわいいんだもの」

確かにフリルのふんだんに使われた赤いドレスに白い肌、大きな瞳、豊かな黒髪と、美しい少女の風貌は人形めいていたが、セインにはそれが不気味に思えた。

キヤルだって、白い肌に大きな青い瞳、ふわふわの、太陽みたいな黄金の髪を持ち主で、それなりのドレスを着たら、この少女と並んだって引けをとらないだろうと思う。

だが、赤いドレスの少女はなんだか違う雰囲気なのだ。

しいて言えば、どこかが冷たいような。

「あ、ごめん。今、ここには君一人？」

長身を屈め、眼鏡のずれを直して少女の顔を覗きこむ。きらりと、少女の瞳が光ったような気がした。

「お父様もお母様も、もうずっと帰って来ないわ。ここには、私とメーブル・チャイダンと、ピーターだけよ」

彼女のほかに、あと二人いるのかと、扉の奥をのぞき見たが、彼女以外の気配がない。

「そう。じゃあ、今はこのお屋敷のご主人は君という事かな？」

「そうよ。私がこの主人だって、ピーターが言っていたわ」

どうやら、お金持ちのご両親は随分と長いこと、このお屋敷を空けているのか、もしくは、既に亡くなっているのか……。

ピーターという使用人らしい者が、この少女を主人だと言っているのなら、後者の方の可能性が高かった。

「失礼なことを聞いてしまっでごめんね？僕はセイン。こっちは」

「キヤロットよ」

キヤルは少女を気に入ったらしく、自分で名乗ると手を差し出して握手を求めた。

「こんにちは。私はゼルダ。よろしくね？」

少女ははにかみながら、キヤルの手をとった。

僕の勘違いかな？

そんなことを思いながら、セインは二人の少女を見やる。

微笑む少女からは、先程の冷たい雰囲気は消え失せていた。

「申し訳ないんだけど、僕たち道に迷ってしまったようだ」

「あら、迷ったんじゃないわ。この地図が悪いのよ」

「え？」

「キヤル、話が進まないよ」

がつん！

足を蹴られてセインは思わず飛び上がった。

この同行者は少々、いや、かなり乱暴者で、セインはいつも殴られるなり叩かれるなり踏まれるなり蹴られるなりしている。

「見てよこの地図！」

痛みのあまり声も出ないセインを放っておいて、キヤルは鞆から地図を取り出してゼルダの前に突きつけた。

「このあたりに村があるって書いてあるのに、どこにもないのよ？間違ってる地図をつかまされたんだわ！」

「まあ。それはお気の毒」

ゼルダは小さな口元に手を当てて、にっこりと微笑んだ。

花が咲いたような艶やかさだ。

キヤルは一瞬、彼女に見とれた。

「何頬染めてんのさ。女の子同士でしょう？」
げし！

今度は足を踏まれてうずくまった。

「と、とにかく、そんなわけで、僕たち今晚だけでいいので、泊めてもらえないかな？」

涙眼で訴えれば、ゼルダがこっくりと頷いて、屋敷の中へと招き入れてくれた。

屋敷の中も見事だった。

キヤルなんかは、きれーいとか、すごーいとか、そんな言葉を連呼して、きゃーきゃー大はしゃぎだ。

少女趣味というかなんというか。

女の子なら誰でも好きだろう。

フリルとか、ぬいぐるみとか、かわいい小物で埋め尽くされた屋敷に、自分が浮きまくっているだろうなあと、セインは容易に理解できた。

あんまり、この屋敷の中に佇む自分というものは、想像したくない。

「ああああ、なんか居ても立ってもいられないって言うかなんて言うか！」

頭を抱えたところで、ゼルダがいつの間にか側にいた。

「キヤルが、お友達になってくれるのですって」

「そう？それは良かった」

キヤルも、同じ年頃の友達が欲しかったのだろう。これでも結構殺伐とした旅が続けているのだから、彼女にはいい機会かもしれないなかった。

こんな当てもない旅に、キヤルをつき合わせてしまっている、そんな負い目はあった。そんなことを言えば、いつもキヤルに叱られてしまうのだが。

「じゃあ、この屋敷にずうっといてくれる？」

「え？」

ゼルダは嬉しそうにセインを見上げてくる。

こんな、部屋がいったいくつあるのかも分からない広い屋敷に、使用人と自分しかないのだから、寂しいのだろう。

しかし。

「ごめん。それは出来ないんだ」

「どうして？」

縋り付いてくるような少女の瞳を、セインは見つめ返した。

この少女も、自分と同じような孤独を、味わっているのだろうか。永い時の中。気の遠くなるような深い深い時代の中を、セインは封印という孤独な戒めの中で、たった一人で眠り続けた。それを目覚めさせたのは、あのキヤルだ。

キヤルは、聖剣として利用されることを嫌い、不幸しか呼ばない

己を嘆いて自身を封印したセインを、光の方向へ導いてくれた。

聖剣セイロズドの封印を解き、彼を理想の楽園、エルドラドへ連れて行くと言ってくれた。

だから。

「僕らには、やらなきゃいけないことがあるんだ。だから、留まってははいられない。ごめんね?」

キアルのためにも、自分のためにも。

一箇所に留まることは許されない。

「あなた、やっぱりいらないわ」

急に、ゼルダの声色が凍りついた。

「え?」

天地が逆転した。

それが、最後の記憶だ。

転ばぬ先の骨董屋

「キヤル、どうしてるかな」

シヨックのあまり、セインはどうやら聖剣の姿を取ってしまったていたらしい。

鎖でがんじがらめにされて壁に飾られていた。

セインは剣の姿になったとき、人間体が鞘の変わりでもあるので、要するに今は抜き身のままなのだが、他の、鞘に収められた普通の剣と一緒に並べられていた。

どうやら、骨董品ばかりを置いてあるらしい室内を見渡せば、なんとなく嫌な予感がする。

不意に、部屋の奥にあった扉が、取り付けてあるベルをカラカランと響かせて開いた。

「はい、いらっしゃい」

続いて太った男が、入ってきた誰かを出迎えた。

「えー・・・・・・・・っとおおおお。もしかしてええええええええ？」
もしかしくなくても、ここは骨董屋だった。

その頃。

「ねえ、ゼルダ」

「なあに？」

キヤルは大いに困っていた。

「私、こういう服、似合わないと思うのだけど・・・・・・・・？」

真っ白なフリフリのドレスに、白い靴下、赤い靴に、真っ白なヘツドドレス。

もちろんゼルダとは色違いのおそろいで、彼女は昨日と同じで赤い色のドレスを着ている。

靴は黒だ。

「あら、そんなことないわ。とおってもかわいいわ！」

鏡には、色違いのおそろいのドレスを着た少女が二人。

金色の巻き毛の、ちょっと恥ずかし気な少女と、黒髪の巻き毛の、楽しそうな少女が、キラキラした室内で顔を寄せ合っている姿が映し出されている。

昨日からこんな調子で、ゼルダの着せ替えごっこを付き合っているのだ。

最初は楽しかったが、出てくる服がみな、着たこともないようなフリルとレースとリボンだらけのドレスばかりで、さすがに恥ずかしくなっていた。

ゼルダと一緒に入ったお風呂は、ピンク色の薔薇の花びらが浮いていて、香りも良かったし、猫足のバスタブはとても可愛らしくて気に入った。一緒に眠ったベッドはまああるくて大きくて、天蓋の繊細なレースが降り注いでロマンチックだった。彼女が離さないテディ・ベアは、あったかくて、ゼルダもいい匂いがして、ふかふかでぐっすりと眠れた。

夢のような生活だが、キャルは経験したこともない豪華な生活に、既に落着かなくなってしまうている。

「もう、セインの馬鹿はどこにいるのよ!」

ぼやいてみるが、昨日の晩から姿が見えない。

「ねえ、ゼルダ」

「なあに?」

次は何をしようかと、好奇心で瞳を煌かせるゼルダに、キャルは少々、言葉に詰まった。

「え、えっと、セインはどこかしら?」

「セインって?」

きょとん、としたゼルダに、キャルは溜め息をつく。

確かに見た目どおりの間抜けで、しかも薄らぼけっとしているが、あれでも黙って立っていれば、それなりの見た目で背も高いのだから、印象に残らないことはないと思うのだが。

「ほら、昨日、私と一緒にいた、背の高い、眼鏡をかけた薄らトン

カチ」

ひどい言いようだ。

「一緒にいた？」

ゼルダが小首をかしげる。

やばい。かわいい。

「そ、そうよ。ゼルダも話をしたじゃない？」

「そうだったかしら？」

口元に人差し指を当てて、少し考える風な仕草をしてから、ゼルダはにっこりと微笑んだ。

「知らないわ」

「・・・え？」

キャルの心臓が飛び跳ねる。

「そ、そんなはずないわ！だって、セインはしゃがんであなたに話しかけて・・・」

そこでようやく、キャルは気づいた。

昨日の夕食も、今朝の朝食も、綺麗なろうそくとかかわいいテーブルクロスで彩られた食卓に、セインはいなかった。

あまりにこの屋敷の雰囲気自分がかけ離れすぎていて、恥ずかしくて出て来ないだけかと思っていたのだが。

「だって、あのすつとこどっこいには、充分ありえそうなんだもの」
昨日、この屋敷に来て、中に入ってから、あの長身を見ていないのだという事に思い当たって、キャルの体内の血液は一気に下がった。

「あの馬鹿！」

くるりと回れ右をして、部屋の扉のノブまで手を伸ばす。

「どこへ行くの？」

すぐ耳元で、ゼルダの抑揚のない声が響いた。

ぱつと振り向けば、先ほどたしかに鏡の前にいた彼女が、キャルのすぐ隣に立って、微笑んでいる。

「あなた、セインをどうしたの?!」

綺麗なゼルダの微笑が、ふっと無表情に崩れた。

「だって、邪魔だったんだもの」

「・・・じゃま？」

セインが？何故？

「キヤルがお友達になってくれるって言ったのは、嘘なの？」
「は？」

どうしていきなり話題がそちらへ飛ぶのか。

「嘘じゃないわ。だって、私達、もう友達でしょ？」

キヤルはドアノブから手を離して、ゼルダを見つめ返した。

「セインだって、そう言ったと思うけど？」

「違うわ！」

ゼルダはティ・ベアに顔をうずめて叫んだ。

「違うって・・・」

昨日、ゼルダが自分に友達になって、と言ったとき、こんなに可愛くて綺麗な少女と友達になれる事がうれしくて、すぐにうなずいた。そのあと、彼女はセインのほうへと走っていったので、てっきりセインにも同じ事を聞いたのだと思っていたのだが。

泣き出してしまったゼルダの頭を、キヤルはそっと撫でる。

「セインったら、あなたになんて言ったのか知らないけど、泣くことなんかないわ。きっと誤解よ」

他の人間ならともかく、セインだからこそ、けしてゼルダの言う事を無下にはしないはずだ。二人の会話がどういふものであったのかは知らないが、多分セインのことだ。彼女に何か誤解をさせてしまったのだろう。

「ねえ、わかったから、意地悪しないでセインの居場所を教えてくださいなかしら」

何とか宥めすかそうと試みてるが、ゼルダはイヤイヤと首を振るばかりで、ティ・ベアから顔を離そうとしてくれない。

「もう、セインもセインよね。自分から出てくればいいのよ」

いい年をして、恥ずかしがるでもないだろうに。

何せ封印されていた五百年と、その前の三百年を足せば、八百歳は超えているわけで。

「子供返りじじい」

また、酷いことをボソリと呟くキャルだった。

「う、今、酷いことを言われた気がする」

胸に痛いものを感じて、セインは落ち込む。

胸といっても、今現在、姿は剣なので実際にはどこ、とも言えないのだが。

「困ったな。この状況は」

先程、骨董屋に入って来た客が、半刻ほどセインを見つめている。顎に手を当て、それはもう熱い眼差しで。

「お客さん、それが気に入ったのかい？」

こら店主。そんな声の掛け方をしたら、この客が購入を決意してしまうかもしれないじゃないか。それは困る。非常に、ひっじょーに、困る。

「おう、スゲエ業物じゃねえか。こいつあ」

指をさされて内心、汗をダラダラと噴き出しているセインだ。

「だろう？ 昨日手に入った代物でね」

「昨日？！ へえええ！ そいつは運が良い。いくらだい？」

ほら見ろおおおおお！！！！！！

「いっちょここは人の姿に戻ってはい、残念でしたとか、やらかせばいいのか？ いいやまて、そうしたら事が大きくなってえつとえつとえつと」

それよりも先に、そんなことをしたら巻かれた鎖で身体を締め付けられて、下手をしたら首をくくってしまうわけなのだが。それは事が大きくなるとかいう以前の問題だったりするのだが。

「悪いねえ、お客さん。それは売り物じゃあないんだよ」

「は？」

客と同時に店主の顔を見る。

「鎖で縛ってあるのはそのためさ。こいつ、ゼルダ屋敷のこぼし物でね」

店主が、ゼルダ屋敷、と言った途端に、客の男の、健康的な浅黒い顔色が、さっと青白く変わる。

「げ！あのお屋敷の？」

「物が良いんで、つい買っちゃったが、何があるか分かったものじゃないんでね。こうして括り付けてあるんですよ」

ゼルダといえば、確かあの少女の名前だ。

キヤルに、確かにそう名乗っていた。

では、ゼルダ屋敷とは、気を失う前までいた、あの屋敷のことだろうか。

「うひゃあ、いくら業物でも、それならこっちから願い下げだな」

「すいませんね、お客さん。代わりといっちゃあなんですけど、これなんかどうです？これだって骨董ですがね、いい仕事してましてね」
気味が悪いとでも言うように、髭の客はそそくさとサインから離れてしまい、店主の勧める他の剣へと興味を移した。

「………なんか複雑なんですけど」

そりゃあ、自分だってまともな剣じゃないくらいの自覚はいいかげん持っているが、昨日ちょこっと立ち寄ったくらいの屋敷のせいで、気持ち悪がられるのはどうなのか。

まあ、どうして骨董屋の棚に並べられているのか、自分でも記憶にないが、こうして剣の姿で飾られてしまっているところを見れば、どう考えても無意識に人から剣の姿に変わってしまったと考えるのが妥当だろう。それこそ、あのゼルダという人形のような美しい少女に気味悪がられて売られてしまったのかもしれない。

とはいえ、思いつきり頭を殴られた感が無いでもないのです、実際はクエスチョンマークだらけで整理のしようがなかったりする。ここにいる理由も、殴られた理由もわからないのだ。

それにしても、ゼルダ屋敷とは、やっぱりあの少女の屋敷のことなのだろうし、どうしてあの綺麗な少女が、こんなにも嫌われてい

るのか。

そりゃ、セインだって、あの少女に何かわけのわからない不安なものを感じはしたけれど。これだけ毛嫌いされる理由が分からない。聞いてみたいが、ただでさえ気味悪がられているのだから、話しかけでもしたら、どういう扱いを受けるものか。

「うー、困ったなあ」

とりあえず、この鎖だけでもどうにかならないものか。

「……長期戦でがんばるか」

手入れのときくらいは、さすがに鎖も外すだろう。その時に逃げるしかない。

いつ、この店主が店の骨董品の手入れをするかが問題なだけで。こればかりは店主がぐうたらでないことを祈るしかない。

「あうー、キヤルに怒られそうな予感がする」

すぐに抜け出せないのなら、絶対に怒られるに違いない。

どうやってキヤルの怒りの矛先を反らさせるか、今から悩むセインだった。

ピーター

「おかしいわ」

今日もセインの姿を一度も見えていない。

キヤルはさすがに不安になった。

おまけにこの屋敷はなんだか変だ。

昨日は気づかなかったが、ゼルダ以外に、他に誰か人のいる気配がない。なのに、食事の時間になればテーブルにはご馳走が並び、ティータイムにはちゃんとお茶とお菓子が用意され、就寝時にはベツドメイクされている。

ゼルダによれば、ピーターとかいう使用人が居るらしいのだが、ピーター一人でこれらの仕事をこなしてでもいるのだろうか。

相変わらずふわふわの、絹のレースを使った、ピンクのドレスに身を包み、キヤルはゼルダに見つからないように気を配りながら、屋敷の中をうろついていた。

台所、リネン室、水汲み場。

使用人のいそうな場所を覗いてみたが、誰も居ない。

台所にいたっては、あれだけの料理が並んでおきながら、使われているような気配がない。

野菜も肉も、調味料や小麦粉まで、いったいどこにしまっているものやら、見当たらぬのだ。

食器だけは、綺麗に棚に並んでいたが、届かなくて手にとることが出来ないで、きちんと見ることは出来なかった。

それでも、屋敷中が綺麗に掃除されている。

人の気配がないのに、埃一つないのは不思議だった。

「ピーターっていう人は、よっぽど働き者なのかしらね」

こんな広大な屋敷を、一人で管理するのは容易ではないはずだ。

一階の長い廊下に、扉が並ぶ場所に出た。

手前の部屋を開けてみれば、小ぢんまりとした部屋に簡素なベッ

ドとクローゼット。多分使用人部屋だろう。

それでもこれだけの数があれば、ちょっとした宿屋が出来そうだ。六つある扉を、順々に開けてみる。

使われていないのなら、雨戸くらい閉めてありそうなものだったが、どの部屋も空気を入れ替えるためか、開放的な大窓は開け放たれ、風にカーテンが揺れている。

ベッドメイクも掃除も、きちんとされていたが、やはり人がいない。

次に、それなら、と、二階の客室へと移動する。

一階の使用人部屋同様、四つある部屋は、使われてもいないのにきちんと整頓されて、すぐにでも使用可能な状態だった。

「どうということかしら？」

さすがにおかしい。

使用人が一人しかないのに、手際が良すぎる。三階建ての建物は、横に伸びて広く、廊下は各階とも一本しかないはずで、掃除の手順がやりやすいといえなさそうなのだろうが、今は昼前だ。たった一人で午前中に、これだけの仕事こなせるものなのだろうか。

おまけに、どこをどう探しても、あの長身の眼鏡が見当たらない。ゼルダに見つからないように動いているので、大声で呼ぶわけにもいかないのだが、それにしただってセインがいるような気配もない。最後の、角にある客室の窓辺へ近づいて、キヤルは庭を見下ろしてみた。

「中にいないなら、外かもね」

しかし、庭は手入れされた植木や花が風に揺れるばかりで、やはり人の気配がなかった。

「ピーターって、庭師の仕事までこなすのね」

顔も見つけない屋敷のたった一人の使用人は、いったいどんな人物なのだろう。

そもそも、ここにはゼルダ以外に人がいるのかどうか・・・？
そんな考えが、ふと頭に浮かんで、キヤルはぞっとした。

「そ、そしたら、このお屋敷、魔法でも掛かっているってことになるわね」

そう言って、無理に笑ってみた。

実際、そう考えた方が、この屋敷の状況は自然だった。ありえない話だが。

ふと、視界の隅で、庭の薔薇園の辺りに、人影が動いたような気がした。

「？」

窓から顔を出して、赤い薔薇の咲き乱れる庭を見れば、やはり人がいた。

「ねえ！あなたがピーター？」

キヤルは身を乗り出させて、薔薇の手入れをしている人影に話しかける。

相手はかなりぎょっとしたらしい。ビクリと肩を震わせて、恐る、といった風に、ゆっくりと振り向いた。

それは少々滑稽な風景だった。

美しく咲く薔薇に囲まれた男の顔は、醜くゆがみ、背は曲って駱駝のコブのようである。

「えーっと」

キヤルは言葉に詰まった。

「えっと、貴方が、ピーター？」

そう訊ねれば、ぺこりと頭を下げる。肯定の意味だろうか。

別に見た目がおかしいからといって偏見を持つキヤルではないが、赤い薔薇は、彼には、あからさまに似合わなかった。

「どちらかと言ったら、薔薇よりはタンポポとかカタバミとか、そっち系？」

そんなことを考えて、それも微妙であるので、ちょっと考え込んだ。

しかし、興味はすぐに、彼の周りの赤い薔薇の隣に咲く、淡い色彩の薔薇に移動した。

「ねえ、そのピンク色の薔薇」

キヤルの聞きたい事が分かったのだろう、ピーターはペコリと頭を一度下げる。

「こ、これは、昨日、の、夜、お嬢、さま、に、差し上げ、た、薔薇、です」

「お風呂に浮かんでいた花びらね？」

そう言えば、こっくりと頷いた。

「待って、今そっちへ行くわ」

キヤルは返事も待たずに、ぱっと窓から身を翻して、一階へと続く階段を目指した。

「うわあ。こうしてみると、また壮観」

薔薇に埋め尽くされた庭は、行ってみれば良い香りにも埋め尽くされて、遠目から見るとよりも迫力があつた。

「ピーター？」

行儀悪く、薔薇園が見える一階の窓から外へと出てきたので、散策できるように敷かれた庭の道からは、少々外れているところに出ってしまった。

「あれ？」

ピーターの姿が見えない。

変な場所に出てしまったために、彼の姿が見えないのかと思ったが、呼んでも返事がないところを見れば、もしかしたら、正式な一階の出口まで、キヤルを迎えに行ってしまったのかもしれない。

「庭への出入り口なんて、知らないもの」

困ったとばかりに首を傾げていれば、すぐ側でがさりと音がした。

「セイン?!」

「あ、お、おれです」

まさかと思って振り向けば、そこにいたのはピーターだった。

「あ。ごめんなさい」

隠れていたセインかと思ったのだが、よく考えればそんなはずも無い。

「そうよね。薔薇にセインなんて、ピーターよりも似合わないし」
キヤルは決め付けた。

「あ、あの、これ」

ピーターが、そうっと差し出したのは、一本の、あのピンクの薔薇だった。

きちんと棘が取られている。

「まさか、採ってくれたの？」

こっくりと、頷いた。

キヤルのために切りとって、棘まで丁寧に外してくれたらしい。

「ありがとう」

そう言えば、ピーターは嬉しそうに笑った。

「そうだ！」

「？」

思いついたように急に大声を上げたので、驚いたらしいピーターは、一歩下がった。

「驚かせてごめんなさい、それもこれもみんなあの馬鹿賢者のせいよ」

何気に全部セインへ責任転嫁。

「ピーターなら、セインの居所が分かる？」

広いこの屋敷を一人切り盛りしているのなら、屋敷のことは隅々まで知っているはず。

「せ、せいん？」

「そう、セイン！背が高くて眼鏡かけてて、なんていうの？ウドの大木みたいなヒョロツとした薄ら馬鹿なんだけど」

「は、はあ？」

その説明では良くわからなさそうだったが、首を傾げた後に、ピーターはこっくりと頷いた。

「そ、その、も、しか、して」

「知っているの？」

聞き返せば、困ったような顔をされる。

「ひと？ 剣？ どちらで、すか？」

「・・・は？」

それはどういうことか。

人前で剣になってしまったのか。有り得る話だが、普段から気をつけていたはずなのに。なにせ、セインのことだ。うっかりやってしまったのかもしれない。

「まあ、見られたってんなら仕方ないんだけど」

セインの正体は、伝説の聖剣、大賢者セインロズドである。なので、普段は人の姿をしているが、剣の姿にもなれる。

人の姿をしているときには、彼は聖剣の鞘の役目を担うので、体内に聖剣を仕舞っている形になる。剣の姿のときは、鞘となる体がないので、抜き身のままだという状態だ。

今では本人でさえ、人と剣、どちらが本当の姿なのかが分からなくなってしまうているらしい。

とりあえず、今までの経験上、海賊約一名を覗いて、セインの正体がバレたことは無い。

その海賊には、散々な目に合わされているので、できればお会いしたくない。彼の手下達なら、いくらでも大歓迎なのだが。

「お嬢、さまに、人、倒れてる、呼ば、れて、玄関、行きまし、た。そした、ら、剣、転がって、ました」

「あ、そうなの？」

どうやら見られずにはすんだらしいが、それは充分に怪しきう。

「その、倒れた、ひと、の、持ち物だったのか、も、しれませ、んが、お嬢様、に、言いつけ、られ、て」

「言いつけられて？」

ちよつと嫌な予感がした。

「売りました」

「へ！？」

キヤルは変な声を出した後、一瞬絶句した。嫌な予感というものは、どうしてこう、大概当たってしまうものなのか。

「う、売ったあああ？?!?!?!」
そりゃ、姿が見えないはずである。
薔薇園に、キヤルの絶叫が響き渡った。

可愛さ余って余りすぎ

「あ、やはり、剣、の、名前、なんで、すか」

「人でも剣でもどっちでもセインよ!」

「・・・えっと?」

セインというのが剣の名称なのか人の名前なのかと言われれば、正しくは人の時の名前はセインで、剣そのものの名前はセインロズドなのであるが、どっちにしろキャルにとって、セインはセインなので、ほぼやけっぱちな答えになってしまった。

もちろん、それはピーターには通じる説明ではなかった。

「セイン、さんの、持ちも、の、だったので、したら、申し訳、ない、です」

「いいから、売ったお店を教えなさい!」

なんにせよ、こうなってはセインを連れ戻すことが最優先事項だ。万が一にも売れてしまえば、どこへ行ったか突き止めるのも大変なことになってしまう。

「そ、それ、は・・・」

「何?」

困ったように視線をそらせ、どもる口調に輪をかけて、しどろもどろになるピーターに、キャルは詰め寄った。

鞘の無い抜き身の剣とはいえ、柄の先に備え付けられたアメジストだけでも見事である上に、柄も刀身も、聖剣というだけあって、それは見事な拵えなのだ。

「お、お嬢様の、お許、しが」

「ゼルダの?」

こつくりと、ピーターが頷く。

「・・・何だってゼルダの許可が要るのよ。セインは私の連れよ?！」

「そ、そうですが」

「私の持ち物を、勝手に売っておいて知らぬ存ぜぬはないでしょう？ゼルダだって、それくらいはちゃんと分かるはずだわ！」

キャルの迫力に気圧されて、ピーターの首が、どどん亀のように竦められていく。

「ピーターをいじめないで！」

甲高い叫び声に振り向けば、三階の、庭に向かって張り出たテラスの手すりの間から、ゼルダがこちらを見下ろしていた。

「どうして？キャル、私と一緒にいるのがそんなに嫌なの？」

大きな瞳に涙をにじませて、泣きそうなゼルダに、キャルは慌てて手を振った。

「ち、違うわ！セインを売った場所を教えて欲しいだけよ」

「・・・そんなに、あの背の高い人が良いの？」

「ゼルダ？」

セインのことは知らないと言っておいて、どうしてセインの身長を知っているのか。

「私に、嘘をついたのね？」

「私と友達になってくれるって言ったのはキャルだわ！」

「だからって、嘘について良いとでも？」

「友達になってくれるって言って、嘘をついているのはキャルだわ！」

会話が噛み合わない。

「セインがいるからって、どうしてゼルダと私が友達じゃなくなるの?!」

「あいつは私からキャルを奪い取ろうとしているわ！邪魔なのよ！」
ゼルダの顔は徐々に険しくなっていく。

可愛らしい少女の面影は、どどん醜く崩れ始める。

異様なゼルダに、キャルはようやく、自分がとんでもないところに迷い込んだことに気がついた。

「セインが不安がってたのって、あながち当たってたって事？」

悲鳴に近い叫び声をあげて、ゼルダは赤いドレスもかまわずに、

テラスから狂ったように躍り出た。

「キヤルは渡さない！あなたも私とずうっと一緒にいるの！」

三階から飛び降りたにもかかわらず、ゼルダはそのままキヤルめがけてゆっくりと歩き出す。

可愛らしい口元は大きく裂け、黒目がちの瞳は見開いて、桃色の肌は青白く変色してしまっていた。華やかなふわふわのドレスは、今では血の色に染まったかのような、恐ろしいドレスにしか見えなくなってしまうている。

「来るのよ！」

キヤルはピーターの手を引つかむと、ゼルダを振り向きもせず、に屋敷の外へと走り出した。

「ああもう、まったく！うすらトンカチがドジさえ踏まなきゃこんなことにならなかったのに！」

ゼルダの可愛さと屋敷の豪華さに釣られて長居した自分を棚上げにして、キヤルはいつもの口癖を、精一杯大きな声で叫んだ。

「セインを引っこ抜いてから、ろくな事がない！！！！！！」

「一晩明けちゃった・・・」

昨日目覚めてから丸半日以上が過ぎてしまった。

さすがに飾ったばかりの剣を、早々すぐに手入れするはずも無く、店主はコーヒークップやらワイングラスやら、細々としたものに手を付けてはいるものの、セインのところまではなかなか手入れをしてくれる様子はなかった。

あれから何人かの客が、やはりセインを気に入って、店主と交渉していたが、皆一様に、ゼルダ屋敷の名を上げたとたんに手を引いた。

「そんなに嫌われてるのに、この店主、よく僕を引き取ったなあ」
変なところに感心しつつ、セインは鎖で縛られたまま、ぼうつと店内を見回す。

外は少し曇り空のようで、窓の向こうが灰色がにじんだような色

合いだ。

店主は店の中を行ったり来たりで、商品の値札のチェックやら整頓やらをしている。結構仕事熱心なようで、ホコリや塵一つ、店内には見当たらない。

骨董品や、それを展示している棚などは、暇を見つけては綺麗に磨いていた。

「だったら、向こうの鎧とか槍とか剣とか僕とか、磨いてくれないかな」

夜中に抜け出そうと試みてみたものの、セインロズドの姿では動くこともままならず、セインに戻ろうものなら首をくくりかねず。考えるに考えて夜が明けてしまった。

「致命的だったなあ」

これが人の姿のときであれば、鎖に絡められようが、いかようにもできるのだが。

ひとり悶々と考え込んでいれば、気配が通じてしまったのか、店主がちらりとこちらを見やった。

「しかし、見事だよなあ」

仮にも聖剣。当たり前である。

「この刃の輝きといい、柄のしつらえといい、そこでこのアメジスト。国宝級じゃねえのか？これがあのお屋敷のお下がりじゃなきゃなあ」

お下がりじゃなかったらどうするの。

声に出して聞いてみたいが、恐ろしい答えが出そうである。

「まあ、見てる分には、減るもんでもなさそうだし」

見てるだけじゃなくて。

どうせなら手にとって見てみてくれれば何とかなるのに。

店主が、そうっと、手を伸ばしてきた。

おお！手に取るか！？

セインは心臓が飛び跳ねるくらいドキドキした。

「いや、やめとこ。くわばら、くわばら」

急に、店主はその太い腕を引き込めて仕舞った。

「・・・・・・・・呪うぞ」

「? ? ? ?」

思わず重低音で呟いた言葉は、店主の耳には辛うじて届かなかった。

セインとセインロズドの身の上

「うう、どうしたら良いか、考えたところで今現在剣の身。動こうにも動けないし。話しかけようにも・・・気味悪がられてるし」
ゼルダの屋敷が、そんなに気味悪がられているのなら、あの屋敷には何かあるはず。

そして自分が気を失ってしまった直前まで感じていた、あの肌寒さ。

「キヤル、大丈夫かな？」

あの人形のような少女は、キヤルと友達になる約束をしたと言って喜んでいた。なら、キヤルには危害を加えていないとは思うが、あの言い知れない肌寒さに、やはり一抹の不安がどうしても残る。

キヤルのことだから、大丈夫とは思いたい、相手は同じ年頃の少女だ。

すっかり気が良くなっていた自分の持ち主に、セインは自信が持てずにいた。

「はあー・・・」

肺と心の奥底から、長い長い溜め息が出た。

気がつけば窓の外はオレンジ色に染まり、夜が近いことを知らせている。

店主が、店の入り口のドアノブに掛かっていた札を、くるりとひっくり返して、扉を閉めて鍵をかけている。

どうやら今日もまた、閉店時間になってしまったようだ。

「う。これで丸二日目か」

店の片付けを店主が始め、カチャカチャと商品整理の物音が店内に響く。

個人経営の小さな骨董屋であるので、店内はさほど広くはない。それでも、こまごまとしたものから大きなもので、陳列しているものは意外に多い。

整理整頓がいきわたっているのと、ディスプレイが上手いので、狭い店内であるのに、それを感じさせない。

店主は小太りのオヤジであるのだが、案外器用である。それもこれも、骨董品への愛情のなせる業なのかもしれないが。

「鼻歌を歌いながら仕事ができるって、いいことだよね」

なんとなく、うらやましく思える。

ずっと、仕事といえば戦場であつたり会議室であつたりと、人生八百数十年と少し。あんまりやりたい仕事をしてきた記憶がない。

「そうだなー、こう、のんびり手作りの小物なんかをつくって、畑とか耕して、牛とか山羊なんかの乳絞りとか。してみたいなー」

おおよそ、自分の辿ってきた人生とは、全く正反対なことを夢見てみる。

「争いのない場所なら、僕だつて」

しかしそれは、考えてみても詮方ないことだ。何せ自分は聖剣なんて代物である。

聖なる剣であるなら、戦なんてももの、魔法の一つ、奇跡の一つ、そんなものでも起こせてしまえばいいのに。そうしたら、この世から争い事なんて、消し去ってしまうのに。

実際は、名ばかりの、ちょっと大分、常識外れの単なる剣で、大分長生き過ぎる只の人なのである。そりゃ、まあ、自分のような存在が、普通であるわけがないのだけれど。

「何で僕、剣なんかになっちゃってるんだろう」

愚痴っても仕方のないことだ。

青い空の下、緑色の畑で、野良仕事をする自分に思いを馳せてみる。

「……似合わないね」

あの、ゼルダ屋敷のフリルとレースの中にいる自分より、畑仕事をしている自分の方が、全然違和感がある。そう思う。

自嘲気味に笑った。

「さて、と、次はお前さんだな」

店主の声で、セインは我に返った。

少々物思いに耽りすぎたらしい。

見れば、店主がオイルで鎧を磨いている。

その隣には、既に磨き終わったと思われる、ピカピカの青銅の盾。そういえば、昨日はティーカップなんかの小物を磨いていた。今日は、大きなものを磨くのだとしたら、順繰りに手入れをしているのかもしれない。それでも今磨いている鎧だけでも、磨き上げるのは結構しんどそうだ。そのほかにも、あと二体、鎧は待ち構えている。

「あー、じゃあ、僕らみたいな武器にまで、手は回らないか」

しかし、店主の手際はすこぶるよかった。見る見るうちに、キュキュキューっと鎧を磨き上げてゆく。

「手馴れてるなあー」

感心して見ていれば、目が合った。

いや、正確には、今のセインには目はないのだから、自分の視線と、店主の視線がかち合っただけに過ぎない。

視線を感じられでもしたのだろうか。でも、今までこの姿のときに、相手に気配を悟られるようなことはなかった。では、これは単に。

視線を外さずに店主は、じいっとセインロズドを見つめている。自分が只の剣ではない事がバレでもしたのかと、セインは汗が滝のように全身から流れるような心境に陥った。

しかし、すぐに店主は、もう一体の鎧の手入れに取り掛かった。

また、手際よく磨き上げてゆく。

しかし、先程の鎧のときとは違って、ちょこっと手を止めてはチラとこちらを見やる。

鎧は専用のテーブルの上に、各パーツ毎にバラされて丁寧に磨かれているのだが、こちらを見やる頻度が、徐々に増していく。

気になってはくれているようだったが、そんな見られ方をするのは、正直セインも落ち着かず、なんと言うか。セクハラでもされて

いるような気分だ。

それでも、気がつけば磨き上げたパーツはあっという間に組み立てられて、最初の鎧の隣に並べられた。

仕上げに値札のプレートを、手に持たせられている。

そして、最後の一体に店主が手を掛けた。

やはり、各々のパーツに分解されるのか、背伸びして腕を胃に伸ばした。

「あれ？」

店主は体を伸ばしたまま、ぴたりと動きを止めた。

どうしたのかと思えば、チラリ。

伸びたそのままの姿勢で、セインロズドを見ている。

「ふう」

店主が溜め息をついて、鎧から身を引いて、もう一度。
チラリ。

「ああ、どうしようもねえ！」

そう怒鳴って、頭をガリガリとかきむしった。

「気になってしょうがねえや！」

ほぼ投げやりに吐き捨てると、どこかとセインロズドの元へ大
またに歩み寄り、からめた鎖に手を掛けた。

「おお！」

セインは喜んだが、一度手を引き込められている。

「解け、解け」

呪いの言葉のように、心の中で電波を送ってみる。すると、ぴた
りと店主の手が止まってしまった。

「ああ！」

また、元の木阿弥に帰してしまうのかと思われたが、決心がついたように、店主は一つ大きく頷くと、真剣な面持ちで鎖をセインロズドから外し、ついに手にとって、鎧を手入れしていたテーブルの上に置いたのだ。

大脱走大脱出!?

「ううむ。何度見ても、骨董とは思えねえ。一見、新品に近いが、しかし、古いのは確かだな。こんな上等な刀身、今や打てる鍛冶屋がいねえ。・・・刃を外してえんだがな。どこだ？」

手にとって、ひっくり返したり、さかさまにしたり。

「鋼の質といい、こりゃあ、相当古いんじゃないか？おかげでこの俺が、つくりが解らねえとは」

あちこち分解できないかと引っぱられたりひねられたり。

「これだけ綺麗なまんまとは。よっぽど大事にしてたってのかねえ？おっと、ここか？」

たがめつすがめつ、全身をいじられる。

「僕は分解できません！」

大声で叫びたいのを必死に堪える。

「うーむ」

店主は顎をつまんで唸り始めた。

「籬を外せば・・・」

「籬なんて僕にはありません！」

いろいろ珍しいつくりであるらしい。そもそもが珍品中の珍品であるのだから、他の常識的な剣とはわけが違う。

「どら。解体はできなくっても、磨いてやるくらいは、できっからな」

セインを机の上において、店主は店の奥に行ってしまった。どうやら手入れするための道具を取りに向かったらしい。

「今だ！」

セインは慌てて、元の人の姿に戻ると、机の上から滑り降り、出口に向かった。

「・・・・・・あれ？」

出口に向かったところで、目端に見覚えのある物体が。

「もしかして、僕と一緒に売られちゃったのかなー？」

狭い店の隅の、珍しく埃でも溜まっているんじゃないかというくらい目立たない場所に、やたら見慣れた大きな四角い物体が、無造作に置いてあった。

急いで駆け寄り、蓋を開けてみれば、幸いにも、全く手をつけられていないようだった。

なにせ、セインが畳んだキャルの衣服が、少しも乱れずにそのままだ。

「骨董じゃないと、興味が無いみたいだね。店主」

この分では、本当に、引き取ってすぐに、中身も確かめずにこの場所に置かれ、忘れ去られていたようだ。

「気がついて良かった」

とりあえずハンターパスと財布を確認。

小さい針金のような道具を引っ張り出すと、きつちりと蓋を閉めて、セインは改めてドアノブに手を掛ける。

「ここを出たら、キャルに荷物を減らせないか、交渉しよう」
相変わらず、キャルのカバンは重いのだった。

「あ、あの」

「何よ話し掛けないで！」

キャルはピーターの手を引っばって、広い屋敷の庭を走る。

薔薇園を抜け、噴水の横を通り、アーチをくぐる。

「でも」

キャルに引っぱられ、足をもつれさせながら走るピーターは、後ろを何度も振り返っている。ゼルダが気になるのだろう。

「ああ、もう！出口はどこよ！？」

広すぎて、庭の出口が分からない。

屋敷沿いに、ぐるっと回ればよかったのだが、そこまで気がつかなかった。

「・・・しまったわ」

これではセインのことを悪く言えないではないか。

「まあ、本人いないんだから良いってことにしとけばいいし」

そんなことを言っている間に、庭の隅の、森まで来てしまった。

森の中に入ってしまったえば、ここに来たときと同じように迷子になっ
てしまうかもしれない。

「ちょっと！ピーターだったらわかるでしょ？！」

「え？」

「出口よ！出口！」

背中が曲がったピーターの胸座は、ちょうどキヤルにも届く位置にあるものだから、キヤルはがつつりと、ピーターのシャツの胸元を掴みあげた。

「こ、ここを、左、で、す」

顔を真っ赤にしながら、ピーターが呻く。

「行くわよ！」

そのまま、言われたとおり左に方向転換。庭に戻ってしまうが、この際仕方がない。自分はこの庭のことは全く分からないのだから振り向いてみたが、今のところゼルダの姿は見えていない。

「このまんま走って、ゼルダにはちあわせなんてことになったら、一生嘔吐き呼ばわりしてあげるからね？」

ピーターがキヤルをゼルダの元へ誘導している可能性も拭いきれず、キヤルは前を見ながらピーターに確認を取った。

「お、おれ、嘘は言い、ませ、ん」

きっぱりと言い切るピーターに、キヤルは意外なものを感じたが、結局のところ、彼は単に正直者であるだけなのかもしれない。

「それは良かったわ」

「で、でも」

「何？」

「森、に、入らない、で、庭、ぬ、抜けるには、お、お屋敷、戻らないと」

「.....」

果てしなくうんざりしながら、とにかくキヤルは、ピーターの腕をしっかりと握り締めて、ひたすら走ることにした。

「どっちにしろ、カバン、取りに行かなくちゃいけないしね」

自分の大切なものが、全て入ったカバンが、そういえば手元に無い。

まさかいきなり逃げ出すことになるとも思っていなかったものだから、どこに置いたか、確認も取っていなかった。

「あ、の」

「はい？」

「カバンって、お、大きくて、車輪が付いてて、お、お、重いので、すか？」

走りながらなので、あまり返事をしなくなかったが、そのカバンはどう聞いても、自分のカバンとは思えない。

あの中には、身分証明書でもあるヘッドハンターパスも、大事な武器も、ついでにセインの宝物まで入っている。

さらについて言えば、着替えも財布も、全部あの中だ。

「そのとおりね。まごうこと無き私のカバンね」

「そ、そう、です、か」

しゅんとしてしまったピーターに、キヤルはイラつとした。

「ねえ、ピーター？」

先ほどの噴水の前まで戻ってきていたが、キヤルはかまわずに立ち止まった。

多少、息が上がってしまったているが、それどころではない。

「なんでそこで、あなたが申し訳なさそうに、しゅーんとするわけ？」

急に立ち止まったキヤルに合わせて止まったために、体制を崩して尻餅をついてしまった、この屋敷の、たぶん有能な使用人を、キヤルは見下ろした。

「まさかとは思うけど」

「あ、の。そ、それ、も、お嬢さ、ま、の、言いつけで」

「・・・・・・・・・・・・・・・・セインと一緒に」

もう、事態が把握できてしまったが、確認せずにはいられない。

「売った、のね？」

こつくりと、ピーターが首を縦に、ゆつくりと振った。

キヤルの眉間には、年に似合わず皺が刻まれ、眉尻には青筋が浮かんだ。

「ほんつつつつつきで、信じられない！！！！！」

空に向かって、キヤルが吼えた。

なんにせよ、今は手ぶらだ。

辛うじて、いつも両足に備え付けてあるホルダーに、反動が小さくて使いやすい、お気に入りハンドガンが二丁。

回転式ではなく、マガジンなので弾もまあまあ入っているのが、不幸中の幸いか。

「おかげで、屋敷の中に戻る手間が省けたと思っとくわ」

色々な大事なものの事は、とにかく頭の隅に追いやるようにする。
「お財布とかハンターパスとか、まあ、ちよつとどこでなくドキドキだけでも！今できることをする！」

このとき既に、セインがキヤルのカバンを発見していたのだが、そんなことなど知る由もないので、声に出して自分に言い聞かせる。

「ごめ、ん、なさい、です」

素直に謝るピーターに、キヤルは溜め息をつく。

「仕方ないわ。あなたはあなたのご主人様の言いつけを守っただけなんでしょう？」

「で、も、迷惑、かけ、ました」

丸い背中をさらに丸くして、うつむくピーターは、本当に反省しているように見える。

「・・・・だったら、ご主人様が間違っていると思ったら、はっきり言わなきゃ！それが忠義ってものでしょう？」

「で、でも」

「でももへったくれもない！ピーターが甘やかすから、ゼルダは我

俣なのよ。いくら目上の人に言われたからって、やってはいけない事ってあるわ」

「はい・・・」

「ゼルダなんか、まだまだ子供なんだから、ピーターがしっかりしなきゃ!」

「へえ・・・」

自分だってまだ八才なのだが、ここは都合よく無視をする。

「分かった?」

「へえ。申し訳、ねえで、す」

「分かったなら、出口にさっさと案内する!」

キヤルは腰を両手で掴んでふんぞり返る。

人に説教をするのはかまわないが、それがこんなに偉そうでいいのだろうか。

セインがいたら、心の中でひっそりと思ったことだろう。

噴水の水で顔を洗ってさっぱりすると、キヤルはピーターを連れて、薔薇のアーチをくぐって芝生の庭へと走り出した。

「ピーター! どこ? どこなのピーター!」

薔薇園の向こうから、ゼルダの甲高い叫び声が聞こえた。

「お、お嬢、さま」

ピーターが、急に立ち止まったものだから、キヤルは繋いでいた手を引っぱられて、後ろへよろけて転びそうになった。

ピーターは後ろを振り返って動こうとしない。

「ピーターアアアアー!!!」

彼を呼ぶ、そのゼルダの声は、狂気を孕んでいるように思えた。

「ピーター! ピーターったら!」

押しても引っぱっても、その場から動こうとしないピーターに、キヤルは諦めた。

どうしたって、ピーターはゼルダの使用人なのだから、キヤルの言う事より、ゼルダの言う事を聞くに違いなかった。

「お願いピーター! 出口を教えて!」

これ以上、案内させるのは不可能に思えて、キヤルはピーターの顔を掴んで自分に向けさせた。

ゼルダに捕まれば、屋敷から脱出するのは、今よりもずっと難しくなる。

キヤルは必死だった。

ゼルダとゼルダ屋敷

「薔薇園を避けて屋敷から抜け出すにはどうしたらいいの?!」

薔薇園に戻れば、ゼルダがいる。それでなくとも、ピーターとキヤルを探しているのだから、いつ見つかったもおかしくはない。

「キヤルー? 私と、遊びましょう?」

うっとりと言ひかけるような口調に、キヤルはゾツとした。

先程の、ベランダの上で見た、ゼルダのおぞましい顔。

可愛らしく、美しい彼女の顔を知っている分、あの、目をむき出しにして掴みかかってきた変貌ぶりが、恐ろしく思えた。

しかも、自分でさえ飛び降りるのをためらう高さから、平気で飛び降りて見せたのだ。

普通じゃない。

「ピーター! キヤルを知らない? ねえ? ピーター!」

再び聞こえてきた声に、キヤルは思わず身を屈めて、噴水の下に隠れた。

声は先程より、幾分近づいてきている。

「ピーター。私、ゼルダの友達でいたいって思ったのは本当よ。でも、セインは私の連れなの。あなたがゼルダを大事に思うように、私にも大事な人がいるの」

見上げるキヤルに、ようやくピーターが振り返った。

「だ、大事?」

「そうよ。大事な人と、大事な約束があるの。だから、私はこのお屋敷で暮らすわけにはいかないの」

「で、でも」

「ゼルダとは、この屋敷に暮らさなくなつて、友達でいられるわ。友達ってそういうものでしょう?」

あのまま甘い生活をしているなんて、そもそもキヤルには無理な話だ。

自分は深層の令嬢なんかではないし、籠の中の鳥みたいに、狭い世界で生きているなんて、到底我慢ができそうにない。

それに。

「私には、セインと約束があるの」

「剣と、約束？」

「そうよ。あいつが剣だからこそ、交わした約束よ」

セインが剣であるために、長い間背負ってきた宿命を断ち切るために。キヤルが自分から言い出した、大切な大切な約束。

絶対に、違えることなどできない。それがたとえ、伝説のシロモノでも。

必ず見つけ出して、セインをそこへ送ってやるのだ。

「……」

「いいわ。一人で何とかするから！」

押し黙ってしまったピーターに、キヤルは仕方がないと腰を上げた。

ゼルダを主人とする彼に、屋敷から抜け出す手伝いをさせては、ピーターの意に反するものになってしまうのだろうから。

「キ、キヤル、様」

「？」

一歩踏み出したところで呼び止められる。

「噴水を、右、薔薇園、の、隣が、ハーブ園、で、す。ロ、ロック、ガーデン、だか、ら、岩、まぎれ、られ、ま、す。その、まま、屋敷、入れ、る」

ロックガーデンとは、岩山に見立てて作られた庭のことで、人工の岩の丘や崖なんかに、植物を植えてある。

身を隠しながら進むには、ちょうどいいかもしれない。

たぶん、かなり勇気が必要だったのかもしれないピーターの助言に、キヤルはすくと背を伸ばして立ち上がり、足早にピーターを捕まえて、その頬にキスをした。

「ありがと、ピーター！」

満面の笑みで礼を言って、びっくりして固まったままのピーターに背を向けて走り出す。

「見つけたアアアア！！！」

「！」

黒に近い、赤い薔薇の花びらを散らして、ゼルダがキャルに飛び掛る。

頬や腕や、服に隠れない露出した白い肌が、薔薇の棘で傷だらけだ。

ふわふわの、薔薇のように真っ赤なドレスも、あちこちがビリビリに破けてしまつて、見る影もない。

その姿に驚いたが、とにかく今は、逃げ出すことを念頭にする。
ドン！

一発だけ、撃ち放つ。

もちろん威嚇射撃だが、ゼルダには効果があつた。

見開かれた目をさらに見開いて、一瞬、動きが止まつた。彼女の頬の脇を狙っただけで、弾は掠りもしていないのだが、驚かすには充分だったらしい。

その隙を逃さずに、キャルはすぐさま駆け出した。

「キャルの嘔吐き！！！！」

ゼルダの絶叫が追いかけてきたが、キャルはかまわず走る。

嘔吐きと言った声は、元のゼルダに戻ったように、今にも泣き出しそうな声だった。

しかし。

「ごめん、ゼルダ。でも、もうダメよ」

この屋敷が、おかしくなったのはいつ頃から？

ゼルダの様子がおかしかったのは、一体いつからなのか。

薔薇の棘で出来たであろう、無数の彼女の傷には、血が一滴も出ていなかった。

背後から、店主の上機嫌さが分かる鼻歌が聞こえてきて、セイン

は焦った。

「うわわわ」

慌てて鍵を開けて外へ飛び出し、針金状の小道具で、外の鍵穴から鍵をかけ直す。普段とは逆の行動をとって、小道具をカバンの元の位置に戻した。

きよろきよろと、辺りを見回せば、幸いにも人影もない。

ホッと胸を撫で下ろしたところで、店内から絶叫が響いた。

「わわ！」

店の横の隙間に身を隠して中を窺えば、店主が血相を変えて、作業台や床の上やら、あちこちを、セインを探して、熊みたいにウロウロしている。

「まさか！」

店主が思いついたように走り出して、店のドアノブに手を掛けたが、鍵は掛かっている。

扉は押しても引いても開かなかった。

セインが鍵を掛けたのだから、当たり前なのだが、そんなことは露と知らない店主は、盛大に頭を抱えた。

「盗まれたわけじゃねえのか？・・・って、てえことは・・・？！」

見る見るうちに、店主の顔が青ざめていく。

「つ、剣が消えた！」

白目をむいて、店主はその場に倒れこんでしまった。

道具を取りに行っている間に、鍵のかかった店内から、一本の剣が消えた。

しかも消えた剣は謎めいたつくりで、おまけにその出所は、気味も悪いあのゼルダ屋敷である。と、なれば、呪いか何かが掛かっていたのか、とにかくお化けみたいな剣だったに違いない、という結論に達したようだ。

「う、うまくいったかな？」

わざと鍵をかけたのには、後を追われないように、妙な勘違いを

してもらわなければならないのだが、かなり効果的だったようだ。
「ごめんなさい！」

小さく謝ると、セインはカバンを引きずって、とにかく落ち着ける場所を探した。

全く道が分からない現状で、無闇にあのお屋敷を探しても仕方がない。とにもかくにも、自分がどこにいるのか、位置の確認をしなければならなかった。

カバンの底の、車輪の鳴らすガラゴロという重苦しい音を聞きながら歩けば、程なく、大きな通りに出た。

幸いにも、ガス灯の下にベンチが置いてある。

そこに腰掛けて、キャルのカバンから、事の発端のきっかけになった、あの地図を引っ張り出してみた。

おもむろに広げ、最初に辿った道を探す。

「あ、あった。ここだ」

すぐに見つけたそれは、やっぱり、あの森の中に集落があることを示している。

「うーん。地図が間違っているなんて、あんまりないんだけどな」

とりあえず、あのお屋敷の建っている場所が、この集落の中と見て間違いがなさそうなので、骨董品の剣を売ったのなら、この村にゼルダ屋敷の噂が広がっているところをみても、近場だろうと、アタリをつけてみる。

「となると、ここ、かな？」

迷い込んだ森のすぐ側に、少し大きめの村があった。

そこは、森に入る前に、セインが宿を取ろうと提案した場所だ。

「だから言ったのに。近道だからって、森の中を行くからこんなことになるんだよ」

本人がいたら、間違いなく拳が飛んでくるところだが、今はいいので心おきなく文句が言える。

実は、今回の旅の目的地は、この森とは全く関係がなかった。単に通り道だったただけなのだ。

だから、わざわざ歩きにくい森の中を通るより、ちょっと回り道をしてでも安全な道を選びたかったのだが、連れの少女が、近道のほうが良いと、半ば強引に森の中を選んだのだった。

小さな森であったので、仕方なく賛同したものの、今となっては後悔するばかりだ。

「今度はキヤルがいくら何を言っても、僕の意見を通すぞ！」

何せ今現在こんな状況に陥っているのだから、次回があったとしたら、うまく言い聞かせることができるかもしれない。

などど、半分以上不可能に近い決意を固めてみるセインだった。

「それにしても」

これからどうしたものか。とりあえず、この村の名前を確認したい。

近くにある看板に、一通り目をやってみるが、住所らしきものは書かれていない。

「あのー」

「うわ！びっくりした。な、なんですか？」

通りがかりの人に、声を掛けたら飛び上がって驚かれた。

「驚かせてすみません。つかぬ事をお聞きますが、ここの村は、なんていう村なんでしょうか？」

長身のセインを、呼び止められた仕事帰りらしい丸鼻の親父は、珍しいものでも見るように見上げてくる。

「あ、あの？」

視線に気まずくて、もう一度声を掛けてみる。

「ああ、すまんすまん。兄ちゃん、背がでかいねえ」

笑って返されて、警戒されたのではないらしいことにホッとする。

「あー、よく言われます」

「どのくらいあるんだい？」

「随分昔に測ったきりなんで、忘れました。えっと、それより？」

困ったようなセインに、男はようやく気がついて、恥ずかしそうに笑った。

「ああ、すまないね。ここはダンゴン村というのさ。旅の人かい？」
その名前は、やはり自分が立ち寄ろうと提案した、地図に表記されている、あの村の名前だった。

「ええ。実は地図が間違っているようでして、ちょっと困ってるんです」

本当はゼルダ屋敷に行きたいのだが、それを打ち明ければ、骨董屋で見た客達のように、逃げられてしまいそうだったので、なんとなく伏せてしまった。

「どれ、見せてごらん」

二人でベンチに座りなおして、男同士頭を付き合わせる。

「この森の中の村に行こうとしたんですけど」

いくら歩いても村に辿り着かず、引き返してきたと説明する。

「あー、この村はね、潰れちまってもうないんだ」

「え?!」

と、いうことは、地図は間違っただけだったということか。

「なんだい、村に知り合いでも居たのかい？」

「ああ、いえ、そういうわけじゃないんですけど」

「なら、行かない方が懸命だな」

溜め息混じりに、地図を畳む男の言葉に、セインは不信を抱いた。
「何故です？だって、地図に書かれた村の辺りまで行ってみましたけど、森しかありませんでしたよ？普通なら、家屋の残骸とか、道の跡とか、そういったものがあるはずでしょう？」

村があったというわりに、人々の生活の跡が見受けられなかった。
だから、地図が間違っていると判断したのだが。

「あそこは、きこりの村だね」

「きこり？」

木を伐採し、それを売ったり、加工したりして生計を立てている、森と暮らす人々をきこりと呼ぶ。

彼らは森と共生するために、普通とは違う集落を作る。道は石畳などを使わず、草を刈って土を整え、家々に垣根は作らず、適当に

森の中に点在する平地を利用して家を建てる。

その家も、彼ら独特の技術で、石堀や漆喰なんてものは使わず、丸太や削った木をそのまま使う。

朽ちてしまえば、点在する家々は探そうと思わなければ見つけないだろうし、道は獣道と化してしまう。

「見つからなかったわけですね」

納得がいったが、それではあの屋敷は一体なんだったのだろうか。セインの疑問に気がついたわけではないだろうが、親父は口が重いとでも言いたげに、話を進めた。

「あの村には、ゼルダ屋敷と呼ばれる屋敷がある」

それは、今セインが一番聞きたい屋敷の名前だった。

村と屋敷の謎

「ゼルダ屋敷には、近寄らないほうがいい。分らず引き返して来たってんなら、兄ちゃん、運が良かったなあ」

はい、と笑顔で、地図を返される。

「あの、ゼルダ屋敷って？」

返された地図をカバンにしまいながら、もっと詳しく話を聞こうと身乗り出させた。

「あ、ああ。旅人に聞かせる話でもねえんだが……。おもしろ半分に屋敷に近寄られても困るしな」

少し考えてから、一度溜め息をついて、親父はセインの顔を、真剣な面持ちで見上げた。

「あのお屋敷は、元々この領主の屋敷でね。きこり達に頼んで、体の弱いお嬢さんのために建てた屋敷だったんだ」

それが、三年ほど前に流行り病があつて、森の中のきこり達も大半が死んでしまった。そうして、被害は当然、屋敷にも及び、使用人はもちろん、若い領主の娘までが病に倒れて、あっけなく亡くなつてしまった。

「領主様は腕の良い医者や薬師をかき集めてお嬢さんの治療にあたったが、こんな辺鄙なところだろう？ 医者たちが辿り着いた頃にはもう手遅れでね。豪華な屋敷だけを残して、きこり達は場所を移し、生き残った使用人も、一人だけ除いて引き上げちゃった。それが、あのゼルダ屋敷ってワケだ」

それだけを聞けば、悲劇的ではあるが、この村の人々が、きこりの村全体を避けこそすれ、あの屋敷だけを怖れる理由にはならない気がした。

それに。

「あの。ゼルダ屋敷のゼルダっていうのは……？」

「ああ。亡くなったお嬢さんの名前さ。そりゃあ、人形みたいに綺

麗で可愛いお嬢さんだったさ。それが、あんなことになるなんてな」
「あの。ゼルダというお嬢さんは亡くなってしまったんですね？」
ゼルダという少女が亡くなったというのなら、あの屋敷で見たゼルダは何者なのか。

「そうよ。亡くなったはずなんだよ」

親父は眉間に皺をつくり、うつむいた。

「オレだって、お嬢さんの葬儀に出た。小さな棺桶が、土に埋まっていたのを、この目で見たんだ」

「それじゃあ・・・？」

とうの昔に亡くなってしまった幼い少女を、どうしてそこまで恐れているのか。

「それが。最近になって、生き返ったらしいんだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

ぶるりと、自分自身を抱きしめて、青ざめながら震える親父には悪いが、セインには理解不能だった。

死んだ人間が、生き返るなんて事が、あるわけがない。

なにせ、セインは人生経験が豊富すぎるほど豊富である。その分、余計なくらい知識も豊富であるうえに、彼自身の好奇心から、様々なことに無駄に詳しい。

が。

生き返った人など、お目にかかったことがない。

ごく稀に、そんな噂を聞きつけて、調べてみればそれは、まあ、仮死状態だったのを間違えてしまったとか、そっくりな誰かと見間違えたとか、大体がそういった、いわゆる勘違いであった。

三年も前に亡くなった者が、月日を経て甦るなど、胡散臭いにも程がある。

「お前さん、今オレを馬鹿にした目で見ただろう？」

半目で睨まれて、セインは慌てて両手を振って否定した。

「あ、いや、馬鹿にしたわけじゃなくてですね。死人が生き返るなんて、ゾンビじゃあるまいし」

「だろう？だから、気味が悪いってんだ」

「・・・ああ。そうりゃあ、そうですね」

死人が生き返れば、それだけで充分すぎるほど気味が悪い。

「といっても、オレがしっかり見たわけじゃないんだけどな」

「そうなんですか？」

見たことがないと言うのなら、生き返ったという話そのものが、噂でしかなくなってしまふ。

「当たり前だろう？わざわざ確かめに行くなんぞ、そんな気持ちの悪いこと、できるかよ」

汚いものでも見るような目つきで、人を見るのはやめていただきたい。

「じゃあ、なんで生き返ったなんて、わかるんです？」

「そりゃ、見たって奴がいるからなあ。ほれ、屋敷に一人だけ使用人を残したって言っただろう？」

「はい」

「その使用人が、ドレスだの二人分の食材だのを、注文するようになってな。それで、届けに行った奴が見たってことになった」

それでは何の確証もないではないか。

「見間違いつてもあるんじゃないですか？」

「見間違はずがねえ。村の連中は、なんだかんだで領主様には世話になってる。お嬢さんの事だって、皆で可愛がってたんだ」

興奮のためか、親父の口調が、どんどん友人にでも話すかのような口調に変わる。

「でも」

「ああ。言いたいことは分かる。だけどな。亡くなったお嬢様のサイズのドレスの注文を、仕立て屋の主人が、あの屋敷から貰った事が始まりよ」

親父は、今から話す事が、タブーであるかのように、急に声をひそめた。

「ドレスの注文だけじゃ、その領主様が娘さんの死を悼んで、とか、

そういう事になるんじゃないですか？」

つられて、セインまで声が小さくなる。

男二人がベンチに座り込んで、頭をつき合わせてヒソヒソと喋るというのは、なんだか色々な意味で、怪しい妙な光景だ。

「ばっか、おめえ、始まりだっつただろうが。聞いて驚け？」

親父がさらに顔を近付ける。鼻と鼻がくつつきそうさ。

「仕立て屋の主人が、屋敷にドレスを届けに行ったら、その死んだはずのお嬢さんに、玄関で出迎えられたんだよ！それも亡くなったときのままの年恰好でだ」

それでは、たとえ亡くなったというのが間違いであつたとしても、ゼルダという少女は成長していないという事になる。

「実は妹さんがいたーとか、そっくりな親戚の子供だったーとか、そういう事だったり？」

「するわけねえだろ」

血が繋がっていたところで、瓜二つなんてことは、滅多にあるものではないうえに、親戚の娘を、廃村の真ん中にあるような、使用人が一人しかない屋敷に置いておく理由がない。

「それから、ちよくちよくドレスの注文が入るようになった。全部ゼルダお嬢さんのサイズさ。あの屋敷にはピーターしかいねえ。そんな大量のドレスをどうするっていうんだ？」

娘を悼んでのこととしても、何年か経ってからいきなり、というのもおかしい話だ。

「仕立て屋だけじゃねえ。あの屋敷に食料を運んでる奴が言うには、二人分の食材を注文されるようになった。しかも、ドレスを届けに行った仕立て屋が、お嬢さんを見たって言うのと、食料の注文が増えたのとはほぼ同時だってんだ」

「なるほど」

ピーターの分だけでいいはずの食料が、亡くなったゼルダかどうかは別にしても、その娘の分まで必要になった、ということか。

「・・・おめえ、まだ疑ってやがんな？」

ジトリと睨まれて、セインは引きつった笑みを作った。

「あははー。すみません」

「まあ、この話は、今じゃ村中で持ちきりの癖に、暗黙の了解ってヤツで、みんなあの屋敷にゃ近寄りたがらねえ」

「じゃあ、余計に真偽の程が分からないじゃないですか」

「ところが、仕立て屋が屋敷でお嬢さんを見たっていうのは一度や二度じゃねえんだよ。それに、食料を屋敷に下ろしてる連中からもお嬢さんを目撃したって話が出てる」

「そんなに見てる人がいるなら、いつそ確かめてみたら良いじゃないですか」

「領主様に、一度亡くなったお嬢さんは、実は生きてらっしゃるんですか？ってか？」

それはそれで、かなり聞きづらいものがある。それに、村人達は葬儀に参列しているのだというのだから、余計だろう。

では、ピーターという使用人に、直接聞いてみたらどうなのか。その、ゼルダという少女本人に、という手もある。

「ところが、村で噂が広まってから、ピーターの奴、態度がおかしくなりやがった」

「どういことですか？」

亡くなった少女が生きていたというのなら、喜ばしいことのように思えるのだが。

「ドレスや食料は、届ける時間を指定するようになって、自分で屋敷の外に出て受け取るようになったし、誰とも極力接触しなくなった。いや、ありゃあ、屋敷に人を近付けなくなったんだ」

「急に、ですか？」

「急にだよ。それに、あの野郎、前にもまして屋敷の手入れを丹念にしてやがる。それこそ、お屋敷にお嬢さんが暮らしていた頃みたいいだ」

それではまるで、何か宝物のようなものを、綺麗な箱に仕舞って大切にしているようではないか。

「領主ご夫妻は、あの屋敷には？」

「辛い思い出が詰まってるって仰られて、お嬢さんが亡くなってからは一度もいらっしゃらねえ。そんなお二人が、嘘をついているわけがねえ」

それに、自分の娘が亡くなったと、葬儀を出してまで偽る必要もない。

「それでは本当に、亡くなったはずのお嬢さんが蘇ったとしか・・・

」

セインは全身があわ立ち、冷や水を浴びせられたように、心臓部分が縮み上がるのを感じた。

「だから言ってるじゃねえか」

ようやく、村人達があの屋敷をゼルダ屋敷と呼び、忌み嫌っている理由が分かったものの、謎が増えてしまっただけだった。

あの、キヤルに向かって無邪気に、友達になって欲しいと笑っていた少女が、実は既に亡くなっていたのだというのなら、自分は夢でも見ていたのか？では、あの存在感はなんなのか。

ここに実際、キヤルがいないのは何故なのか。

あの時、何故自分は氣を失った？

分からない事だらけで、セインは顎をつまんで考え込んだ。

死んだ娘が生きていたとなれば、両親は娘を傍に置きたがるだろうが、そんなこともない。では、少女の両親は、いまだに少女が死んだと思っているのだ。

それに、生き返ったという少女は亡くなったときのままだというのだから、成長していかないという事になる。では、やはり、生きていた、のではなく、生き返った、と考えるのが、不自然だが自然だ。不老不死？

そんな言葉が脳裏をよぎったが、セインは首を振った。

不老不死などと、馬鹿馬鹿しいにも程がある。

まあ、自分のような存在が、稀にはいるのだろうが、それは論外だ。

それよりなにより。

まずは、キヤルの無事だ。

分からないことは後で考えれば良い。

今しなければならぬことは、キヤルを見つけ出すことだ。

セインは、キヤルと合流する算段に見当をつけると、ベンチから勢いをつけて立ち上がった。

「お。分かったか？ 兄ちゃん。あの屋敷には、近づいちゃいけないって事が」

「ありがとう。おかげで色々参考になったよ」

見上げる親父を見下ろして、セインはにっこりと笑って見せた。

「で、ゼルダ屋敷ってどっち？」

「あっちの森の入り口に表札が・・・って、おい！」

うっかり口を滑らせた親父が、慌てて腰を浮かせたときには、セインは既に森に向かって走り出していた。

「ありがとう！」

カバンを持っていない方の手を高く上げて、勢いよく手を振る。

「ありがとうじゃねえ！どこを聞いてやがったんだコラ！戻って来い！！！！」

「後でねー！」

最高に爽やかな笑顔で返事をする、まだ何か怒鳴っている人の良い親父を置いて、セインはゼルダ屋敷に向かって一直線に走った。

庭と森の中

「うう、さすがにちょっとしんどい」

ロックガーデンまで辿り着いたは良いものの、思えばずっと走りづめだ。

キャルは岩に寄りかかって呼吸を整える。

先ほど、噴水のところで少々の休憩は取れたものの、顔を洗っただけで水を飲んでおくのを忘れていた。

「迂闊だったわ。洗顔ついでに、この際噴水の水でも何でも、口に含むくらいしておけば良かった」

きよろきよろと、辺りを見回してみる。

茜色に染まり始めた空を、寝ぐらへと急ぐ小鳥が、小さく鳴きながら飛んでゆくのが見える。耳を澄ませば、わずかな風に揺れる草が掠れる音だけで、他に物音はしない。

背後の岩の上を、注意深く仰ぎ見る。

千切れた雲が、薄桃色に染まり始めていた。

「まだ、ちょっとは大丈夫みたいね」

何の気配もないのに、多少安堵する。

それでも油断大敵なのは変わらないので、手に銃は握ったままだ。「さて。どうしようか？」

現在寄りかかっている岩の向こうには、屋敷の一階の窓が並んでいるのが見える。

ゼルダに追われたのは屋敷のあちら側だから、随分遠回りしたが、目標位置まで近づいていることは確かだ。

「薔薇園が屋敷の中心から左側で、ここは右側だから、えっと？」

屋敷の敷地の外へ、道のない森を通らずに抜け出るには、屋敷の外壁を伝って、このまま遠回りで進むか、多少の危険は冒してでも屋敷に忍び込んで、誰にも会わないように内部を通過して近道をするか。

「どっちにしたって、この屋敷に辿り着いた道に出なきゃいけないのは一緒だけど。どっちが安全でより確実か？」

考えなくたって、それは外壁を伝って回り込んだほうが、逃げ道も確保できるし、ゼルダが戻っているのかもしれない屋敷の中をうろつくよりはマシなのだ。

「だけど、ゼルダが後を追って来ているとしたら、お屋敷の中に入っちゃった方が早いよね」

小さな顎をつまんで考え込む。気が付かないうちに、深く考え事をするときのセインの癖が、うつってしまっていたらしい。

そんな仕草に自分では気が付かず、キャルは屋敷を睨み付けた。もうすぐ夕焼けの時間だ。

そうなれば、夕暮れの独特のオレンジや赤色の光に、視界が利きにくくなる。

「やっぱり、道の無い森に逃げるのは、やめといたほうが良さそうね」

木々の枝が邪魔をして、星が見えなければ、方角さえも分からなくなる。

森をちらりと見やって、視線を屋敷の内部へと移す。

「あら？」

一階の、一番端の部屋で、何かが動いたような気がした。

「・・・人？」

目を凝らしてみれば、その部屋のカーテンが閉められた。

ピーターが戻ってきているのだろうか。

しばらくして、隣の部屋に人影が移動した。何か、作業をしているらしい。

「あらら？」

ピーターよりも背が高い。では、ピーターの他にも使用人がいたという事か？それなら、あの料理も、屋敷内の手入れが行き届いているのも、納得がいく。

「え？でも。あれ？」

そうだ。この屋敷に辿り着いたとき、彼女は、ゼルダは言っていなかったか？

この屋敷には、彼女と、ピーターと、メープル・チャイダンしかない。

では、メープル・チャイダンとは、あのティディ・ベアではなく、使用人の名前だったということなのか。

もう一度、キヤルは屋敷を見つめた。

先ほど人影が移動した部屋では、どうやら掃除が始まっているようだった。それが終われば、今度はベッドの上でシーツが広げられている。

作業は単純に続いていた。

しかし、その作業を淡々とこなしているのは、どうやら女性に見える。

「メイドさんなんていたのかしら？」

あの屋敷に、ピーター以外の使用人がいたとなれば、屋敷の不思議には色々と説明は付くが、使用人部屋には誰もいなかったし、誰かが住んでいるような生活感も無かった。食料庫は空っぽで・・・

「一つ謎が解決すると、もう一つ謎が出てくるっていうのはどうなのよ」

ここにセインがいれば、何か別の考えを示してくれるのかもしれないし、それらの謎も解いてくれるのかもしれないが、今はキヤル一人だ。

八つ当たりもできない。

「考えてたって始まらないわ」

キヤルは屋敷との距離を詰めることにした。

そろり、そろりと、周囲に気を配りながら、岩陰から岩陰へと移動して、徐々に屋敷へと近づいてゆく。

近づいてみれば、先ほど見た人影は、黒いジャンパースカートに、白いエプロンをつけた、女性である事がわかった。

やはり、この屋敷にはピーター以外の使用人がいるのだ。

「そうよねえ。でなきゃ、一人でゼルダの世話をして、屋敷の管理もして、なんて、大変すぎるもの」

すでに屋敷の壁の下にまで辿り着いていたキャルは、そうつと窓の中を覗きながら、うんうん、と納得する。

「そうとなれば、屋敷の内部を通るのは避けたほうが良いわね」

今まで、どうしてこのメイドに会うことがなかったのか分からないが、とりあえずは、ゼルダから彼女へ、キャルを捕まえるように命令されている可能性がある以上は、屋敷の内部への侵入は諦めた方が良さそうだった。

それに、まだ他にも使用人がいるかもしれない。

それならそれで、全員にキャルの搜索をさせれば良さそうなものだが、淡々と仕事をこなす使用人からは、今のところそのような気配を感じない。

そうつと窓から離れば、同時にカーテンを勢いよく閉められた。

「びっくりしたー！」

窓の真下にいたので、見つかったしまったかと心臓が飛び跳ねてしまったが、そうではなかったらしい。

「つて、あれ？」

間近で見たメイドは、なんと言うか。

「待て待て。メイドさんってことは女性よね？ 女の人ってことは、

・・・メイドさん？」

メイドはどちらかといえば男性名のような気がする。

それに、彼女のカーテンを掴んだ両手が、普通の手ではなく、義手に見えたのは気のせいだろうか。

とにかく、この場を離れてしまおうと、キャルは、体を隠しながら辺りを見回せるくらいの大きさの岩を、右方向に探した。

ロックガーデンとはよく言ったもので、足元は歩きやすいように平らな石を敷き詰めてあるものの、組み上げられた岩や、それそのものが大きな岩がゴロゴロしていて、その隙間に高山植物やハーブなんかが植えられている。

岩肌を這うコケモノなんかは、季節になれば赤い小さな実をつけて、ジャムにしたらおいしいだろう。

身を隠すのに良い事は良いのだが、少々視界が悪い。

「背が低いから、余計よね」

若干八歳。それは仕方がないと分かっているが、なんとなく腹が立つ。

ちょうど良さそうな岩を見つけ、早速足をかける。ちょこちょこ登って、てっぺんまでは登らず、幅のある岩陰に体を隠しながら、上から庭を眺めた。

セインの身長だと、これくらいの視界だろうか。

そう思ったとき、目指す屋敷の右の端。

外壁の下に、地面に扉がへばりついているのを発見した。

「また変なもの見つけちゃったわ」

どう考えても地下への扉だ。

では、台所になかった食料は、台所の反対だというのにあの扉の奥にでもしまっているのだろうか。

「ありえないわね」

それは効率が悪すぎるだろうし、食料庫の扉というようには見えない。

とにかくその奥が空っぽであろうが、食料が沢山積まれていようが、キヤルには関係がないので、脱出ルートの見当をつけて、キヤルは隣の岩陰へと飛び降りた。

屋敷から聞こえる物音は、先程のメイドが次の部屋の掃除を始めた音だろう。

もう、義手のメイドのことは振り返らずに、キヤルは一目散に走り出した。

それが、後に大変後悔することになるのである。

『この先入るべからず』

そんな立て看板の前で、セインは森の奥を覗き込んだ。

夕暮れになり始めてしまった森の中は、既に薄暗く、いかにも何かが出てきそうな雰囲気醸し出している。

「この道をまっすぐだよね？」

誰に聞くでもなく呟いて、カバンの中から取り出した携帯用のランタンに火を灯すと、ほてほてと歩き出す。

「それにしても」

この先入るべからず、と書かれた看板の少し前には、ゼルダ屋敷への道筋が書かれた看板が立っていた。

色褪せて汚れてしまっているところを見れば、どうやらゼルダ屋敷がゼルダ屋敷と呼ばれるよりも随分前に、きこり達の家々を指し示すために立てられたものであるらしかった。

「看板で分かるようにしないと、家が点在しすぎてて分からないわけか」

きこり達の家の場所を、屋敷を中心に指し示している地図の書かれた看板は、蔦が這っているだけでなく、ずいぶんと色褪せてしまっている。おかげで、屋敷の場所以外、きこり達の家の、正確な場所まではわからない。

村で出会った気の良い親父の話では、この色褪せた地図と似て、きこり達の住んでいた家は、既に朽ちてしまっているらしい。

ゼルダ屋敷だけが、そのまま残されて、古い地図に示された通りの場所に建っているのだ。

「なんか、それも淋しいなあ」

少々哀愁を感じながら、セインはランタンの小さな灯りを頼りに森の中を進む。

キヤルは無事だろうか。

もしや森の中で迷子になってやしないだろうか。

心配ばかりが脳裏をよぎるが、一番の心配事は、どうやったら叱られないですむのか、だった。

「でも、どうせ叱られるんだろうから、逃走ルートを確保した方が良いいかな」

そんなことをボソリと呟けば、なんだかキヤルのカバンが重くなつたように感じられた。

「・・・キヤルの呪い？」

本人を目の前にして口には出来ないので、いなしうちに口にしておく。

そんなことをしていれば、森の中はすっかり薄暗くなってしまうていた。

「日が暮れる前に、キヤルと合流できれば良いんだけど」

歩く速度を速めながら、セインはカバンを引っぱって、ゼルダ屋敷目指して進んでゆく。

地図のとおりに行けば、この道で間違いないはずだ。

きこりの村は、二本の道を中心に広がっており、その道は、森の奥にある屋敷に続いていた。

そう。道は二本ある。

今歩いている道は、屋敷から先程の村へと伸びている。

もう一本は、屋敷を横切って、森の中をまっすぐ突き抜ける。

始めてあの屋敷に辿り着いたときに辿った道は、どうやらそちらの、森を突き抜ける道のほうであるらしい。

二本の道は、屋敷のすぐ脇で合流する。

他にも、細かな道はあったのだろうが、地図が随分と色褪せてしまっていたので、読み取るのは難しかった。

どちらにしても、早く屋敷に辿り着かなければ。

もしかしたら、キヤルのことだから自力で脱出して、森の外に、とうに出てしまっているのかもしれない。

自分がどれだけ、あの骨董屋に展示されていたのか、確かめもせず村を後にしてしまった。

「・・・急ごう」

不思議で不気味な屋敷。

ゼルダと名乗った少女は、五年も昔に亡くなっているという。

「あの子、キヤルと友達になりたいって、言ってた。寂しいのかな」

森の中。大きな屋敷に、熊の縫いぐるみと、ピーターとかいう、多分使用人と。

他に誰も居なければ、それは寂しくて当たり前だろうと思う。自分達を引き止めようとしたのも頷ける。

あの寂しい、美しい少女は、いったい誰なのだろうか。

「あれ？」

考え事をしながら進んでいると、道から少し外れた場所に、崩れ落ちた屋根が見えた。

近づいてみれば、思ったとおり、きこりの家らしい。

柱も壁も、すべて木を組んでつくられているので、苔やきのこが生えたりしていた。

半分以上倒壊してしまっているが、辛うじて室内に入ることができる。

「おじゃましますねー？」

そうっと、中に足を踏み入れれば、足元の床が崩れ落ちた。

足元に気をつけながら、天上のない室内をランタンで照らし出せば、隅の作業台らしきシンプルな机の上に、様々な道具が置き去りにされていた。

木を削るための色々な形をした刀や、彫りかけの何かの部品。

風雨にさらされて、黒や緑に変色したりしている。

「これ、器用だなあ」

人の手の模型が、崩れかけてはいたが、台の端に置いてあった。

五本の指、それぞれの関節。それらがきちんと動くようにできているらしい。

「細工師の家だったのかな」

そんな感想を抱きながら、セインは目的のものを探す。

「作業台の側に置いてありそうなものだけだな」

がさがさと探りを入れていけば、作業台の端に、小さな引き出しがあった。明けてみれば、かたん、と、ブリキの缶が一つ。

ランタンの光に当ててみれば、この朽ちた家の中で、奇跡的に綺

麗なまま残っていた。

振ってみると、ちゃぱちゃぱ音がする。蓋を開けて、匂いを嗅ぐ。すると、独特の臭気が、鼻を突いた。

「あったー。良かった。これで今夜の分は大丈夫」

ブリキの缶の中身はランタンの油だ。

目的の物を見つけ出して、再び屋敷へ足を向ける。

実は、ランタンを出してみたら、油が足りないのに気が付いて、きこりの家を見つけたら、少々申し訳ないが家捜しをするつもりでいたセインだった。

「確実にあるってわけじゃないから、なければお屋敷から何かかっぱらうつもりでいたけど、それも手間だしね。ここで見つかった良かったよ」

ゴロゴロと、カバンを引きずって、セインは心置きなくランタン片手に、暗くなってしまった森の中を走り出した。

あとは、どうやってキャルを探し出すか。セインはそれだけに専念することにした。

合流しても危機怪改

しばらくして、ようやく屋敷の屋根が見えてきた。

その様子は、前回訪れたときとまったく変わらない。

「普通に立派な屋敷なんだけどな」

藍色の空に溶け込んで、森の木々の合間から見え隠れする屋敷は、時間的に不気味といえど不気味だが。

「使用人が一人しかないのに、綺麗過ぎるのが変なんだ」

屋敷がずいぶん近くに見えるようになってから、屋敷の壁や窓、植木に至るまで、綺麗に整備されていることに気が付いた。

初めて来たときは、夜中に訪れたことも手伝って、気づきもしなかったが、外から見ても、この屋敷は、まるで全盛期のように美しく整えられていた。

「たった一人で、ここまでできるものなのかな？」

一人で住むには広すぎる。

ちょっとしたホテルでも経営できそうなほどに大きな屋敷。

村人は、ピーターという使用人が屋敷をきれいにしていると断っていたが、それにしても。

セインは、キャルと同じ疑問を抱いた。

ちらりと、二階の窓に人影が動いた。

「ゼルダ？」

一瞬、屋敷の当主と名乗った少女の顔を思い浮かべた。

既に亡くなって、この世に存在しないはずの少女。

しかし、影は少女のものよりも、成熟した大人のように見える。「あれ？」

では、あの影がピーターという使用人なのかと思ったが、屋敷に近づくにつれて、影はどう見ても女性のようにはしか見えない。

「・・・あれはどう見てもスカートだよな？」

見ていると、影は一つから二つへと増える。

「誰か来ているのかな？」

しかし、動き方がいまいちおかしい。

「うきゃあああああああ！」

「!!!!!!」

いきなり聞こえた金切り声に、セインは視線を屋敷の端、一番隅の垣根へ移動させた。

「キヤル！」

ちよつと間の抜けた悲鳴だが、あの声は間違いなくキヤルの声だ。セインはランタンを啜えて手を合わせ、両手の間に空間を作ると、左の手の平からセインロズドを引きずり出した。迷わずに垣根の中へ突っ込んでゆく。

「キヤル！どこだ?! 返事して！」

屋敷の裏庭から、玄関先までをぐるりと囲った低木は、キヤルの姿を隠してしまっているようだ。

ただでさえすっかり暗くなってしまう。セインはランタンを持つ手を、精一杯高く上げた。

「セインのばかあーつつつつ!!!!!!」

屋敷の壁の向こうから、キヤルの罵倒が聞こえた。

「なんで馬鹿なのかなあ」

元気でいるようなので安心しながら、急いで声のした方へ急げば、壁の途切れた角から、キヤルが突進してきた。

どすん

思い切り体当たりされれば、いくらなんでもバランスを崩して当然だ。

キヤルもろとも倒れこんで、セインは地面へ後頭部を激しくぶつけることになった。

「はううっ！」

目から星が飛び出した。

「いたた、って、セイン！」

そのセインを下敷きになっているのだから、実際はそんなに痛くも

ないだろうに、キヤルは顔を押さえながら飛び上がった。
どうやら顔面からセインの腹に突っ込んだらしい。

「なんでセインがいるの?!」

「そりゃないよ。いたらダメなの?」

「だって、売り飛ばされたんでしょ?」

「……知ってたの?」

「さっきピーターに聞いた……て、セイン立って!」

矢継ぎ早にお互い質疑応答をしていた二人だが、キヤルが慌てて立ち上がると、セインの腕を引っ掛けて、無理やり立たせる。

と、同時に、キヤルが先ほど突っ込んできた角から、メイドの集団がぞろぞろと現れた。

何事かと思う隙もない。

二人の姿を認めると、一斉に襲い掛かって来たのである。

「うわあ、ちよっとなんなのこれ!」

「わかんないわよいきなりだったんだから!」

先程の悲鳴は、このメイドの集団のせいであるらしかった。

雪崩れ込むように掴みかかってくる集団を、セインロズドで振り払い、ランタンとカバンをキヤルに預けて、セインは視線を感じて、先ほど人影が見えた窓を振り仰いだ。

窓が開け放たれて、そこから女が二人、顔を出していた。

こちらを見て、笑っている。

ぞっとした。

室内からこぼれる光に照らされたその顔は、白く美しく。

まるで、あの少女、ゼルダを成長させたような。

「キヤル! 早く!」

近づくメイドたちを牽制しながら、後退するのは至難の技だ。

「この人たち、この屋敷の使用人なの?」

「そのはずなんだけど、今まで見たことないのよね」
ドドン!

キヤルが威嚇射撃をメイドたちの足元に打ち込んだ。

一瞬、彼女達の足が止まる。

その隙を突いて、セインはキヤルのカバンを引っ掴んで、一目散に逃げ出した。

「とにかく屋敷から離れよう！」

キヤルがランタンを掲げて走ってくるのを確認して、カバンを片腕で脇に抱え、月明かりと、屋敷から漏れる明かりとを頼りに、今来た方向を辿り始めた。

カシャン

小さな音が聞こえ、そちらに視線を向ける。それはあの女達が顔を出していた窓だった。

女がいない。

そう思ったのと同時に、目の前に黒い何かが広がった。

それがスカートであったことに気が付けば、あの女達が目の前に降り立っていた。

「窓から飛び降りたのか」

女が、ゆっくりと立ち上がる。

着ている服が、黒のジャンバースカートに白のエプロンであることに、その時になって気が付いた。

それは、背後から迫り来るメイドたちと同じ。

「どうやら、彼女らも使用人のようだね」

白く美しい肌に、結い上げられた艶のある黒髪。瞳は漆黒。

「ゼルダ？」

キヤルが驚きに、屋敷の主である少女の名を呟いた。

振り向けば、同じ格好のメイドたちが、ゆっくりと近づいてくる。もう少しで屋敷から抜け出せる、というところで、メイドたちに挟まれる形で身動きが取れなくなった。

「ちょ、と・・・！何？これ」

屋敷の窓という窓に灯りが灯されているために、メイドたちの顔が、白く浮かび上がった。

近づいてきてようやく分かる。

女達の顔は、みな同じだった。

白い肌。黒い髪と瞳。

ゼルダという、美しい少女が成長したような、美しい顔。

そして一様に、優しそうに微笑んでいる。

顔だけ見れば、それはまるで女神のよう微笑みだ。

「皆さん姉妹でいらっしゃる？」

「それはないわね」

年も同じに見えるうえに、背の高さまで同じ。まるでクローンだ。

「でさあ、キヤル？」

「こんなときに何よ間抜け大賢者」

棘の生えたキヤルの声に怯みながら、セインは剣を構えた。

「ゼルダはどうしたのかな？」

「屋敷の裏庭で撒いてから、見てないわ」

撒いた、というのなら、彼女から逃げ出してこの状況に陥っているということか。

「ピーターっていう使用人は？」

「庭の真ん中で別れたわ」

やはり、ピーターという人物はこの屋敷にいるのか。では、この同じ顔をした使用人たちのことも、彼なら分かるのだろうか。

「会えない？」

「無理ね」

当たり前だが、間髪置かずに返ってくる。

「そもそも、なんでこんなことになっているのさ？」

「逃げてたら、地下室から出てきちゃったんだから仕方ないでしょ！？」

良くは分からないが、メイドの集団は地下室から出てきたらしい。「裏にロックガーデンがあって、そこで地面に扉があるのを見つけたのよ。そこからこの人たちが出てくるのを見ちゃったのよね。それで、最初の一人と目が合って」

そのまま追いかけているらしい。

「なんでロックガーデンなんかに行ったのさ！」

「あんたを探してたんでしょうが！」

「うわあ、ごめんなさい！」

探してもらっていたとはつゆ知らず、思わず謝るセインだった。

ガン！

振りかざされたメイドの腕を、自分の左腕で受け止める。

ガウン！

すかさずキヤルが銃弾を掠めさせれば、メイドたちは退いた。

それでも囲まれている状況は変わらない。

「あの、さ」

「・・・言いたいことはなんとなく分かるけど」

「やっぱり、そうだよな？」

「あたし達の目が節穴じゃなきゃ、どう見たってアレはおかしいでしょ？」

組み合ったおかげで、すぐ間近で見ってしまった。

彼女達の、白いブラウスの長袖の下に隠された、ほっそりとした腕は作り物だった。

「どういふことかしらねー？」

思わず顔が引きつった。

キヤルが、庭で見た、部屋のカーテンを閉めるメイドの腕。

あの腕も、同じではなかったか。

「まさかとは思うけど、この人たち・・・」

長いスカートに隠された足に、キヤルは目をやった。

「うりゃ！」

だだっど走って、いきなり目の前のメイドのスカートを、思いっきりめくりあげた。

これには、メイド達も不意を突かれたらしい。一斉にギシリと、軋んだように動きを止めた。

「ふえ?!」

目を丸くして、メイドたち同様、一瞬固まってしまったセインだ

が、すぐさま行動に出た。

スカートから現れたのは、やはり作り物の足。

「キヤル！」

メイドの腕に捕まりそうになったキヤルを後ろに放り投げると、セインは手前のメイドの服を、セインロズドで切り裂いた。

「やっぱり！」

裸にされても微笑んだままのメイドの体は、全てが作り物だった。間接部分が球体で繋がった、精緻な身体。

白く美しく、完璧な身体は、不気味に闇の中に浮かび上がる。

「これが生きた女性だったら、僕、間違いなく変質者だねー」

あはは、と、眼鏡を直して笑いながら、セインの眼光が変わる。

メイドの土産

「手加減無しだ。キヤル、行くよ？」

セインが地面を蹴って跳躍するのと同時に、メイドたちの腕が、一斉に二人を捕まえようと伸びてくる。それらの腕を次々と切り落としてゆく。

が、元々生命を持たない、作り物の彼女達は、止まることを知らない。

切られたままの腕を伸ばし、微笑みながら歯をカタカタと鳴らして突き進んでくる様は、まさにゾンビのようだ。

「ゾンビだって、見たことないけどね！」

ガガン！ガン！

キヤルがセインを援護する。

セインの目の前のメイドの頭が、キヤルの弾丸で打ち砕かれたが、頭を半分なくしてもその動きは止まらない。

「キリがないわ！」

セインの背後に回り、背中合わせに二人は呼吸を整える。

「脚を狙って！動けなくするしかないよ！」

掴みかかってきたメイドの首をセインが刎ねたが、首のないままギシギシと襲いかかってくる。

首の奥から、木製の歯車が見えた。

「自分で言ってるそばから何で頭なんか刎ねるのよ！」

「体勢的に仕方がなかったの！」

「気持ち悪いでしょうが！」

ドドン！

首のないメイドの脚を、キヤルが打ち砕いた。

ぐらりとバランスを崩して倒れ込むが、その場でバタバタと手をばたつかせている。

「どっちにしたって気持ち悪いよ！」

「ぎゃー！なにこれ最悪！」

そのまま、動く両手でガサガサと這いつくばって迫って来る。他のメイド達の掴みかかってくる手をよけながら、セインは首のないメイドの、今にも自分の足を掴み取ろうと伸ばされた右腕を切断した。

しかし今度は左腕が伸ばされ、間一髪でその腕も切り落とす。

次いで、両手両足を無くし、首もないまま、血液の代わりに歯車やバネを飛び散らせて暴れる銅を串刺しにして、力任せにメイドの集団に投げつけた。

数体が、その体の下敷きとなって一緒に倒れこむ。

「うわあ！」

背後から髪を掴まれ、引きずり倒されそうになって、後ろ手にセインロズドを突きこんだ。

機械仕掛けの人形は、脇腹を貫かれ、それでも歯をガチガチ鳴らし、力を緩めようとはしない。

回転する歯車の振動が、生きている人間の鼓動のように、剣からセインの手に伝わった。

「セイン！」

キヤルがセインの髪を掴むメイドの腕を打ち碎けば、カタカタと笑いながらバランスを崩し、支えを失って倒れた。セインロズドの貫いた傷跡から煙が立ち昇るが、背中を地面につけたまま、ズリズリと地面を這っている。

それを気味悪がる暇もなく、次々とメイド達が襲い掛かって来る。

脚を切り飛ばし、腕を切断し。

脚を打ち碎き、腕を打ち抜き。

徐々にカラクリ仕掛けのメイド達は数を減らしてゆくものの、動くことをやめようとはしない様は、屋敷の窓から漏れる光にうつすらと照らし出されて、大きな芋虫が蠢いているようだ。

「ここまでしつこいとはね」

「モテないナンパ男並みだわね」

「……なにそれ？」

一応男の部類なので、キヤルの言葉にひっそりと傷つくセインだった。

「どこか、原動力になっている部分を壊せばいいのだけれど」
しかしそれがどこなのか調べている隙が無い。

「セインのマメ知識に無いの?!」

「マメってねえ? こんなマメの領域超えちゃってるよ!」

やたら長生きで、経験と多趣味が手伝って、めっぽう博識なセインだが、それを『マメ知識』と言ってしまふキヤルだ。

「変なところで超えられないでよ! だいたい、セインが行方不明になんかなるから悪いんだわ!」

「うっ……」

迂闊に連れ去られた挙句に売り飛ばされたのは事実なので、反論のしようがない。

「セインなんか、やっぱり引っこ抜くんじゃなかったわ!」

「ひどいなあ、もう」

久々のキヤルの口癖に、涙が出そうになって、セインはそっと眼鏡を直す。

そんなことを言い合いながら、メイドの集団とは、きつちりと対戦している。おかげで、いかな痛みを知らない人形達でも、腕やら脚やらを傷つけられて、ギチギチと動きが鈍くなってきた。

それでも二人にだって、体力の限界というものがある。

「まだいけそう?」

「年寄りも労わってほしいね」

セインもキヤルも、肩で息をしている状態だ。

「か弱い女の子をこき使うもんじゃないわよ」

「か弱いって、誰が?」

余計なひとことを言って、足を踏みつけられた。
言葉にできず、飛び上がる。涙が出た。

「どっかの年寄りよりはハイパー若いしぴっちぴちだわよ!」

「ううう、言ってみただけなのに」

つい言葉にしてしまったが故に、痛い思いをするのはいつものことだ。

と、いうか。

セインも懲りない。

「そろそろカタをつけないと、本格的にヤバいんじゃないの？」

「かなりね」

相手の動きが鈍くなったとはいえ、四方を囲まれている状況は変わらない。

「いいかげん何とかしないと」

セインが退路を探そうと、視線を彷徨わせたときだった。

「みいーつけたあ」

いつの間にか、キヤルの背後に、お気に入りのお人形・ベアを持った、あの少女がいた。

「ダメよ、キヤルったら、こんなところで遊んでちゃ」

驚いて振り向けば、出会ったばかりのときの、あの笑顔がそこにあった。

美しく、可愛い。

少女の華やかな微笑み。

「ぜ、ルダ？」

キヤルを追いかけていた彼女の面影はあっさりと消え去って、薔薇園での出来事が、まるで悪夢であったかのような。

「なあに？」

小首をかしげる仕草も愛らしい少女。

「君は・・・？」

村で、とうの昔に亡くなってしまっていると聞いた少女。セインが彼女に近づこうとしたときだった。

「あなたが、邪魔するのね？」

ゼルダの表情が一変する。

「セイン逃げて！」

キヤルの悲鳴と同時に、ゼルダがテディベアの中からナイフを突き出した。

咄嗟に右腕で庇ったが、その腕をナイフが貫通し、少女の重みで体制を崩したまま仰向けに倒れた。

「セイン！」

キヤルが銃口をゼルダに向けた。

「私を、二度も打つの？」

泣きそうな、大きな黒い瞳が、キヤルを捕らえた。

メイドたちの動きは、ゼルダが現れてから止まってしまっている。だが、いつまた動き出すか分からない。

セインの腕からは、徐々に赤い血が滴り落ちる。

「キヤルは、わたしを殺してしまいたいほど嫌いなもの？」

自分でも目に見えてしまうほど、キヤルの手が震える。

目の前にいるのは、いったい何だ？

「ゼルダ。あなた、人間なの？」

「・・・どういふことかしら。私は私よ？」

にっこりと、押しのけようとするセインを押さえ込みながら、ゼルダが微笑んだ。

とてもキヤルと同じ年の少女の力とは思えない怪力で、セインの腕に突き立てたナイフを、さらに深く押し込める。

眼前に迫った鋭利な切っ先を、セインは痛みで力が抜けてしまいそうな腕に力を込めて、辛うじて留めている。

立ち上がる余裕すらない。

「セインから退いて！」

「なぜ？」

きょとんと、心底分らないというように、ゼルダが聞き返す。

「あ、当たり前でしょう?! 相棒をそんな目に合わされて、普通になんかしてられないわ!」

「相棒？」

「そうよ! ゼルダだって、ピーターを傷つけられたら、悲しいでし

よう？」

「ピーター……」

「そうよ！」

キヤルの頬を、冷や汗がつたう。

「でも、この人がいる限り、キヤルは私の友達になってはくれない
のでしょうか？」

そう言って、ゼルダが微笑む。

それは悪魔が人を誘い込むように、妖しく、どこまでも優しい、
凶悪な微笑だった。

「この人が、私からキヤルを取り上げるのよ」

ナイフを突き立てる腕に、さらに力が込められる。

「う、あっ……！」

痛みに、セインが呻いた。

友達の定義

「セイン！」

キヤルが切羽詰った悲鳴を上げた。

「そんなに、この眼鏡男が大事なの？」

ゼルダが、にんまりと笑った。

今までと違うそれに、キヤルは背筋が凍りつくような感覚を覚える。

「大事とか何とか、そういうんじゃないわよ！うまく、言えないけど。とにかくダメなの！」

キヤルにとって、セインが大事かといわれれば、実際のところ、どうなのか分からない。しかし、とにかくセインがそばに居ないのはダメなのだ。

不安で落ち着かない。

普段から身に付けているものが無くなってしまったような、そんな感覚。

「大事でないのなら、私と一緒に、どうして暮らしてくれないの？顔をキヤルに向けながら、セインを押さえ込む力は一向に緩む気配がない。

「その笑い方、やめてくれる？」

にんまりと、冷たい顔は、屋敷の裏庭で見たものとも、最初に見た愛らしいものとも違う。

「友達って、一緒に暮らさなきゃいけないものではないでしょう？」

「どうして？」

「どうしてって、普通はそうよ？お互いが友達だと思っていれば、それで友達だわ」

「そうかしら？」

お互いが友達だと感じていて、お互いの気が合って、楽しくおしゃべりできる相手。

友達とはそういう存在ではないのだろうか？

「お友達って、楽しくおしゃべりできる人のことでしょ？」
「？」

「気が合うなら尚更。楽しさを共有できるのが友達なら、一緒に住んで、一緒に暮らして。そうしたら、毎日楽しくできると思わない？」

仲の良い人と暮らしている人も、確かにいるが、ゼルダの言っている意味とは、かなりかけ離れているように思える。

「違うわ。一緒にいるのが楽しいことは確かだけれど、それだけが友達だとは思わない」

「どうして？」

「だって、楽しいだけって、変なもの」

同じ人と、長く付き合っていく上で、ずうっと楽しいなんて事が有り得るのだろうか。

「友達って、そうじゃないと思うわ。お互いの意見も言い合うし、そうしたら、必ず違う考え方が出てくるわ。全く思考が同じなんて人、いるわけがないもの」

人というものは、十人居れば十通りの考え方があるものだ。考え方の違いは闘争を生み、時には衝突だってするだろう。

「それでも、お互いを認め合って、遠慮なく言い合えるのが、友達だと思う」

楽しくいたいだけであれば、それは人を雇って話し相手をさせればいい。それなら、楽しくするだけ楽しくさせてくれるだろう。

しかし、それでは友達とは言えない。

「キヤルは、私が嫌い？」

「・・・嫌いじゃないわ」

友達の定義（後書き）

長らくお待たせいたしました。仕事の関係でほぼ寝ない日々が続く、短いのですがお待ちいただいている方々に申し訳ないので、できているところまでUPすることになりました。なるべく早く続きを書きますので、少々お待ちくださると幸いです。

友達の定義2

唇を噛み締めて、キヤルはゼルダを見つめた。

どうしたらいい？

どうしたらセインを助けられる？

どうしたら、元のゼルダに戻ってくれるのだろうか。

ちらりと、キヤルはゼルダの体にできた無数の引っ掻き傷を見や
った。

薔薇の棘で作られたそれらは、やはり裂けているだけで、血のに
じんだ跡さえない。

彼女を元に戻す。

それは、自分の思っているよりも、不可能に近いのかもしれない。

「ねえ、ゼルダ」

「なあに？」

「あなた、痛くはないの？」

「何のこと？」

きょとりと、ゼルダは首を傾げる。

「あなたのその傷よ」

彼女に銃口を向けたまま、セインの腕を貫くナイフを握ったまま
の腕を、キヤルは示す。

「その引っ掻き傷。薔薇の棘で作ったのでしょうか？」

そう言われて、初めて気がついたかのように、ゼルダは自分の腕
を見た。

引っ掻いたような綺麗な傷と、そのすぐ下には、セインの流す大
量の血が見える。

「なあに？」

セインの顔を、ゼルダが見つめた。

「……え？」

初めて、キヤルではなく、セインを見た彼女の顔は、驚いたよう

な、怯えたような。

「この、赤いものは何？」

「……あ、赤いものって……」

ぐり、と、ゼルダの腕に、さらに力がこもった。

「ぐ、うつ……！」

「こんなもの、知らない！気持ち悪い！」

セインは、既に力の入らなくなってしまった右腕を、左腕で支えて押し戻しながら、バタバタと溢れ落ちる己の血を、顔に浴びなければならなかった。

「バケモノ！」

「ひ、酷いなあ」

笑ってみたいが、実際は口元が引きつっただけだった。
ドン！

キヤルが、ゼルダの足元に一発打ち込んだ。

もうそろそろ弾を込めたいところだが、銃弾の入ったカバンはセインの側だ。

「赤い血が、恐いの？」

キヤルの言葉に、ゼルダはセインから視線を外し、キヤルへと戻した。

「血……？」

「そうよ。血よ」

生きていれば、体中に流れていなければならない、命の根源。

「知らない」

「ゼルダ？」

「血なんて、知らないわ！それは何？」

「！」

血を知らないなんて、有り得るのだろうか。キヤルは、ごくりとつばを飲んだ。

「血は、血よ？生きていれば必ず体内に流れているものよ」

「どういう事？」

ゼルダの瞳に、動揺が浮かぶ。

「セインの腕から流れているのは、血よ」

「見たことなんてないわ。こんなのが体から出てくるなんて、この人、バケモノなんでしょう？ 殺さなきゃ！」

「確かに、セインは薄らボケなわりに、バケモノなんて言われそうな特技があるけど、彼はバケモノじゃないわ」

「特技って。しかも薄らボケって・・・」

痛みよりも、キャルの台詞に泣きそうなセインだ。

「あなた、怪我したこと、ないの？」

「怪我？」

「そうよ。たとえば、今のあなたの腕にある、その引っ掻き傷」

ゼルダは、自分の腕を見る。

白い肌に、彫刻刀で削ったような傷跡が、たくさんできている。

「これが、どうしたっていうの？」

「痛くないの？」

「痛い？」

「そうよ。ちりちりしたり、ずきずきしたり。嫌な感触はないの？」

「どうして？ これくらいの裂け目なら、ピーターがすぐになおしてくれるわ」

傷ではなく裂け目。痛みもなく、血の出ない体。

「その機械メイドと、同じって訳ね・・・」

違うのは見た目。

メイドたちは、服を剥いではまえば、人形の体が現れる。比べて、ゼルダは全く普通の、生きている人間と変わりがない。

それは、一緒に風呂に入ったときに見ている。

「ピーターに、聞いてみるのが早いかもね」

ゼルダの下から、セインが乾いた笑いを漏らす。

先程よりもゼルダのセインに対する集中力が欠けているのか、セインに幾分余裕が出てきた。

それでも、彼女を突き放すほどまでには行かないが。

切っ先は、まだ眼前にあるままで、跳ね除けようにもゼルダの力は相変わらずだ。

セインロズドはまだ手元にある。

しかし、それでゼルダを傷つけるわけにはいかない。

目線だけ彷徨わせてみれば、自分の右側に、キヤルのカバンを見つけた。

「何をそもそもしているの？」

「！」

再び、ゼルダが力を込め始める。

「セインから離れて！」

キヤルが怒鳴った。

「どうして？この人、バケモノなんでしょう？バケモノなら、退治しなくちゃ！」

ゼルダが笑いながら言うのと同時に、今まで動かなかったメイドたちが、一斉にセインめがけて押し寄せる。

「セインは化け物じゃない！！！」

キヤルの悲鳴に、ゼルダとメイドたちの動きが止まる。

「セインが化け物なら、私だって化け物よ」

キヤルが、落ちていた小枝を拾い上げた。

「どうして？このバケモノは、私からキヤルを奪おうとする悪い人だわ。腕から赤いものが溢れるなんて、きっとバケモノだからに違いないわ」

「セインは化け物じゃない。単なるトウヘンボクよ」

そう言って、キヤルは自分の腕に小枝をつきたてた。

「キヤル！」

「何を？！」

セインの悲鳴と、ゼルダの疑問の声とが重なった。

キヤルは、自分で自分の腕を突き刺した小枝を、ぽい、と捨てる
と、痛みに顔をしかめながら、傷口をぺろりと舐めた。

「痛てて。この代償、高くつくからね」

「あうー」

ぎろりと睨まれて、セインはまた泣きそうになった。
いろんな意味で。

「これが、血よ」

赤くにじむ腕を、ゼルダに差し出す。

じわりと、にじんだ血は広がって、やがて一本の筋になって、キヤルの腕から滴り落ちた。

「生きているのなら、当たり前、誰もが持っているものよ」

「どういう、こと？」

「血を持っている人間を、化け物呼ばわりするのなら、ピーターも化け物ってことね」

「嘘！ピーターは、バケモノじゃないわ！」

ゼルダが叫んだ拍子に、彼女の手がナイフから離れた。

セインは体を回転させて彼女の下から転がり出ると、カバンをキヤルの方へ蹴り飛ばし、自分はそのままセインロズドを杖代わりに立ち上がる。

「あなたの知らない血を持っている私を、あなたはそれでも、友達と言ってくれるのかしら？」

キヤルが、ゼルダへ微笑んだ。

戦い微妙で日が暮れて

ゆっくりと、ゼルダが後退する。

黒い大きな瞳を見開き、ふるふると首を振って、今にも泣き出しそう。

裏庭でキャルを襲い、先ほどまでセインの腕をナイフで突き刺していたとは思えない、出会った頃の、愛らしい少女そのものだった。

「わ、私・・・！」

混乱しているのか、両手で自分の顔を覆って、ゼルダはその場いへたりと座り込む。

「赤い、ち。血？ち？血って、何？わたし、ちが、ない？ピーター？ピーターにも、赤い、血が？」

彼女の混乱に共鳴しているのか、機械仕掛けのメイドたちまでが、カタカタと震え始める。

「キャル、今のうちに！」

くい、と、セインがキャルの腕を引っばった。

しかし。

「だめ」

キャルは、ゼルダを見つめたまま、動こうとしない。

「でも、今なら逃げられるよ？」

セインが、キャルの顔を覗き込む。

「ゼルダと、お風呂に入ったわ」

唐突な言葉に、セインは首を傾げた。

「あの子、綺麗な体で、体のどこにも継ぎ目なんかなかった」
「キャル・・・」

泣きそうになりながら、キャルはなおも言い募る。

「同じベッドで一緒に寝たの」

「・・・うん」

「あったかくて、いいにおいがしたのよ」

「・・・」

「ゼルダは、人ではないの？」

こちらを見もせず、カバンを開け、銃のマガジンを交換する。

そんな風に冷静な作業をしながら、キヤルの表情は無表情だった。

「・・・まったく」

ふう、と、セインは溜め息をつく。

「な、なによ！」

「何でもないですよー」

振り向いて食ってかかって来たキヤルの瞳は大きく揺らいでいて、大粒の涙が今にもこぼれそうだ。

泣きたきゃ、泣いてしまえば良いのに。

そうは思っても、キヤルが必死で堪えた涙だ。その努力は無駄にしたいくない。

「正確に言えば、今の彼女は生きていない、ということだね」

「どういうこと？」

人か人でないか、その質問に、セインは少々ずれた返答をした。

「この近くに村があつてね。そこで、この森に住んでいた領主の娘は、三年前に流行り病で亡くなったのに、最近になって、元の姿のまま生き返ったらしい、なんていう、馬鹿げた話を聞いたんだ」

セインは、自分が売られた骨董屋の村で聞いた話を語った。

「それって・・・」

驚いたキヤルに、セインはこくりと頷いてみせる。

「領主の娘の名はゼルダ。当時七歳だったそうだよ」

「じゃあ、あのゼルダはいったい誰？ なんなの？！」

セインにすがりつくキヤルの疑問に答えたのは、セインではなく、別の方向からの怒鳴り声だった。

「違う！！！」

振り向けば、屋敷の玄関先に、駱駝のようなコブのある、背中の曲がった一人の男が立っていた。

「お、お嬢様、は、死んじやいねえ！」

「ピ・・・」

男の名を呼ぼうとしたキャルの脇を、小さな影が横切った。

「ピーター！」

ゼルダが、両手を広げてピーターにすがりつく。

「お嬢、さま。恐、い、思い、しなすった、だか？申し訳、ねえ、です」

えんえんと泣きじゃくるゼルダの頭を、ごつごつした手の平で、優しく撫でる。

「君が、ピーター？」

セインの問いかけに、ピーターがセインを見上げた。

「お、おれ、ピーター、です」

意外にも、彼は怒るでもなく、静かに頷いた。

「君と、少し、話をしたいんだ。いいかな？」

それにも、ゆつくりと頷くと、ピーターは泣きじゃくるゼルダに合わせてしゃがみ、少女の腕を取る。

「ああ、やっぱり、傷だ、らけ、で、ねえですか」

「ご、ごめ、なさい」

「あやまる、こと、ない、です。後で、おれが、なお、して、差し上げ、ます、から、お屋、敷、入って、くだ、さい」

彼のゼルダを見つめる瞳は、本当に優しく、純粹で、どれだけゼルダを大事にしているのか、推し量るまでもなかった。

「ピーター、あなた、バケモノじゃないわよね？私と、おんなじなんでしょう？」

「お、おれ、の、どこが、バケモノ、ノ、ですか？お、お、お嬢、様が、いち、番分かって、る、でしょう？」

微笑むピーターに、ゼルダは拗ねたように、ぷつくりと頬を膨らませた。

「だって・・・」

「ほら、お嬢さ、ま。夜は、冷え、ます。お屋敷、に、お入り、くださ、い」

「分かったわ。ピーターがバケモノなわけないわ。キヤルが間違っているのよ。安心したら、お腹が空いちゃった!」

ぱっとピーターから離れると、屋敷の中へパタパタと走って行ってしまった。

嬉しそうに笑うゼルダは、出会ったときの彼女そのものに見えた。ぽかんと、様子を見ていたキヤルとセインに、ピーターはゆっくりと頭を下げると、屋敷の中を指し示す。

「も、森、の、夜は冷え、ます。ど、ぞ、中、へ」

かさかさと背後から音がして振り向けば、半壊したメイド人形達が、一斉に後退してゆく。

「あいつ、らに、手、出し、させね、え、で、す、から。安心、してく、ださい」

キヤルとセインは顔を見合わせた。

「大丈夫かしら」

「多分ね」

セインが、へらり、と笑う。

がいん!

「うはあ!」

セインが飛び上がった。

足の脛を、キヤルが思い切り蹴り飛ばしたからだ。

「それが怪我人にする事なの?」

本気で泣きそうなセインだ。

「屋敷に入ったらどうなるのか分かんないのに、へらへらしてるからよ!」

それだけの理由で脛を蹴られるのは納得がいかないが、そこをセインはぐっと堪えた。

「ピーターっていうんだっけ? 彼」

「庭師もやってるらしいわよ」

「ゼルダもメイド人形も、彼の言う事ならよく聞くみたいだし、彼は彼で、とても誠実な人だと思うんだけど。違う?」

確かに、ピーターは悪人には見えなかったし、どちらかといえば、純朴で、優しい心根の持ち主に思える。

裏庭でも、なんだかんだで、逃げ道を教えてくれたし、うっかりなのかどうなのかは分からないが、セインを売ったことまで正直に教えてくれた。

「そうね。ピーターが側にいれば、なんとかなるかしらね。聞いた
いこともあるし」

「ゼルダとも、仲直りしたいんでしょ？」

にこにここと、嬉しそうなセインに、キャルは顔を真っ赤にした

落ち着く一步手前

「凶星？」

「うろう、うるさいわね！」

ごいん

「うはあ！」

先ほど蹴られた脛を、今度は殴られる。

「あんたも少しは学習能力ってモノを身に着けといたほうがいいわよ？」

にっこりと笑うキャルに、セインは痛みに口も利けず、うるうると大粒の涙をこぼした。

「とりあえず、その血だらけの腕だけでも、なんとかしなさいよ」
いまだに流血の治まらない腕を、キャルがカバンから包帯を取り出し、上腕部を締め上げて止血する。

「逃げ出すにしたって、あんたの腕の治療しなきゃ、逃げ出すに逃げ出せないでしょ」

「いやあ、一回セインロズドになれば楽にはなるんだけど」

そう言いながら、セインはそのセインロズドを、自分の左手に突き刺し、ずぶずぶと体内に納めてゆく。

再び血液が滴り落ちるが、剣が全て見えなくなってしまえば、セインロズドを突き刺した傷跡はどこにも見られなくなってしまふ。

「あんたがセインロズドだけになっちゃったら、誰があのか剣を運ぶのよ」

「あはは。重いもんねー、僕」

「少しはダイエットしてよね」

「・・・それは無理だよ」

「分かっているけど言ってみただけよ・・・って、あれ？」

セインは剣であり人である。

その意味を如実に現した光景に、ピーターが身動きをとれずにい

ることに、ようやくキヤルが気がついた。

「あー」

ぽりぽりと、セインが頭をかいた。

「驚かせるつもりは無かったんだけど？」

「気にしなくていいわよピーター？セインの特技だから。アレ」

「特技って・・・」

なんとなく眼鏡のズレを直すセインだったが、泣きそうだったのは気のせいではないだろう。

「あんた、そ、れ？」

小さな目を見開いて、陸に上がった魚みたいに口をパクパクとさせながら、セインを指差す。

そういった扱いには慣れているものの、うっかりしていたために、どう言い訳したらよいのか。キヤルはあわてて、セインの前に飛び出した。

「え、えっとね？言ったでしょ？セインは剣でもあるって。つまりはこういうことで、でもその、あの」

一度は勢いで、特技だから気にするなどは言ったものの、普通、常人がそれで納得するはずも無い。

「僕の話もするし、ピーター、あなたの話も聞きたいから、中に入っても？」

あわてるキヤルの頭に、ぽんと手を置いて黙らせると、セインはピーターに結論を促した。

「キヤ、ロット、様が言っ、いた、のはこういう、こと、で、すか」

「へ？」

いきなり名前を出されて、キヤロットが頭の上に乗せられた手をどけようと躍起になりながら、変な声を出した。

「ほ、ほら、剣でも、人、でも、どっちでも、せ、セインは、セイン、だって」

確かに、そんなことを言った気はする。

「キヤル、それ、説明になってないよ」

「間違っではないわよ」

確かに間違っではないが説明不足過ぎる。

「と、とに、かく、中、へ。話、は、それから、で」

気がついたように、ピーターが二人を屋敷内へと誘った。

キヤルもセインも、ピーターの後について屋敷の玄関へ、再び足を踏み入れた。

屋敷の中は、相も変わらず少女趣味で、フリルとレースに飾られ、シャンデリアの蝋燭や、ランプに照らされて、さらに雰囲気醸し出されているものだから、セインはまたもや、いたたまれなくなってしまう。

が。

今度はピーターがいるからか、室内で浮いているのは自分だけじゃないと思えて、なんとなく安堵してみた。

「えーっと」

ピーターだって男なのだし、きっとこの屋敷の内装には似合わないに違いないと思ったのだが。

長年、彼はこの屋敷に暮らしているせいなのか、はたまた着ている服が、どこかしらゼルダに合わせてヒラヒラしているせいなのか。

「な、にか？」

自分を見つめるセインに、ピーターは首をかしげた。

「い、いやあ、馴染んじゃってるなーって思っただけだから」

お世辞にも美形とも言えず、骨格も背が曲がってこぶができ、歯も欠けているのか口の形も上下が合っていないピーターだが。なにより、彼は男で、とてもこのパステルカラーのぴらぴらのゴテゴテの、花園みたいな屋敷の内装に、似合わないはずなのだが。

違和感がないのである。

「そ、りゃ、ここに、暮らして、二、十、年近、く、なりま、す、から、馴染み、ます」

恐ろしきかな、時の流れというものは。

「僕だけ浮いてる？」

結局、明るくて暖かい屋敷内に、落ち着いて入れたものの、自分だけがそぐわない事实に、早くも屋敷から出て行きたくなるセインだった。

落ち着く一歩手前（後書き）

ずいぶんお待たせしました。そのわりに短い上に、話が進んでおりません。申し訳ありません。仕事の都合でなかなか手が回らず、執筆が遅くなっております。大変申し訳ありませんが、なるべく早く書き上げるよう努力しますので、ご了承していただけると幸いです。力量不足で本当に申し訳ないです。

腰を据えても据わらない

「こ、こち、らの、部屋へ」

ピーターに案内されて、屋敷の奥へと進んでみれば、小さな部屋に通された。

ピーターが扉を開け、中に入るように促す。

「うわあ、これまた何て言うか」

玄関のそばの、中央階段の左側にある、少々大きめの部屋。そこは応接室であるようだったが、豪華なゴブラン織りの椅子もソファも、猫足のテーブルにチェストも、全て少女趣味にピンク色で統一されていた。

屋敷の玄関よりも、自分がこの雰囲気合わない、というよりも似合わないさ過ぎる気がして、何でもないのに怖気づく。

「あんたがこのお屋敷にそぐわないのは分かりきってることじゃない」

背中をキャルに押されて、よろよろと室内に踏み入った。

毛足の長い絨毯はふかふかで、踏んでしまうのがもったいないように思われた。おまけに、柄が繊細な蝶の飛び交うゴシックなもので、自分のごつい足と見比べてしまう。

「セインは図体がでっかいんだから、扉の前で立ち止まらないでよ」

「い、いやあ。なんだか気がひけちゃって」

「とにかく早く入って、扉を閉めちゃって」

そうだ。この屋敷の中には、ゼルダも、機械仕掛けのメイドたちもいるのだ。

「ごめん」

キャルを中に入れると、セインはあわてて扉を閉めて、ピーターがいるソファにキャルを促し、自分も席に着いた。

部屋の中には暖炉が焚かれ、室内はほどよく暖かった。

二人が座ったことを確認すると、この部屋で待っていてください、

そう言い残して、ピーターは部屋を出て行ってしまった。

少々遅い帰りに、キヤルが機嫌を損ね始めた頃、扉がノックされた。

「お、おれ、です。入っても、い、良いで、すか？」

セインが、すぐに扉を開けてやると、そんなことをされた事がなかったのだろう、驚いて硬直してしまった。

その手には、薬箱が抱えられている。

「あはは。驚いた？」

「と、扉、を、開け、るのは、使、用人、の、しご、と、です」

「うん。でも、多分大変かなって思っ」

ひよい、と、ピーターの持って来た薬箱を、セインが取り上げた。

「これ、ありがとう」

につこりと微笑むセインに、ピーターがポカンと口を開けて、また固まってしまった。

「ピーター？」

キヤルが彼の目の前で手を大きく振ってやると、我に返って、小さくてつぶらな目をしばたたかせた。

「どうかしたの？」

「い、いえ。その」

心なしか顔が赤いのは気のせいかな？

「・・・セインって、やっぱり女顔なのかしら？」

「キヤキヤキヤ、キャロットさん？」

そういえば、ついこの前も、まぬけな海賊に女性と間違えられてトラブルの元になったような。

「まあ、どうでも良いわ」

「どうでも良いんですか」

「だって、あたしに実害はないもの」

きっぱり言い切るキヤルに、いつものことだが、セインは悲しくなった。

「それでも僕、長い人生送ってるけど、女性に間違えられるなんて、

なかったよ?」

「まあ、時代が変わったからじゃない?」

全てそれで説明がつくわけでもなければ理由にもなっていないのだが、キヤルはそこでその話を打ち切ってしまった。

長い長い、桁外れな人生の中で、ここまで猛烈に、今、すぐに、鏡が見たいと思ったことはないセインだった。

「いいから、手当てしましょ」

ぶつぶつとモンクを並び立てていても仕方がなく、腕を引っぱられるままにソファに再び座りなおして、キヤルに傷の手当てを任せる。

「キ、キャロット、様、お、おれ、が、やります、す」

こういう事も使用人の仕事とばかり、ピーターが慌てふためくので、キヤルは彼を睨みつけると、無言で椅子に座らせた。

壁際に置かれた小さな猫足の椅子が、ピーターの専用であるらしく、彼はその椅子を大人しく二人の向かい側のソファの端に持って来て、そこに腰掛けたのだった。

「なんでソファに座らないの?」

キヤルが聞けば、ピーターは首をかしげて、不思議そうな顔をした。

「し、使用、人、で、すか、ら」

「ふうん」

納得したのかしないのか、キヤルはそう言って、そのままじいっと、ピーターから目を逸らさない。

「あ、あの?」

「んー? 何から聞いたらいいのかなーって思って考えてるだけだから、気にしないで?」

にっこりと微笑んだが、ピーターは戸惑っているようだ。

「キヤル、それじゃあ、ピーターが落ちつかないよ」

「セインは黙ってて」

止めていた手をまた動かして、くるくると、器用にセインの腕に

包帯を巻いてゆく。

「やっぱり、セインロズドになっちゃえば早いんだけど」

「さっきも言ったけど、セインがその姿になったら、誰がカバンとセインロズドの両方を一緒に運ぶのよ」

「分かってますよ。だから大人しくしてるでしよう？」

「なんだか、キヤルの機嫌はどんどん悪くなる。」

「……何かした？僕」

顔を覗き込むセインの腕の包帯を、わざとぎゅうううっときつく縛ってやれば、声にならない悲鳴をセインが上げた。

「すぐさま緩めて、今度はきちんと結んでやる。」

「冗談よ。治療おわり」

ぱたん、と、薬箱の蓋を閉じれば、セインが包帯の上から傷口をさすっていた。

目には涙を浮かべて。

「ヤワだわね」

「うう、ひどいよう」

キヤルの不機嫌さは、どうやら自分の怪我にあるらしいので、セインは眉間をハの字にした。

「まだ、ゼルダに謝ってもらってない」

「キヤル？」

「セイン傷つけて、化け物呼ばわりして、謝ってもらってない」

「や、でも、僕なら大丈夫だし？」

「そう言ってみれば、包帯の上から傷口を叩かれる。」

「!!!!!!」

再び、声にならない悲鳴を上げて、セインはついに、だーっと泣き出した。

「どうして僕に八つ当たりするの？」

「大丈夫なんかじゃないくせに、大丈夫そうなフリをするからよ」

「だからって……」

優しいのか厳しいのか。

照れ隠しの一旦なのだろうとは思うが、怪我人はもっと労わろう。
そう思ってみても、相手がキャルなので、大人しく身を縮ませて、
これ以上の被害が届かないように、長身をできるだけ小さくするの
だった。

浸透する病

「あ、ご、ごめんね？」

ぽかんと口を開けて、二人のやり取りを見ているピーターに気がついて、セインが彼に謝った。

「い、いえ」

ふるふると首を振って応えてくれたが、驚かせてしまったようである。

「セインが謝ることないわ！ 売り飛ばされた上に、こんな怪我までしてるんだから」

その怪我を叩いたのは誰ですか。

喉まで出かかったが、ぐっと堪えた。

「すみ、ませ、ん」

ぺこりと、頭を下げるピーターに、セインは笑って見せた。

「大丈夫。僕なら、これくらいの怪我は、なんとかなるから」

聖剣の姿に戻れば、傷の治りは早くなる。

聖剣とセインは一心同体で、セインが鞘であると同時に、剣はセインの受け皿になる。

昔は持ち主が戦場で振るうときに、セインロズドの姿を取っていたが、今ではもっぱら、宿代を浮かせるために使っている。

たまーに、大怪我したりするときもあるが、平和なものである。

「お茶、淹れようか？」

セインが、暖炉にかけられたポットに気がつく。

お湯が沸きだして、水蒸気が注ぎ口から立ち上っていた。

「俺が、用、意、します」

暖炉の上に、交差して二本の剣が飾られており、その前にいくつかの写真立てと共に、お茶の缶が綺麗に並べられている。その中から、ピーターが適当なものを選び、細かい細工の綺麗な食器棚の中から、ティーセットを取り出して、手際よく紅茶を淹れてゆく。

ほどなく、いい香りが室内を埋め尽くし、カップに紅い液体が注がれた。

「おいしい！」

「よ、よか、った、です」

ピーターが、嬉しそうに目を細めた。

「さ、落ち着いたところで」

水を指すような感じで、心持ち気はひけたが、聞いておかなければならぬことが、沢山ありすぎた。

「どこから聞いたものか。僕も正直分からないのだけれど」
まずは。

「あの、メイドたちのことだけれど」

その一言で、ピーターから笑顔が消えた。

「彼女達は、人ではないようだったけれど？」

セインの質問に、ピーターは頷いて返した。

「あ、あれ、らは、オート、マタドー、ル、です」

「オートマタドール？」

キヤルが首をかしげた。

「自動人形、もしくははからくり人形のことだよ」

「そうで、す。よ、良く、ご存知、で」

「話に聞いた事があるからね」

機械仕掛けの人形は、戦場で使われた。

痛みを感じず、ただ突き進む人形は、格好の道具だった。

ただ、それらは脆くもあり、兵の水増しに使われる事が大多数であつた。

「あんなに、性能の良いオートマタドールは、見た事がない」

腕も足も、首さえも切り離れたところで、動くことをやめようとはしなかった。セインが見てきたどのドールよりも、良くできていた。

「卓越した技術がないと、あんなにしつこく稼動する人形は作れない」

そして何より、あの外見だ。

「まるで、生きていたようだった。腕や体を見なければ、オートマタドールだとは気がつかなかったよ」

同じ顔の、同じ格好をしたメイドたちに疑問は抱いたが、一瞬人形だとは思いつかなかった。それほどリアルに良く出来ていた。

「あれを作ったのは誰？」

「それ、は・・・」

下を向いてしまったピーターに、セインは懐から、あるものを取り出した。

「森の中の廃屋で、見つけたものなんだけど」

テーブルの上に、ことりと置いた。

綺麗な、長い指。整った筋が通った甲。

「これを作ったのは、きこりだね？」

壊れかけた空き家で見つけた、手を模した細工物は、一つ一つの関節が、稼動できるように作られた、極めて緻密なものだった。

森の中で、かつて生活していた住人達。

彼らは、あらゆる物を、森からの恵みで作り出す。家や家具、装飾品から衣類まで。

この緻密な細工物も、彼らなら、作ることができたはずだ。

「そう、です。きこりが、作った、の、です」

きこりがオートマタドールを作るのなら、あの大量のメイド達を作ったのは、捨てられた森を離れずに残った、彼らの生き残り。

「・・・そのきこりは、君なんだね？」

しばしの沈黙の後に、ピーターが、ゆっくりと頷いた。

「その、手、も、俺、作り、ました」

「じゃあ、あの家は、君の家だったのか」

細かな作業道具。壁一面の彫刻刃。

きちんと整頓されていた、朽ちかけた家の内部を思い出す。

ピーターの家だったといわれれば、確かに彼らしい、朴訥で、それでも整然とした部屋だった。

「なぜ、メイドの人形を？」

「屋敷、は、広い、です。お嬢、様、の、お世話、ひ、一人、では、無理だった、から」

はじめは、掃除の手伝いをしてくれる人形を。次に、料理をしてくれる人形を。

一人でまかなえない部分を、まかなうために、人形達を増やしていった。

「でも、おかしいわ」

キヤルが、不機嫌に眉根を寄せる。

「私、このお屋敷で、あのメイドたちを見たのは、今日が初めてだった。それまで、この屋敷にメイドがいるなんて、気がつきもしなかったわ」

誰もいない調理場と洗い場。使用人部屋さえ、もぬけの殻で、ピーターが一人で全てをこなしているのかと、感心したりもしたが、気味悪く思ったことも事実だ。

「それ、は」

言いよどむピーターの代わりに、セインが言い切った。

「ゼルダ、だね？」

びくり、と、ピーターの肩が震える。

「彼女に、オートマタドールを、見られなくなかったんだろう？」

セインの言葉に、自分の膝の上に置かれたピーターの拳が、ぎゅうっと握りこまれる。

「大方、夕方から朝方にあれらを動かして、彼女には気づかれないようにしていたんじゃないのかい？」

その問いに、ピーターは沈黙で返した。

「流行り病は大変だったらしいね？君は、大丈夫だった？」

はっと、小さなピーターの目が、見開かれた。

「僕を、森のそばの村に売り飛ばしたのは失敗だったね。あの村で、僕はゼルダの葬儀に出席したという人に、会っているんだ」

静かな瞳で、セインはピーターを見つめる。

「ゼルダの葬儀って、どういうこと？その村の人、おかしいんじゃないの？ゼルダは生きているわ。生きているのに、お葬式をしたっていうの？」

キヤルが怒鳴った。

「どういふことよ！セイン！」

「キヤル」

胸倉を掴みかかられたまま、セインはずれた眼鏡も直さずに、寂しそうに笑った。

「もう、分かっているんでしょ？」

その言葉に、全身から脱力して、キヤルは椅子に、どっと寄りかかって座り込んだ。

「不幸なことに、過去、この辺りで流行り病があった。村人が何人もなくなった。領主であるゼルダの両親が手をつくしたけれど、その猛威は、彼らの娘にまで及だ」

大人でさえ命を落とす。

小さな子供には、ひとたまりもなかっただろう。

乗り越えるという事

「もう、三年も前にゼルダは亡くなっているんだ。それを、君が復活させた。いつまでも若く美しいまま、成長を止めさせた形で」

「そ、それは・・・」

ピーターの顔から血の気が失せ、小さく、こくりと頷いた。

「彼女は、君の作ったオートマトンだ」

ピーターの小さな目から、ぽろぽろと涙が零れ落ちる。

「ごめん。辛い思いをさせてしまったね」

この屋敷に初めて来たときに感じた寒気は、人が住んでいるはずの屋敷に、人の温かみを感じなかったためのものだ。

人工の建造物は、人が住んでいないとなると、全く様相が変わる。そこにあるはずの温かみが、全く抜けてしまうのだ。

この広い屋敷に、生きて住んでいるのはピーター一人である。手入れをされているというのに、人の気配がほとんどしなかった。

「お、嬢、様を、失い、たく、なかった、んで、す」

ぽつりと、ピーターが呟くように語り始めた。

「あの、流行病、は、悲惨で、した」

体中に斑点が浮かび、高熱にうなされ、水を求めて苦しみながら息絶える。一度かかれれば、五人に一人助かれれば良い方だった。

小さなきこりの村は、あっさりと壊滅してしまった。

「ゼル、ダ、様は、お、俺、たちの、光、だった。やさ、しくて、笑、うと、みんな、なが、幸せ、に、なった」

その少女の小さな命さえ、救うことができなかった。

「こ、こんな、み、醜、い、俺、のこ、と、好き、だ、って、言っ
て、下さった、のは、ゼルダ、お嬢、様、だけ、だった」

背骨が曲がり、隆起したコブ。いびつな体。顎の骨が噛み合わない醜い顔。そんな彼でも、少女は偏見の眼差しで見る事無く、普通に接したのだろう。それは、ピーターにとって、まさしく至上の喜

びであつたに違いない。

「お嬢、様は、俺の、人形、が、大好き、で、いつ、も、喜、んで、くだ、さつた」

「だから、彼女を、人形に？」

ゼルダそっくりの人形を作ったのは、自分を慰めたかっただけだったのだろう。

だが、やがてオートマタドールをゼルダと思い込むことになり、世話をやき、生前の彼女と同じように接するようになった。

人形と人間との境が無くなってしまふほどに。

そしてそれは、人形にも影響が及んだ。

「ピーター・・・」

セインは、小さくうずくまってしまったピーターに呼びかける。

「それは、どういふことか、分かっているね？」

誰も救われない。

死んだ人を、死んだと思えないのは、哀れだ。いつまでたっても、立ち直れない。

そして、自分を人間だと思ひ込んでしまったオートマタドール。

人形は人形のまゝ。

人のように成長もしなければ、心臓が動き、熱い血液が体を巡ることもない。

ゼルダは、ピーターがいつしか土に返り、この世からいなくなつてしまつても、壊れるまで永遠にこの世界に留まり続ける。

「ゼルダを、なんとかしてやれないの？」

キヤルが、大きな青い瞳で、セインを見つめた。

「僕には、どうすることもできない」

「セイン！」

「これは、ピーターと、ゼルダの問題だよ」

突き放すセインに、キヤルは体をこわばらせたまま、ピーターを見た。

丸い肩が、震えている。

「お、俺が、駄目なん、です。全て、俺、が」

「ピーターは悲しかったただけだろう？自分と親しい人がどうにかならなかったら、誰だって悲しいからね」

「そう、です。悲しくて、あ、あたり、前、なんです。おれ、が、わが、まま、なんです。お、嬢、様、生きてい、て、ほし、くて」
「・・・でも、それだけはいけないよ。それでは君もゼルダも、かわいそうだ」

ぽろぽろとこぼれる涙と、鼻水とが一緒になって、ピーターの顔はくしゃくしゃだ。

キヤルが差し出したタオルで、顔を覆ってしまった。

「お館、様たち、が、一、番、辛いん、です。ひ、一人、だけの、お、嬢様、亡くされ、たん、です。でも、何も、いわ、なか、った。お、俺だけ、が、た、耐えられ、なくて、よ、弱い、から」

「そこまで分かっているながら、何故ゼルダを作ったりしたの！？あの子がかわいそうよ！」

拳を握り締めて、唇を食いしぼるキヤルの頭を、セインが優しく撫でた。

「分かっているなら、大丈夫だね？」

問いかけるセインに、ピーターはこくりと頷いた。

今のゼルダと、三年前に亡くなったゼルダは、違うものなのだと、作り主のピーターが理解できたら、後は彼の心持ち次第。

このまま、オートマタドールと暮らすのも。その生活を壊すのも。自分が死ぬ前に、彼女を壊すことができればそれで良い。

この館だって、今の領主の代が終わってしまえば、どうなるかわからないのだから。

どう足掻いても、どんなに望んでも、一度死んだ人は帰っては来ない。

姿かたちが似たものを作り出したところで、それは取り戻したかったその人ではない。

キヤルは、ちらりとセインを見上げた。

長い長い時間、生きてきたセインは、やはり沢山の死を見てきたのだろうか。

キヤルと出会う前、セインは岩に突き刺さった、錆び付いてボロボロになった聖剣の姿で封印されていた。それも、自らが争いの元となることを嫌って、自分で自分を封印していたのだという。

大賢者 聖剣 セインロズド

それが、セインの剣の名前で、呼び名だ。

手にした者は、世界をも手に入れることができると謳われた伝説の剣。

「どうしたの？」

「！・・・な、何でもないわ！喉が渴いたのよ！お、お茶ちょうだい！」

飛び跳ねたキヤルに、セインもピーターも驚いたが、言われてみれば、カップの中身は、全員既に空っぽだった。

「あ、気が、付き、ません、で」

ピーターがあわてて立ち上がったのを、セインが引き止めた。

「ああ、ピーター。いいよ。僕がやるから、君は座ってて」

「し、しかし」

「いいから。僕のお茶は、これでも天下一品だよ？ピーターに、飲んで欲しいな」

につこりと言われて、ピーターは、ぽけっと一瞬惚けたあと、顔を真っ赤にした。

「す、すみま、せん」

「良いんだ。君は少し、人に頼ることを憶えないとね？」

「で、でも」

「使用人って言っても、程があるよ。なんでも一人で抱え込まない。誰でも良いから、相談する。君は、自分が万能ではないんだって自覚しなくちゃ」

そうすれば、ゼルダを失った悲しみも、抱え込まずにすむだろう。

「いいのよ、ピーター。座ってたら？」

セインの言いたい事がなんとなく理解できて、キヤルはソファに深く沈んだ。お茶が来るまでくつろぐつもりだ。

「し、しか、し、使用、人、は、お、俺で、す、から」

おろおろするピーターの裾を、キヤルが無理に引っばって、浮いた腰を元に戻させた。

「ピーターは座ってなさい」

大きな青い瞳に睨まれて、ピーターは大人しく頷いた。

ピーターが大人しく彼専用の椅子に落ち着いたのを見定めて、セインは立ち上がろうとする。

「お嬢様!!!!」

「セイン!!!!」

セイン以外の二人が、同時に悲鳴をあげた。

「・・・・え？」

脇腹が異常に冷たくなったと思った瞬間、今度は急激に熱くなった。

振り返り、ソファの後ろに見えたのは、愛らしいゼルダの姿だ。

彼女が手にしているのは、小さな体に見合わないような大きな剣。その剣が、セインの脇腹に突き刺さっていた。

人として

「ゼル、ダ？」

にっこりと、可愛らしく微笑む少女の握る剣の柄には、セインの血が滴っている。

「しまった・・・！」

セインとキヤルの座っていたソファは、入り口の扉を背にしていた。おまけに、この部屋の絨毯は毛足が長く、足音を消してしまう。ピーターからは、そのソファが陰になって扉が見えにくい。それでなくとも、彼には開く扉に気がつく余裕はなかっただろう。

「お嬢、様！」

「夕食の時間に、食堂に行ったのに、いつまでたってもピーターが来ないのであるもの。もしやと思ったの。やっぱり、貴方が邪魔をしていたのね」

「お、お嬢さま！ な、なん、て、事を！」

血の気が一気に失せた顔で、ピーターが少女にすがりつく。

「気配に、全く気づかなかった。ゼルダ、やっぱり、君は」

刺された場所だけが熱かったのに、今や全身が痺れるようだ。

喉からせり上がる体液をこらえて、セインはセインロズドを取り出した。

「！！！！」

全て取り出す前に、ゼルダがセインの体から、突き刺した剣を無理やり引き抜いた。

引き抜かれた剣の切っ先の後を追って、セインの血が、空中に弧を描く。

「あなた、邪魔なのよ」

剣に付いたセインの血を振り払いながら、ゼルダは長い黒髪を、うっとうしそうに背中へ払った。

ごぼり

嫌な音と共に、口から大量の血を吐き出して、セインが崩れ落ちる。

毛足の長いじゅうたんの上に、セインロズドが突き刺さった。

「セイ、ン？」

目の前でおきた出来事に、キヤルは理解ができずにセインの名を呼んだ。

ソファに、それこそ糸の切れた人形のように、セインは倒れたまま、キヤルの呼びかけに答えない。

指先さえ、ピクリとも動こうとしない。

「せいん？」

もう一度、呼びかける。

キヤルの呼びかけに応えたのは、セインの口からも、腹からも、どくりどくりと流れ出す、大量の、真っ赤な血。

「さあ、キヤル。邪魔なバケモノはいなくなっただわ。これで、私と一緒にいてくれるでしょう？」

嬉しそうに笑って、ゼルダは赤く濡れ染まった幼い手の平を、キヤルに差し出した。

「ひ、いや、い、や」

ゆつくりと、首を振り、知らず知らずに、数歩さがる。震える両手で顔を覆うと、キヤルは遠くに悲鳴を聞いた。

どこからそんな声が出るのか、不思議な、耳障りな甲高い声。

それが、自分の喉の奥から発せられているのだと、ようやく気づく。

がばりと、突き刺さったセインロズドを床から引き抜き、ゼルダへ飛び掛かった。

「何をするの？」

一閃目で、ゼルダの頬に剣先が掠った。

「よくも！」

今度はセインを突き刺した、赤く染まった刃でかわされる。

「分らない」

「よくもセインを！」

飛び退ったゼルダを追いかけて、セインロズドを横に薙ぐ。
ゼルダの髪が、一房切れて宙に舞う。

「どうして？」

「セインを元に戻してよ！」

ズダン！

二本の剣が拮抗し、切り結んだまま、二人はお互いを見つめた。

「あの人はバケモノなのよ！？」

「あいつがバケモノなら、あんたはなんなのよ！」

「何言って・・・」

「今切った頬の傷から、何が見えるのかしらね？」

しゃりん、という金属音と共に、二人は体を離れた。

「見てなさい！」

キヤルは言いざまに、自分の腕をセインロズドの刃にあてた。

「これが、生きている人間の証だわ！」

刃を当てた傷口から、赤い血がこぼれて、一本の筋を作った。

「セインが流したものと、同じものが、私の体の中にも流れてる。

セインがバケモノなら、私だってバケモノってことになるわ！」

「キ、キャ・・・ルっ！」

倒れて動けないまま、セインがキヤルを呼んだ。

「セイン！」

思わず顔が緩む。

なんとか生きてはいるらしい。

「あんまり心配かけんじゃないわよ！」

しかし反論は返ってこない。先程の声が、精一杯であるらしかった。

「バケモノ、まだ生きているの？」

イライラと、剣を構え直して、セインに切りかかろうとするゼルダの前に、キヤルが立ちはだかった。

「セインはバケモノじゃないって、何度言えば分かるの！」

ぽたりと、キャルの腕から赤い雫が落ちて、絨毯に赤い染みを一
つ作った。

その染みを見るなり、ゼルダはギョツとして、後ろへ飛び退った。
赤い液体。

自分には無い、得体の知れない液体が、キャルの中にも流れてい
る。

「うそ！だって、だって！」

困惑を隠しきれず、ゼルダは絨毯の赤い染みを凝視して、何度も
首を振った。

その隙に、キャルは太もものホルダーから銃を抜くと、セインの
前に、セインロズドを突き立てた。

「はやく、元に戻んなさいよ！」

視線はゼルダから外さないまま、怒鳴りつける。

「で、も・・・っ、ぐっ」

ゼイゼイと、荒い息の下で、セインが呻いた。

セインがゼルダの目の前で、セインロズドと同化して見せれば、

彼女はますます、セインを化け物と確定してしまうだろう。そうな
ったら、キャルは？

「いいから、戻んなさい！」

「ごめ、ん」

気を失うように目を瞑ったセインと、セインロズドから真っ白な
光が同時に輝き、客間を覆った。

あまりの眩しさに、ピーターもゼルダも、目を庇い、何事が起き
たのか判断できないまま目を開ければ、そこには銃と剣とを構えた
キャルがいた。

「セイン、様、が、いな、い？」

彼の倒れていた場所には、大量の血痕が残るばかりで、あの長身
がどこにも見当たらない。

「どこへあのバケモノを隠したの？」

「バケモノって何のことよ？セインはセインだわ。バケモノでも何

でもない」

「はぐらかさないで！キヤルは騙されてるんだわ！」

そうだ。きつとそうに決まっている。キヤルを渡さないために、あの男がキヤルを騙して、キヤルの中にも赤い液体が流れていると思ひ込ませているのに違いない。

「・・・は？」

一瞬、キヤルの頭の中が真っ白になった。

「騙す？誰が？誰を？」

驚いた口調で、キヤルがゼルダを凝視する。やっと、自分をまともに見てくれたのが嬉しくて、ゼルダの表情が少し和らいだ。

「あのセインって人が、キヤルを騙しているのよ！」

途端に、キヤルが大声で笑い出した。

「お、おかしいこと言わないでよ、お腹が痛くなっちゃう！」

腹を抱えて笑いながら、キヤルはそれでも銃口をゼルダから逸らさない。

「セインが、私を騙すわけがないじゃない」

きっぱりと、言い切った。

「何故、そんなことが言い切れるの？」

「何故？決まってるわ。セインの馬鹿に、そんな器用なこと、不可能だからだわ」

怪我をしていなければ、ここで猛烈な抗議が、セインから発せられただろう。

「私より、あのセインっていうバケモノの方が良いっていうの？」

友達になってくれると言っていたのに。

アレは全て嘘だったのか。

「残念だけど、少なくとも人が大事にしているものを壊そうとする人とは、友達になんかなれないわね」

「大事？あのバケモノが、大事なの？」

やっぱり、邪魔だ。あのバケモノさえいなくなったら、キヤルはちゃんとこの屋敷に住んで、一緒にいてくれる。

「バケモノじゃないって何度言ったら分かるの？セインは人間よ」

「まだそんなことを言って！あんな赤いものが、人間から出てくるわけがないわ！」

「私にもその赤いものが流れているわ。さっき見せたでしょ？二回も痛い思いしたんだから、さっさと納得して欲しいもんだわ」

「痛い？」

「そうよ。怪我したら痛い。人間なら、誰にだってある感覚よ。痛いから怪我するのは嫌だし、相手が痛いって分かるから、傷つけちゃいけないんだわ」

分からない。

痛いつて、何？

怪我なんて、切れたらくっつけて、それでおしまい。赤い液体が流れることも、痛いなんて感覚があることも、ない。

「分からない・・・分からないわ」

「お嬢、さ、ま」

そっと、ピーターが呟いた。

「どうしたの？ピーターったら、目から水が出てるわ」

ピーターまで、おかしくなってしまったのだろうか。目から、どろどろん水が溢れている。初めて見る。

コレは何？

「もうし、わけ、ねえ。お、嬢、様」

魂の住処

涙の他にも鼻水までたらし、ハンカチで鼻を拭くピーターに、ゼルダは不思議そうに彼の顔を覗き込んだ。

「ピーターが謝る必要はないわ？」

「いい、え、俺は、とん、でも、ねえ事、しました」

そう言うと、ゼルダの手にした剣を驚掴みに、ピーターは握りこんだ。

「ピーター！」

声を上げたのはキヤルだ。ゼルダは、不思議そうに首をかしげた。
「何やってるのよ！」

キヤルが、ピーターの手を、剣から引き剥がす。

痛みで、握りこんだ形から動かせない手の平は、想像以上に硬い。
先ほどセインの怪我に使った救急箱から消毒薬とガーゼ、包帯を取り出して、手当てするが、巻いているそばから包帯が赤く染まってしまう。

「軽く切るだけでいいのよ！握りこんだら、剣によっちゃ指が落ちてるわ！」

たまたま、セインを貫いた後で刃が鈍っていたから良かったのかもしれない。これがセインロズドだったら、スッパリ指が無くなっていたところだ。

「ゼルダ！手伝って！」

きりきりと、血止めの為にピーターの上腕部を包帯で締め付けながら呼んだが、ゼルダからの返答はない。

「・・・ゼルダ！」

見れば、ただ呆然と突っ立って、しゃがみ込んだピーターを見詰めている。

きつく包帯を結び終わると、キヤルは勢いよく立ち上がった。
ばん！

弾けるような甲高い音が響く。

「ピーターの指が動かなくなったら、どうするの!？」
キヤルが、ゼルダの頬をひっぱたいたのだ。

「ピーターの、ゆ、び？」

叩かれた頬を押さえて、ゼルダがポツリと呟く。

「そうよ! 動かなくなったら、あんたの世話も出来なるなるわ。そうになったら、一体どうするの？」

「だ、って、張り替えて、繋ぎ合わせ、て・・・」

「ピーターにはそれが出来ないのよ!」

ゼルダの瞳が大きく揺らぎ、口が耳まで避ける。それは、裏庭で見せた、あの形相だ。

身構えたキヤルだったが、ゼルダは襲い掛かろうとしたまま動きを止めてしまった。

「お、嬢、さま」

「ぴー、たー？」

語りかけるピーターに、壊れた表情のまま、ゼルダは応答する。

「ねえ、ピーター? どうして？」

「すみ、ま、せ、ん。お嬢、さま」

どうしてピーターが謝るの? どうして、ピーターから赤い液体が出てくるの? どうしてそんなに辛そうな顔をしているの? どうしてそんなに困ったような、悲しいような目をしているの? ピーターから赤い液体が、血が出てくるのなら、私は?

どうして私の身体の中には赤い液体が無いの?

どうして私は怪我をしてもそんな風に辛くないの?

痛いって何?

どうして?

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして?

ワタシハ、ナニ?

「ワ、タ、シ？」

キヤルに切られた頬の傷跡を触れば、奥から歯車の回る感触があった。

きりきりきり

そんな音が聞こえたような気がした。

「お、嬢、様？」

ピーターが、ゼルダの頬に手を添える。

大きく見開いた眼も、裂けてしまった口元も、ぴたりと動かない。

「ゼルダ？」

キヤルもピーターと一緒にあって、ゼルダの顔を覗き見た。

かしゅん、と、微かな音をたてて、ゼルダがくず折れる。

「お嬢様！」

ピーターが必死に支えるが、ゼルダは力のない人形に戻ったように、動こうとはしなかった。

「ゼルダ？ゼルダ！」

きり

歯車の回る音が、小さく響いた。

「お、じよ、さまっ」

「ちよっとピーター！一体何がどうしたっていうの？ゼルダは？！」

ゼルダを抱きしめたまま、大粒の涙をぼろぼろこぼすピーターにキヤルは掴みかかった。

「お、おれが、わ、る、いんで、すっ！お、お、おれ、がっ！」

ただただ、それを繰り返す。

「だから、それじゃ意味が分からないわよ！」

先ほどまで、動いていたのに。

普通に会話をしていたのに。

「キヤル」

小さな声が、セインロズドからこぼれた。

「セイン？」

自分が握り締めた聖剣を見つめる。

「ゼルダは、人形に返ったんだよ」

「どういうこと？」

「一番身近で、一番信頼して、一番の友人であったピーターが、自分とは違うと、気が付いた」

それはつまり。

「彼女が、自分は人間ではなく人形なのだと、気が付いてしまったんだ」

人形は、人形でしかない。

ゼルダは自分が人間ではないと気が付いてしまった。だから、人形に戻った。

「ちょ、ちょっと待ってよ！それじゃ？」

友達が欲しいと言っていた、あの少女はどこへ行ってしまったのか。

「だって、ゼルダはちゃんと動いて、ちゃんとしゃべって・・・！」
人形は人形にしかねないというのなら、あの少女は、ゼルダは何だったのか。

「たしかに、人形は人形だ。それ以上にはなり得ない。けどね？」
不意に、あたりを光が包み込む。

気が付けば、セインがキャルの頭を撫でていた。

「物には、魂が宿ると、聞いた事があるよ」

魂が宿る。それは。

「誰かが大切にしている物、長く使われた物、長く在り続けた物。そんな物には、魂が宿るんだ。ゼルダは、きっと、ピーターが魂を宿らせていたんだね」

それでは、ピーターが、ゼルダを人形と認めてしまったから、彼女は消えてしまったというのだろうか？

「そんなの！」

魂があったというのなら、それは生きていたという事だ。魂が抜けてしまったのなら、それは。

「そんなのダメだわ!」

振り上げば、セインの顔色は血の気が引いていて、本調子ではないことが分かってしまう。ゼルダに刺し貫かれた脇腹からは、赤いシミが広がっている。

ゼルダが持たなかった、生きている者の証。

「ピーターは、謝るべきなんだ。無闇に命を与えてしまったから」
泣きながら、ゼルダの人形をかき抱くピーターの背中は小さくて、ただ哀れだ。

「でも、だからって、ゼルダが消えてしまうことはないはずだわ!」

「亡くなってしまえば人は生きて戻らないんだ。それなのに、彼は自分の寂しさを紛らわせるためだけに、あの子を作った。それは、とても罪深いことなんだ」

「じゃあ!このままゼルダは消えても良いっていうの?!」

「そうだよ!」

知らず、セインの両手は握り締められていたのに、キャルは気が付いてハッとした。

「セイン?」

歯車（前書き）

正月早々に体調崩しっぱなしで、ずいぶんとお待たせしまして、申し訳ありません。ようやくUPです。

齒車

「・・・ごめん。言い過ぎた」

キヤルに笑って、セインはゼルダの形をした人形を抱き続けるピーターの肩に、そっと手を置く。

「君が、死んでしまったら、彼女は君のいないこの世界で、君の想いをずっと抱いて存在し続けることになる。それがどういうことかわかるね？」

丸いコブの出っ張った、小さな背中をさらに小さく丸めて、ピーターは、ただ、ただ、涙を流して、嗚咽を堪えて、人形を抱きしめている。

「それ、でも、お、おれ、はっ」
生きていて欲しかった

口に出したくても出せない言葉を飲み込んで、ピーターはくしゃくしゃになった顔で、セインを見上げた。

涙でゆがんで見える不思議な青年は、何故かピーター自身よりも、泣いているように思えた。

「君が、生きていて欲しかったのは、三年前に亡くなったゼルダお嬢様？それとも、今、その腕の中にある、人形のゼルダお嬢様かい？」

残酷な質問だった。

ピーターは泣くのも忘れて、小さな瞳を大きく開いて、青年の顔を見つめた。

今の今まで、ゼルダはゼルダだと、二つの魂を別々になど、考えたこともなかった。

あの、可愛らしく、村中の皆に愛された少女と、自分がこの手で作った、作り物の少女。

それでも、少女は、ピーターの中でたった一人の存在なのだ。
選べるはずもない。

「ピーター？」

か細い、自分の知っている少女とは違うトーンの声がして、首を動かせば、金色の、ふわふわした、綿菓子みたいな髪をした、青い瞳の少女が目映る。

ゼルダの様に、自分を気味悪がりもせずに、優しく接してくれた少女。

そういえば、ゼルダは、この少女に、なんと言っていたただろうか。

「お、とも、だち・・・」

「え？」

ぽつりと、ピーターが呟いた。

「キャ、キャル、さま」

唐突に名前を呼ばれて、キャルはあわてて、ピーターの下へ駆け寄った。

「何？」

「ゼルダお、嬢、様のお、お、おとも、だち、に・・・」

動かない人形の髪を、いとおしそうに撫でながら、ピーターが呟いた。

キャルに向かって頼み込むというよりは、ただ単に、ゼルダの人形に向かって語りかけるような、そんな口調だ。

「大丈夫よ。私は、一緒に此処に住んではあげられないけれど、お友達になら、なれると思うわ。私、ゼルダにずっと、そう言っていたのよ？」

そうキャルが笑って答えれば、ピーターも、うつすらと笑う。

「キャルさ、ま、なら、きっと、良いお友、だちに、なって、下さる」

ぎゅっと、ゼルダを抱きしめて、ピーターはセインを見上げた。

「お、おれ、が、今、い、生きていて、欲しい、のは、ここに、いる、お嬢、様、です」

しっかりと告げて、人形の閉じた瞳をなで、髪をなで、ピーター

は、カチャリと人形をソファに寝かせた。

「そうか。それなら、もう一度、奇跡は起こるかも、しれないね？」

セインは、見上げるピーターに微笑むと、ぐらりとくず折れた。

「セイン！」

慌てるキヤルを手の平で制して、荒く息をつく。

傷口からは、赤い血が、まだ染み出しているようだった。

「大丈夫。僕には君がいるからね」

血で染まった手で、キヤルに触れないように、腕でキヤルを引き寄せる。

「意味が分からないわ」

本当に分からないのだろうか、きょとんと返されて、セインは苦笑した。

「それより、血を止めないと！」

カバンからありったけの包帯を引っ張り出して、セインをぐるぐるに巻いていく。

ひととおり作業を終えてみれば、床の上に座り込んだまま、セインはソファに寄りかかって眠ってしまった。よほど堪えているのだろう。

ピーターはピーターで、ゼルダの背中をかぱりと開けて、カリカリと、何か作業をしていた。

「また、動くようになるかしら？」

「オートマタ、ドール、は、得意、なんで、す。だから、だいじよう、ぶ」

でも。

また動いたとして、この人形は、既にただのオートマタドールでしかないのだろう。あの、闊達で、寂しがり屋の可愛らしい少女は、帰ってこない。

「と、とれ、た」

「へ？」

嬉しそうに、ゼルダの体内から真っ赤な歯車を取り出して、ピー

ターがキヤルに掲げてみせる。

「お、お嬢、様、の、心臓、です」

「心臓って」

小さな、赤い歯車は、上質の柘榴石で出来ていた。

「うわ、綺麗」

思わずそう口にしてしまったが、透き通る赤は、血の色に似ている気がした。

「お嬢、さま、の、お友、だちに、持っていて、欲しい、です」

笑顔で言われて、キヤルはピーターの意図を汲み取ると、勢いよく頷いてみせる。

「私、大事にする！それで、いつでも身に付けているわ！」

持っていたペンダントに、赤い歯車を通して、首にかけると、ピーターは嬉しそうに手を叩く。

そこで、キヤルは唐突に閃いたアイディアに、嬉しくなってピーターの両肩を鷲掴んだ。

「私たち、旅をしているの。探し物の旅！」

それは、とっくの昔に聞いている。だから、この屋敷に留まれないと言っていた気がすると、激しく揺さぶられながら、ピーターは必死になって首を縦に振った。

「さ、探し、もの、な、なんで、すか？」

「人に言うのは恥ずかしいからあんまり言わないのだけれど」

ようやくピーターを解放して、キヤルは顎をつまんで考え込む。

「ピーターになら、話しても良いわ」
にんまりと笑った。

「大変、そう、です」

その顔を見て、いろいろと心配になったピーターだった。

そんなピーターにはお構い無しで、キヤルは誰がいるわけでもないのに、きよろきよろと辺りを見回す。

「エルドラドって、知ってる？」

ひっそりと、声を小さくするキヤルに、ピーターも釣られて、声

を小さくする。

「え、えるどら、ど？」

「そう。エルドラド」

不思議なその響きは、どこか遠い昔に聞いたような気がして、記憶を探る。

「・・・・エル、ハザンド？」

ようやく思い出してみれば、声に出していた。

名前は微妙に違うけれど、太古の昔にとっても栄えた王国が、何処か遠い所にあつて、まるで楽園のようだったとか。

この森を抜けた所に、かつてその国と公益をしていた民族があつて、それが自分たちのご先祖様だと、昔語りに幼い頃、祖母から聞いたような気がする。

そしてもう一つ。

これも、祖母から聞いた話で、誰もが分かち合つて平和に幸せに暮らすことが出来るといわれている、幻の。

その楽園にあやかつて、いつしか人々が、その大いなる国の名前を、エルドラドに栄光あれという意味で、エルハザンド、と呼ぶようになった。

そのエルドラド？

そこまで話すと、がっくりとキヤルが、盛大に肩を落とした。

「また、違ったのかー」

「へ、へえ。すいま、せん」

「ピーターが謝ることじゃないわよ」

ぺたんと、ゼルダを抱えたままの自分に目線を合わせるように、キヤルが床に座り込んだ。

「私たち、エルドラドを探しているの」

それはまだずいぶんと、壮大な。

まさか本気ではないのだろうけれど、その楽園を探してどうするとか。

「この歯車、エルドラドを見つけたら、そこに埋めてあげる」

「え？」

赤い齒車を見つめながら、キヤルが言うので、ピーターは一瞬、聞き違えたように思って、何のことかと聞き返した。

「エルドラドみたいな楽園だったら、ゼルダだって寂しくないと思うわ」

誰もが平等で、誰もが幸福な、美しい場所。

そんな場所なら、寂しがり屋の少女だって、きっと喜ぶだろう。

「う、うそ、でも、うれしい、です」

「嘘じゃないわ。本気よ。私たち、必ずエルドラドに辿り着くんだから！」

そう言って、少女はいたって大真面目で、眠る青年を振り向く。

原因は、どうやら、このセインという不思議な青年らしい。

「おとも、だちが、欲しかった、お嬢、さま、です。楽しい、場所で、キヤル様、と、いられる、なら、喜ぶ、おもしろい、ます」

「約束するわ！」

華やかに笑って、キヤルが小指を差し出した。

「な、なに？」

「いいから、ピーターも小指出して！」

おどおどと、言われるままに小指を差し出せば、その小指に、少女の細くて小さな指が絡まった。

それを、勢いよく降りながら、キヤルが嬉しそうに、なにかの呪文のような言葉をとなえる。

「ゆーびきり、げーんまん！」

指を離すと、真剣な眼差しで、ピーターを覗き込んだ。

「これで、約束成立！」

にかつと笑う。

ゼルダとは違う、可愛らしい笑顔だ。

「この前知り合った、気のいい海賊に教えてもらったの。うんとずっと向こうの、東の果てにある島国では、約束をするときにこうするんだって」

気のいい海賊。

そんなものがあるのか。でも、この少女が言うのだから、いるのだろう。

「約束をやぶると、針を千本飲まされるのよ。それで、地獄に落ちてしまうのですって！だから、必ず約束は守りますっていう、制約みたいなものね」

「それ、タカに教わったの？」

「ううん、ギャンガルド」

「・・・タカじゃなきゃ、ラゾワかと思ったけど、そんな物騒な話を君にするのは、やっぱりギャンガルドか」

気がつけば、眠ってしまったていた青年が、目を開けていた。

海賊とは、まさかキャプテンギャンガルドのことだろうか。気のいい海賊なんて、言っていられる相手ではないと思うのだけれど。

「あ、あの、怪我」

「ん。もう、大丈夫」

包帯にも血が滲んでいたし、顔色だって、ずいぶん悪いのだけれど、先程よりは、赤みが出てきたように見える。

それでも、大丈夫といえるレベルではないはずなのに、青年は笑って答えてくれる。

自分より若いように見えるのに、なんというのか。

「人が悪いわね。いつから起きてたのよ」

「酷いなあ。指きり拳万のところからだよ」

たしかに、あれだけうるさくしていたら、起きてしまっただけかもしれない。

「あれ？その歯車」

目ざとく、キャルのペンダントに加わった、ゼルダの赤い歯車を見つけて、セインが指をさした。

「もらったのよ」

「ゼルダの？」

「な、なんで分かるのよ？」

「うん。なんとなく。ああ。それで、指きり拳万？ありがとうね、ピーター」

「だから、何で分かるのよ！」

「いやあ、だって、なんとなく。ピーターからゼルダの歯車もらって、エルドラドにもってって、ついでに埋めちゃったりなんかするんだって約束しての、指きり拳万かなーってくらいの予想はつくよ？」

普通、予想がついてもそこまでぴたりと当たらないのじゃないかと、ピーターはこっそり思う。

「ホントは、起きていたのじゃないの？」

「？どこからさ？」

本気で尋ね返しているらしいセインに、キャルは真っ赤になって怒鳴った。

「今回ばかりは言わないでおこうと思ったけど、やっぱり言わせてもらおうわ！」

「え？」

後ずさって、セインが反射的に身構えるのも待たずに。いつものアレが炸裂した。

「セインなんか、引っこ抜くんじゃなかったわ！！！」

「ひ、ひどいよ！」

涙目になって訴えるセインだが、わき腹も痛いといえど痛いらしく、結局いつものように長身を丸めて、涙にくれるのだった。

鞘問題（前書き）

一月経ってしまいまして、本当に申し訳ないです。
ようやく次話投稿です。お待たせいたしました！。やっとUPでき
た（＾－＾；）

鞄問題

「いいから、黙って剣になってなさい！」

びし！つと指をさされ、セインはさらにさめざめと泣く。

キヤルの言うとおりに、剣の姿に戻るのもかまわないけれど。

「僕が剣になっちゃったら、誰がカバン持つのさ」

底に車輪が付いているとは言っても、キヤルのカバンは結構重い。何せキヤルの愛用の拳銃やら弾丸やら、それらの整備用品やらがまとめて入っているのだ。

「あんたに会うまでは一人で持って歩いてたのよ。なんてことないわ」

「……じゃあ、誰が抜き身の僕を持つの？」

「…………あー」

「忘れてたでしょ」

セインロズドは鞄のない抜き身の剣で、しかも聖剣と呼ばれるだけあって切れ味はそれはそれは抜群に良い。

重さは、キヤルにあわせて軽くなるとはいえ、長さもあれば刃もあるわけだ。

二人のやり取りを見ていたピーターは、すっかり口を開けて、ぽかんとしていた。

「ねえピーター」

毒気を抜かれてしまったてゝ然とするばかりのピーターに、キヤルはかまわず話を進める。

「もし、セインの剣の鞄を作るとして、どれくらい掛かるかしら？」
両手を腰に当てて、実に偉そうに訪ねる。

「ちよ、キヤルちよと待ってよ」

「なによ。どっちにしたっていずれ鞄はいるでしょうが」

「いや、そうじゃなくって！第一、いきなりピーターだって困るよ」
眉間に皺を寄せ、慌てふためくセインに向けて、大きく足を振り

上げた。

「うわあ！」

気がついて、危うく踏みつけられそうになった右足を、大慌てで引っ込めると、少しの間も置かずに、大きな音を立てて、キヤルの足が振り落とされた。

「・・・・ちっ」

間一髪難を逃れたものの、怪我人になんてことをするのか。
しかも舌打ちって。

「逃げんじゃないわよ」

「逃げます」

攻撃的なキヤルの視線から目を逸らすが、逸らしたところでちくちくと、大きなその目から、針でも飛ばしているんじゃないかと思うくらいに視線が痛い。

「・・・・あ、あの」

おどおどと、ピーターが二人の間に進み出る。

「な、仲が、良い、ところ、ろ、悪い、んです、が」

「君は今のを見てそう思うのか？」

「ち、ちが、う、ですか？」

聞き返されて、アレが仲が良いスキンシップと見られてしまう自分たちの関係をセインは嘆いた。

「さ、鞘だ、け、でしたら、一に、ちも、あれ、ば、つ、つ、作れ、ますけ、ど」

「本当？」

キヤルは喜んだが、セインが首を振る。

「なによ。ピーターの腕が気に入らないって言うの？」

「そうじゃないよ。ピーターなら、立派なものを作ってくれるだろうし、腕も確かだろうけれど、問題はそうじゃないんだ」

どうして、セインロズドは鞘もなく抜き身のままなのか。

セインの肉体が鞘であるといっても、彼自身が剣の姿になってしまえば、鞘がなければ不便で仕方がない。

「もともと僕が剣なんだから、必要な時って少ないだろう？ 剣の入ってない鞘を持ち歩くの？」

それはそれで奇怪だ。

「剣を出しっぱなしにしとけばいいわ」

「僕の一部なの？」

そこで、セインはピーターに聞こえないように、声のトーンを落として、キャルに耳打ちする。

「それに、セインロズドそのものの姿は結構知られているよ？」

今までのセインの持ち主がほぼ有名人であったりするために、滅多にないとはいえ、絵画になってしまったり、語り草になってしまっていたりで、少々特徴が伝えられてしまっている。

「伝説の剣が目の前にあるだなんて、一部の海賊を抜いて、みんな単に非常識すぎて気が付かないだけで」

「……」

セインの正体は、バレないように、バレないように、それでも気を使って旅して来た。

それでも確かに、あんまり皆が気が付かないので油断しかけていたところに、ちょっとおかしな海賊にセインの正体がバレたのは、ついこの前だ。

考え込むキャルに、セインは追い討ちをかける。

「鞘に入ってしまったら、僕、この姿に戻るときに大変なことになるし。誰かに鞘から抜いてもらわないと元に戻れないって、それも不便だと思うよ？」

「うっ」

セインはさらに畳み掛ける。

「あとね？ それでなくても、どんな鞘だろうが長持ちした事がないんだ」

今までのセインロズドの持ち主だって、鞘がないのは不便だと、何度となく彼に鞘を与えてきたものの、どんなに腕の良い職人に作らせようと、どんな素材で作ろうと、3日と持ったためしはない。

「大理石を削りだして作っても割れてしまったくらいだからね」

「どうしたら大理石が割れるのよ」

「僕が聞きたいよ」

大人しく収まっていようが、セインロズドに見合った鞘は、セインの肉体しかないという事らしい。

「……あんたって結構、不憫だったのね」

ただでさえかわいそうがられているのに、不憫まで加わってしまったらしい。かわいそうと不憫が一緒になってしまえば、それは本当に、張本人であるセインとしてはどう対処したものか。

「いや、そこで不憫がるかなあ」

自分の発言に、情けなく眉をハの字にするセインを放っておいて、キヤルはくるとピーターを振り返り、ふんぞり返って爽やかに微笑んだ。

「と、いう事だから、鞘の話は無しだからっ」

話の展開が見えないピーターとしては、何がどうしてどうなったのか分かりようがない。

「へ、え、えっ?」

「キヤル、またそんな唐突に言われたってピーターが困るだけだから」

ピーターの肩を叩いて、おろおろする彼を落ち着かせる。

「さ、鞘、いらない、ですか?」

「ピーターくらいの職人なら、良い鞘を作ってくれると思ったんだけど」

「な、何か、おれ、お礼、したい、です」

「へ?」

今度は、ピーターの唐突な物言いに、キヤルが驚いた。

「お礼って、何の? 私、何にもしてないわ」

それに、どちらかといえば、タダで今まで泊めてくれて、食事も世話してくれて、身の回りの世話までしてもらっておいて、御礼をもらうのはどうにも気がひける。

それに、すでにゼルダの心臓をもらっているのだ。

「お、お嬢、さまの、お、友達に、なってくだ、さった」

「ああ」

ようやく、ピーターの意図を理解した。

「じゃあ、やっぱりお礼なんておかしいわ。友達になったからってお礼されるなんて、おかしいもの」

それを聞いて、ピーターはしゅんとしてしまう。

こういうとき、悪いことはしていないのに、悪いことをしてしまったように思えてしまうのは何故なのか。

「何よう、そんなに落ち込むことないじゃない」

どうしたものかと、キャルもピーターも向かい合ったまま、床を見つめてしまった。

「お礼というのは大袈裟だけど、君の気が済まないっていうんなら、ピーター？」

見かねて、セインが助け舟を出す。

「君、この辺に賞金首がないかどうか知らない？」

「・・・は？」

余計に、ピーターをきよとんとしてしまったらしい。

八歳の少女と、セインのひよろりとした頼りなさ気つぷりと、賞金首という単語は、一見結びつかない。

「えっとね、僕達、そろそろお財布がピンチでね？」

「・・・・・・あー」

しばらく考え込んで、ピーターがおもむろに、納得したと首を縦に振った。

良く考えなくても、見た目はどうあれ、この二人の立ち回りは眼にしている。

剣技も銃の腕前も、それはそれは見たことのないもの凄さで。

「へ、ド、ハン、ター？」

そういう人種であるのなら、納得がいく。

「そうなんだ」

うんうん、と、頷くセインに、ピーターは腕組みをして眉間に皺を寄せ、彼にしては珍しく、難しい顔をして天井を睨みつけ始めた。どうやら、記憶をフル活動で探り倒しているらしい。

「あ、あのね？ 分からないなら、別にね？」

あんまり険しい表情をするものだから、セインもキャルも、心配になった。

考え込みすぎて、血管が切れてしまわないだろうか。

伏兵現る（前書き）

お待たせしました。毎度のことながら申し訳ないです。まだもうちよつと続きますので、お付き合いくださいます（－ω－）

伏兵現る

「あ」

何か思い出したのか、小さく呟いて、壁際の棚からメモとペンを引っ張り出し、テーブルの上でさらさらと、二人を目の前にして何かを書き始めた。

「こ、これ」

差し出されたメモ帳に描かれたのは、緻密な似顔絵だ。

「君、絵も巧いんだね・・・」

感心しながらセインが受け取り、似顔絵を覗き込んでぎよっとする。

「なに？どうしたの？」

青ざめたまま、キヤルに似顔絵を渡すと、それを見たキヤルはキヤルで、青筋を立てたまま固まった。

「あ、あの、お、おとと、い、町で、みかけ、て」

「一昨日?!」

「うわー、何やってんのかしらねー」

「人、違い、か、おも、た、んです、けど」

そう。この賞金首が、奥まった陸の上にいること自体変な事だ。

これが港町やら浜辺やらなら納得が行く。

しかし、それでも町の保安所や役場、教会に行けば、そこに貼られた賞金首のポスターの中に、何とはなしに見る顔で。

だから、見たことがある顔だと思いながら、ここにいるはずがないと思ひ込んでしまっていたらしい。

「お、二人、なら、会った、こと、あるって、言っ、て、らした、から、もしか、した、ら、と」

ただでさえ、この男前でニヒルで嫌味ったらしい色黒の賞金首が、陸に上がっているなんていう事柄がおかしすぎるので、みな気がつかないでいたかもしれないのだが、知り合いっぽい言い方をしてい

たキヤルとセインなら、分かるかもしれないと思ったのだそうだ。

「間違いないわ。というより間違えようがないもの。変態親父よ」

「うん。彼だね」

「へ、変態？」

「君も気をつけたほうが良いよピーター！彼はね、僕のお尻を触ったりして喜ぶような変態なんだから！」

「へっ？」

「大変だったわねー、あの時は」

二人でうんうん、と頷きあうので、ピーターは今までの、泣く子も黙るこの超有名な賞金首へのイメージを大いに崩され、少しがっかりした。

ちよっとした憧れと羨望とを抱いていたのに。

この、大いなる賞金首には。

「海賊王ギャンガルド。間違いないよ」

「そう、です、か」

町で見かけたときには、海賊王がここにいるわけもないと思いがらも、もしかしたら本人かもしれないと、噂に聞いた、クイーン・フウェイル号で大海原を駆け巡り、数々の武勇を上げた海の英雄に思いを馳せたものだ。

真剣な表情のキヤルとセインとは対照に、ピーターはなんだか肩を落としてしまっているのだが、二人はそれどころではなくなってしまうらしい。

バタバタと大きなカバンの中を開け、荷物を点検し、キヤルにいたっては小銃を小脇に一丁、スカートの中に二丁も隠して装着している。セインは包帯を新しくして締めなおし、剣を握り締め、いつでも戦闘体勢に入れるように準備万端整えてしまった。

「ギャンガルドは一人でいた？」

キヤルに聞かれて、ピーターはまた、天井を睨んだ。

町の雑貨屋に頼み忘れた紅茶の葉があって、それを調達に来ていたところ、小さな飲み屋にいたのを見かけたのだったが、ギャンガ

ルドの他に、町の顔見知りと、自分と。

「たし、か、頭、の、禿げ、た人、が」

「……いたのね」

額を押さえて唸るキャロットの上から、セインが身を乗り出す。

「前歯が一本、欠けてなかった？」

言われてみれば、欠けていたような。

頷くピーターに、セインもキャルと同じく、額を押さえて唸った。

「タカを連れて来たのか」

「船のみんな、飢えてなきや良いけど」

キャルのお気に入りの料理人で、クイーンフウェイル号の胃袋を一手に引き受けるタカを連れていくなれば、ギャンガルドの部下達は、今頃腹を空かせて泣いているかもしれない。

「どこへ行くとか何とか、言っていないかった？」

「さ、あ。お、おれ、離れてい、た、から」

「……逃げよう」

「そうね。それが良いわ」

「え？あ、あの？」

賞金首から逃げるヘッドハンターなんて、聞いた事がない。

「いい？ピーター。あの変態にかかわっちゃ、絶対ダメよ。ろくなことがないんだから！」

「ギャンガルドが来ても、僕達のことはナイショにしておいてね？でも、その前に、屋敷に入れちゃダメだよ。お宝を盗まれちゃうからね」

「お、お宝、な、ら、ドールが、守って……」

「「……でもない！！！」」

二人揃って、ピーターに詰め寄った。

オートマタドールなんて、それこそ、そこいらのお宝なんかよりも、ギャンガルドが飛び上がって喜びそうではないか。

「いい？絶対中に入れちゃダメだし、ドールたちも見せちゃダメ！」

「そうそう！彼の目的が何なのか分からないけれど、僕達がいなく

なったら、この屋敷には君だけになっちゃうんだから、居留守でも使って、とにかく戸締りはちゃんとして！」

まるで泥棒のような海賊だ。

さらに海賊王のイメージが崩れて行く。

この二人がそこまで言うのだから、ちょっと会ってみたい気もするが、とりあえずは身の安全だ。

ピーターはこくこくと、何度も了承の意味を込めて、首を縦に振る。

「わ、わか、り、ました。おお、お、おれ、ぜ、絶対に、戸、を、開けま、せん！」

ぐっと、力拳を作った。

「その意気よ！」

「じゃあ、僕らはこれでさようならするけれど、本当に気をつけてね？」

「は、はい！ぜ、ゼル、ダ、お嬢、様、は、おれ、が、守り、ます！」

三人で、力強く頷きあった。

ピーターは、玄関先までゼルダの人形を抱えたまま見送ってくれたが、二人はいくら早朝といえど、いつあの眩しい白い歯を煌かせて、健康ですと訴えているような日に焼けた肌の、何故か陸に上がった海賊王が現れるかとひやひやしっぱなしで、早く屋敷内に入れとジェスチャーしながら、屋敷を後にした。

「ねえ、キャル」

「何よ」

「僕達、お財布もピンチだって言ったのはまあ、ピーターに使った言い訳だけど、この際ギャンガルドを捕まえてみるのはどう？」

ちよっと少なくなっていはいたが、キャルの貯金はまだ余裕がある。

実は、この森に来る前に、雑魚を捕まえて役所に引き渡したばかり。

りなのだ。ピーターには、彼を納得させるために、お財布がピンチ、
とは言ったが、まだちょっとはイける。

しかし、ここであのギャンガルドをしょっ引けば、もう本当に当
分の間、何もしないで旅が出来るだろう。

幸いにも、連れはタカ一人だというし。

「・・・いい案だわ。でもね、セイン？」

「？」

「ギャンギャンの顔、もう一回見たい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・遠慮します」

「そうよね。賞金首は次の町にでも行ってちよちよいとしょっ引け
ばいいんだから、危ない橋は渡らないに越したことはないわ」

真剣に話し合う二人だった。

逝く側と残される側（前書き）

また、お待たせしました。もうちょっと、もうちょっと続きます。

逝く側と残される側

「ピーター、うまくやっていけるかしら」

振り返って、森の木々に隠れて屋敷が見えなくなった頃、心配そうにキヤルが呟く。

「大丈夫でしょう。多分、ゼルダはまた、彼と一緒に暮らしてくれるだろうし」

「だって、もう人形だわ」

もう、可愛らしく笑ってくれることもない。あの花のような唇で、楽しそうにおしゃべりしてくれることも、綺麗な庭で走り回ることもない。

彼女の齒車の心臓は、キヤルの胸に下がって、キラキラと輝いている。

「忘れた？元から彼女は人形だったんだ。ピーターの思い入れが、彼女を作ったんだよ？」

死んだ少女の面影を、オートマタドールに写して、オートマタドール以上のドールになった。

「亡くなった領主の娘ではなく、自分の娘として、あのオートマタドールのゼルダを受け入れたんだから、ドールだって、それに応えてくれるさ」

それは、また、以前のように、人と変わらぬ仕草で、自分の意思で、あの人形が動くという事だろうか。

「僕らさ。ゼルダに違和感を感じてたと思うんだ」

森の中の一本道を、鞆を引きずりながらてくてくと、二人並んで歩く。

つい先ほどまで、あの屋敷で起こったことが嘘のように、森は静寂で、朝日が枝葉の間からこぼれる様は清々しい。

「ゼルダの気配を感じ取れなかったり、何か変な冷たさを感じたり」

「あの子が人形だったから、てこと？」

「そうだろうね、きっと」

人ではない、生命のない存在である彼女に、存在としての微妙なズレを感じ取っていたのだろう。

彼女にあっさり背後を取られたことも、セインが屋敷に来るなり感じた冷たさも、生命の温度を感じなかったからに他ならない。

「そうね。そう言われれば納得がいくけど」

「けど？」

「あの子はそれでも、生きていたって、思うわ」

たとえ、あの木と皮で作られた、歯車だらけの身体でも。脈打つ心臓と、体中を流れる熱い血が一滴も無くても。

「うん。そうだね。僕みたいな存在がいるんだから」

もし、ゼルダがまた、以前のように自分の意思で動けるようになったなら、ピーターは自分が動けなくなる前に、彼女を停止させられるだろうか。

それが出来なければ、ゼルダは壊れるまで彷徨うことになってしまう。

「二人が、幸せになってくれるといいんだけどね」

願わくば。

終焉が訪れるその時まで、二人が幸せであれば良い。

「本物のゼルダのご両親には、あのドールは辛いものがあるかもしれないけど」

それとも、喜ぶだろうか？

「・・・・・・？な、何？」

下から視線を感じて見てみれば。

キャルが歩きながら器用に、自分の顔を覗きこんでいる。変なことを言ったかと、聞いてみる。

すると、思い切り盛大に溜め息をつかれた。

「な、なに？ 僕何か言った？ キャル？」

「別に？」

そう言いながら、視線は外さない。

「別につて、そんな顔じゃないじゃないか」

これでは気まずい上に歩きにくい。

「セインつて、苦勞症よね」

「へ？」

「ゼルダのこと、本物の人間のゼルダのこと、その子の親のこと、ピーターのこと」

キヤルが、指折り数える。

「だって、気にならない？」

「あたしは、あたしが会ったゼルダのことしか頭にないわ」

「そうかもしれないけれど」

失った大切な人にそっくりな姿をしたドールがあったら、自分はどう思うだろうか。

死んでしまった人は、二度と帰つては来ないのだと分かっている。それでも、もう一度、会えるものなら会いたいと思つてしまうのは、罪になるのだろうか。

たとえどんなに似ていても、それは同じ人ではないのだと知つていても、求めてしまうのではないか。

厳しいことを言いはしたけれど、ピーターの気持ちも分かるのだ。長い時を、沢山の人の死と共に生きてきたのだから、今更そんなことを考えるのはおかしいことなのだけれど。

「……」

黙つてしまったセインに、キヤルはまた、盛大に溜め息をついた。

「キヤル？」

声をかけた瞬間、鈍くて重い傷みが顎に直撃した。

「あぐうっ！！！！」

あまりの痛さに、顎を押さえてうずくまる。

「ひ、ひろいお！」

直訳。酷いよ！

「あんまり阿呆な顔しているからよ」

言いながら、キヤルはキヤルで頭のでっぺんをさすっている。

キアル渾身の頭突きが、セインの顎にクリティカルヒットしたのだった。

「大方、くらーいことでも考えていたんでしょうけど」

「暗いことって」

「違うの？」

「違います」

ぷい、と、また前を向いて、キアルが大手を振って歩き出すので、セインは顎をさすりながらカバンを引きずり、後に続く。

「まったく」

「へ？」

会話が止まると思い込んでいたので、キアルの大きな声に、気の抜けた返事を返してしまった。

ぐし

「!!!!!!!!!!!!!!」

思い切り足を踏まれ、声にならない声を上げる。

ぴょんぴょん飛び回るセインにはお構いなく、キアルはまた前を進んで行ってしまいうので、セインはズレた眼鏡の下の涙を拭いながら、一生懸命追いかける。

「あんたがそんなだから、私だっておちおちしてられないじゃないかい」

一体、キアルが何をそんなにぶんぶん怒っているのか、セインには分からない。

逝く側と残される側2（前書き）

本当にまた、ずいぶんお待ちしました。しかも短い上に、ヤツの登場は次回です。すみませんー！！

逝く側と残される側2

「キャ、キャロットさん？」

恐る恐る、声を掛けてみる。

すっかり腰は退けて、なんだか歩き方が年寄りくさくなっている。

そんな様子も、セインの前をすたすたと足早に歩くキャルからは見えないのだが、あんまり情けない声色だったので、盛大な溜め息と共に立ち止まってやることにした。

「あのねえ、セイン」

「はい？」

「正確に自分の年齢、言える？」

「・・・・・・えーっと」

唐突な質問だったが、セインは一生懸命考えた。これで変な回答をしてしまったら、またキャルに怒られる。

「八四十六歳・・・・・・多分」

「・・・・・・自信なさそうね」

「寝ていた時間が長いからねー」

あの岩に自分を封印する前に、既に三百年は生きていた自覚はある。正確に五百年眠っていたわけでもないだろうし、目覚めてみたら年号も何度かわわっていて、おおよその逆算を試みるのは今回が初めてだから、ちよつと自信がない。

「まあ、そんなに生きているんだったら、仕方ないかもしれないわねー」

ふん、と鼻息も荒く腕を組み、自分の背丈の倍を超えるセインを見上げ。

「な、何？」

少女の首が痛いだろうと、思わずしゃがんだのがいけなかった。

「痛い痛い痛い痛いいたい！！」

わっしとモミアゲを両方掴まれて、精一杯これでもかと引っぱられた。

「何するのうー！」

涙眼で訴えても引っぱられ続け、顔がひし形に伸びるのではないかと思われた頃、ようやく手を放してもらうことが出来た。

きっと、モミアゲ部分の皮膚は真っ赤になっているに違いない。良く抜けなかったものだ。自分のモミアゲながら褒め称えたい気分だ。

「年寄りすぎて、あんたがいろいろ考え込んだじゃうのは分かるわよ」
分かっているなら労わってください。

「でも心配しすぎなのよ。考え過ぎなのよ。物事頭で考えたって行動に出なきゃ何にも変わらないって、あたし思うの」

家を建てるのに段取りやら何やらを考えても、紙面にどんなに完璧な設計図を描いても、それを形にしなければ意味がないのと同じだ。

「だから、あたし、セインを楽園の中でも一番まともなエルドラドに連れて行くことにしたのよ」

たとえそれが夢物語であろうとも。

「うん。分かっているよ」

乱暴者でぶっきらぼうで、でも心優しい、金色綿毛の髪の少女。
五百年の眠りから、セインを目覚めさせた少女。

キヤルが何を言いたいのか、理解して、セインは笑った。

「ありがとう、キヤル」

「分かればいいのよ」

にやりと、キヤルが笑い返す。

「そうよ。なんたって、あたしってばまだぴちぴちの八歳なんですからね！平均寿命が七十だったら、私が大人になる頃は、あと十年、ううん、二十年は寿命が延びてると思うし！そしたらざっと見積もっても、あたしは後八十二年は生きてるって事よ！ほぼ一世紀だわ！一世紀っていったらちょっと長いわよ。その間にエルドラド

ぐらい見つかるわ。もし見つからなくなったら、見つかるまで、うーんとうーんと、長生きするんだから！あたしは決めたら実行するわよ！」

それは、よぼよぼのお婆さんと旅を続けるという事なのだが、キヤルのことなので実際そんなことになっても、例えば百歳を超えても、チャキチャキセインの前を陣取って歩いていそうさ。

想像してしまっただけくすくす笑いをしてしまった。

「そうだね。そうだったら、どんなに良いだろうね」

「良いだろうじゃなくて、そうするのよ」

言い切るキヤルを見ていると、本当に、自分だけ取り残されて、地上に一人留まることはもうないのかもしれないと、本気で思ってしまう。

今まで、自分を手にしたマスターたちとの別れも、戦いの中で死なせてしまった人たちも。

みんなみんな、セインを置いて、いなくなってしまった。

キヤルとの、この変な旅が、もしかしたら最後になってくれるのかもしれない。キヤルが自分の目の前からいなくなるなんて事は、起こらないかもしれない。

「ちよつと。変な顔しないでよ」

「え？そ、そうかな？」

頬が知らずに緩んでいたらしい。キヤルはいつものように、両腰に手を当てて、呆れ顔でこちらを見ている。

それがなんだか嬉しくて。

「うへへ」

「気持ち悪いったら」

「うん、ごめん」

自分の不安な気持ちを、何をしなくても悟ってくれて、言い聞かせてくれる。

キヤルはまだまだ子供なのに、どうしてだろう。一緒に居て、こ

んなにも安心できる。

「男で年寄りの僕がそれじゃあ、ちょっと情けないか」

「ちょっとじゃないわ。大いに情けないわ」

「うん、ごめん」

ずれた眼鏡を直しつつ、セインはキャルのカバンを持ち上げて、空いた手でキャルと手を繋いだ。

「ぜったい、見つけるんだから」

「うん」

森の中の小道を歩きながら、一度交わした約束に、新たな約束を追加した。

これで、次の町に行って新たな鋭気を養おうと二人が計画を立て始めた頃。

もうすぐ、森の外に出られるというところで、忘れていた事柄を、ウツカリ思い出してしまった。

「なんか、忘れてたね」

「忘れていた、っていうよりは、忘れていたかったのよ。あたしたち」

後ろから、朝早いというのに、出来うることなら二度と聞きたくなかった聞き覚えのある声で、のん気な歌声が、朝の爽やかな風と共に流れてきてしまった。

一瞬、立ち止まりかけた二人だったが、繋いでいた手を素早くはずす。セインはカバンを脇に抱えて両手を合わせ、キャルはスカートの下から一丁の銃を取り出して弾丸を確かめる。

一瞬で、ヤツが現れても対応できる準備を整えて、森の外へ向け、一目散に走り出した。

あの男、再び（前書き）

一ヵ月半、お待たせいたしました！融通の利かない海賊のおかげで話が進みません（――；）もうこの小説は奴のペースにはまっただとしか・・・。

！
とにかくにもあの男が再登場です！本当にお待たせいたしました

あの男、再び

「三十六計逃げるが勝ちってね！」

「何それ？」

「最も有効な戦略は逃げることで意味！」

「ほんとにそう思うわ」

ここまで来てのん気に鼻歌なんか歌っているところを見れば、幸いゼルダの屋敷には立ち寄らなかったのだろう。

もう少しで森の入り口から抜けられると思ったところで、二人揃って聞きたくない声を聞いた。

「おおい」

一瞬足が止まりそうになったものの、気の抜けそうな両足を叱責して、二人ともスピードを上げた。

「なんなの？あの気の抜けた声は！」

「ギャンガルらしいとかなんていうか」

どうやって振り切ろうか頭をフル回転させる。

走っているのに見つかるとは。相手の視力が良いのか、向こうがこちらより早く移動しているのか。

「おおい、ローズうう」

ドゴン！

間の抜けた声が、再び聞こえたところで、間髪置かずに背後へ一発。

「ぬおお！？」

驚いた声が聞こえた。

「ち、外れたわ」

ジャカジャカツ

二丁の拳銃を、器用に手の上でくるりと回し、再びぶちかます。
ガガン！

「お、お嬢、俺もいるから！」

違う悲鳴が聞こえて、ついにキヤルは足を止めて振り返った。
ちょうど、森の出口だった。

「手下を使って気を引こうなんて、情けないとか思わないの？そこ！」

びしい！と、銃で海賊王の、遠くにある黒い顔を指す。

もちろん、その一步前に出た隣で、セインは隙無くセインローズドを構えている。

「二人とも戦闘体勢バッチリじゃん」

「キャプテン、思いつきり嫌われてますね」

「……お前ね、そういう事をはっきり言わないでくれる？」

海の男は声がでかい。

結構離れているのに会話が聞こえてくる。

「鼻歌が聞こえるくらいだからねえ」

「何だってこんな時間のこんな所に海賊が現れるのよ」

お互いぼそりと呟いてみるが、目の前に張本人がいるのは事実なので仕方がない。

「出来ればこのまま逃げてしまいたかったっていうのに」

キヤルは海賊達に会ったときに受けた仕打ちが思い出され、なんだかだんだん腹が立ってきた。

「魚の網は臭かったわ。なかなか匂いが取れなかったし」

腹が立ってきたのはセインも一緒だったらしい。

「僕だって、夜に小船に乗って一人で船の外壁よじ登るのは本当に大変だったんだ」

おまけに、女性にまで間違えられて、最初に絡まれた理由がそれがだなんて、正直有り得ない。

「なによ、ローズだなんて、嫌味？」

海賊船クイーン・フウェイル号での二人の呼び名は、キヤルがローズ、セインがグランだった。本人達が嫌がっているので、あまり使われることはないのだが。

二人がこちらを警戒している事が分かっているので、嫌われ者

の海賊王は腕組みをして困ったような顔でいる。

「フェイクだね」

「あれは確実に面白がってるわね」

完全に見破られている。

「おーい、聞こえるかー？」

早朝独特の冴え渡る空気の中、森が静かに目覚めていく、一日で一番厳かなこの時間に、よりにもよって海賊の間の抜けた声が木々の間に木霊する。

こんな経験は、森の長い歴史の中でも初めてではなからうか。

「叫ばなくっても聞こえてるわよ！」

キャルの怒鳴り声が響いた。

驚いた鳥達が、騒ぎ立てて何羽か飛び立った。

「ああ、ごめんなさい」

誰に謝るでもなく謝って、セインは早くこの場から立ち去りたくて仕方がなかった。

この海賊王に、何の考えがあるのか知らないが、とにかく関わりあいたくない。

「そっちに行ってもいいかあ？」

「「良くない！」」

二人同時に叫んだ。

タカが額を押さえるのが見えた。

「ダメって言われたぜ？」

「あたりまえっすよ！キャプテン嫌われてる自覚があるんすか？」

「ええ？俺が？誰に？」

「ああ、面白がってる！」

遠くでタカが地団駄を踏んでいる。

「あの主従関係も相変わらずらしいわね」

呆れるキャルに、セインは心の中でこっそりと。

「うちもね」

などと思ってしまったが、口に出してしまうなことはしなかつ

た。聞こえてしまったら、今海賊王に向けられている銃口が、確実にセインに向けられるのは明白だ。

「お嬢！申し訳ねえんだが、ここは一つ、俺に免じてキャプテンの話を聞いてもらえねえか？」

「何だって言うのよ！ギャンギャンに関わったって、どうせセインを貸せとかなんとか、その辺の話になるんでしょう？！」

「おお、分かってんじゃん」

飄々としたギャンガルドの答えに。

ぷち

キヤルの何かが切れた。

ガガガガガン！

「ぬおおおお！？」

隣にいるタカには一切安全な場所、確実にギャンガルドの足元に、連続で、有無を言わさず打ち込んだ。

足スレスレに弾が飛んでくれば、さすがに海の王と恐れられるこの男でも、あわてて飛び跳ねた。

いや、スレスレというか、避けなければ確実に当たっていた感が無いでもない。

「何しやがる！」

「うっさいわねこの疫病神！！」

「あー、あんな事言われてらあ」

「お前はのん気なんだよ」

「だって、お嬢が狙ってんの、キャプテンだけだし。俺あ、お嬢に悪いこと何にもしてねえですもん」

「うっわ、おま、それで俺様の部下かよ！」

自分の料理長に軽く見放されて、ギャンガルドは情けなさそうに眉尻を下げ、大仰に額を叩いて天を仰いだ。

朝日がまぶしい。

森の静寂などなんのその。

不屈きな人間共が綺麗な朝の光の中で、朝とも思えないような

騒々しさを撒き散らす。

「ほんつとうにごめんなさい」

先ほどから驚いて、どんどん逃げ出してゆく森の動物達に、セインはまたもや謝った。

「とりあえず、森から出ようよ？ピーターに気づかれたら困るし」
まずは提案してみる。ここで騒いでいても進展はしないし、もしかしたらこの騒ぎがああ屋敷に届いて、優しい召使が様子を見に来てしまうかもしれない。

ピーターの名を出されて、キヤルは自分の胸に光る、赤い歯車を触った。

「分かったわ。でも、背中見せらんないから、後ろ歩きで行くわよ」
じりじりと、徐々に後方へ退避を始めた。

「おい、あれ？なんか距離伸びてねえか？」

「気のせいよ」

なんとなく気がついたらしいギャンガルドの一言に、スパツと言い切る。

「とりあえず、話だけでも聞いてくんねえか？」

つかつかと、ギャンガルドが前に出る。

「お断りします」

これまたスパツと、セインが言い切る。

「なんでだよ」

ギャンガルドが小走りになる。

「信用できないからに決まってんじゃない」

容赦なくキヤルが言い切った。

「………なんだか近付けませんねえ」

タカがギャンガルドの後ろにつきながら、不思議そうに呟く。
「だから、逃げるなって」

ついに走り出したギャンガルドに、それ以上の速さでキヤルもセインも後退する。

後ろ向きで。

「反省って言葉を知らないおっさんに、付き合う謂れはないのよ」
おまけで一発。

ドン！

「のあー！！」

足元に打ち込まれた弾丸に、一瞬飛び上がったギャングルドの隙を突き、二人は一気に距離を開けた。

後ろ向きで。

「器用だなあ」

「感心してないで、なんとか止めてくれよ」

「無理ですよ、俺たちに、キャプテンを手玉に取るようなあの二人を止められますかって」

今度こそ、本気で海賊二人も走り出した。

「だいたい、僕らに何の用があるんだよ！？」

「んー、別に用って程の用じゃねんだがよ」

走りながら喋るのは、結構体力を使う。そこはそれでも、さすが海賊といったところか。鍛えているだけあって、海の男二人は息切れ一つない。

「用って程の用でもない用のために、船残して陸に上がったんですか？クイーンも、そりゃ泣くねえ」

タカがやれやれと頭を振った。

「いいじゃねえかよ。あの二人がいたら、色々と楽しいじゃねえか」

「お嬢も旦那も、迷惑がりますって」

「既に迷惑だわ！」

さっきよりずいぶんと小さくなったキャルの怒鳴り声が聞こえた。

「あ、聞いてたか」

「つか、早いなあ、後ろ向き」

「俺たちも後ろ向いて走ってみるか？」

「お嬢の弾が飛んでくるか、旦那の剣が飛んでくるか、どっちかでしょうな」

そのとおりだ。

「のわあ!!」

気がついたらセインが目の前にいた。

ギラリと輝く聖剣の輝きに目を刺されながら、ギャンガルドが仰け反る。

電光一閃。

避けなければ、首が胴から離れていただろう。

「あ。森を抜けたのか」

一度の剣戟で攻撃が止んだ事を確認して、くると周りを見渡せば、広い野原に出ていた。

「うん。だから、この状態でよければ話くらい聞いてあげるよ」

「プラス、タカのご飯付でね!」

首筋に冷たい切っ先を向けられながら、要求はなんというのか。

「旦那、ここは穩便に」

さすがと言おうか。普段はキャルに叱られっぱなしで、ぼんやりのほほんとした、ただの眼鏡の青年なのだが、こういう時は隠れた牙を垣間見せる。

仮にも海賊王相手に一瞬で間合いを詰め、切っ先を向けるなど、タカの記憶を探っても、今までそんな人間はいなかった。

「そりゃあ、俺たちが何人束になってかかったって、あしらわれるはずだあなあ」

彼らの船、クイーン・フウエイル号の甲板上で見せた鮮やかなセインの戦いぶりを思い出す。

「ぴゅうつ」

それでも口笛を吹く余裕がある辺り、自分の船長も、並大抵の男ではないと思う。

ちゃらけて見えるが、この男の恐ろしさは、間近で何度も見てきている。なにせ、気に入らない相手は容赦なく、船と乗組員もろとも海に沈める男だ。

「俺から一本取るなんざ、やってくれるじゃねえか」

少々、怒りの混じった声音だったが、性分なのか、表情は面白がっている。

「君を怒らせるつもりも、喜ばせるつもりもないんだけどね」
にっこりと、セインが微笑む。

「へへ、相変わらずそろ恐ろしいぜ」

しばらく睨み合いが続いたが、ふいに、ギャンガルドが両手を上げた。

「降参。降参だよ」

「本当に？」

「疑り深いなあ。禿げるぜ？」

「余計なお世話なんだけど」

そもそも、このギャンガルド。町で部下が会ったというセインとキヤルの話を聞いて、キヤルを誘拐し、セインを手に入れようとしたことがあった。

そのまま二人を気に入って、彼らの探し物の手伝いをしたが、結局今度はセインを攫って、どたばたしながら自分の目的を果たしてしまった。

最初から相談すれば、キヤルもセインも引き受けた話だったが、ただ単に面白そうだから、という理由で、キヤルもセインもギャンガルドに振り回されたのだ。

ギャンガルドの配下の海賊達と変な友情が芽生えたが、この張本人だけは別である。

疑われて当然。

流石の海賊王（前書き）

この頃ずっとお待たせしてます、申し訳ないです。そしてまた短い（すみません本当に）ギャングルドが作者をおちよくってます。お前のせいで進まないよ。ギャングラン。

流石の海賊王

「じゃあ、とりあえず座ろうか」

指示されたのは、森から少し離れた草原に転がっている岩の上で、ギャンガルドもタカも、大人しく岩の上に腰を下ろした。

「さて」

先に口を開いたのはキヤルだった。

「おい、話を聞いてくれるんだろう？」

「それはまず置いとくわ」

「置いとくってどこに？」

「ギャンギャンの足元にでも？」

「・・・その呼び方止めてくれって」

「どう呼ぼうが私の勝手よ。それよりも、どうして陸に上がってるのか聞くのが先だわ」

やはり警戒しているのだろう、自分たちより幾分離れた岩の上に座ってはいえるものの、手には銃、足は立ててすぐにでも動けるような体制でいるキヤルと、少女の隣に控えるように佇むセインに、海賊王はおどけてみせるが、二人には通用しない。

「俺も陸に連れて来られた理由を聞いてないんですけど？」

「何にも言わないでタカを連れて来たの？」

相変わらず部下には心配ばかり掛けさせているらしい。

「いや、心配って言うより不安でさあね。信用はしてるんで。どっちかってったら、今度は何に巻き込まれるんだ俺たちっていう」

「心配じゃなくて不安なのかよ」

「当たり前っすよ！自覚ないんだからキャプテンは！」

口を尖らせるギャンガルドに、タカが頭を抱える。

「手下にまで言われちゃあ、世話ないわね。それで？」

「は？」

ぷちっ

話を促すキヤルに、ギャンガルドがとぼけてみせるので、キヤルの中の何かがまた切れた。

「・・・・・・・・あ」

セインが止める間もなく。

「いい度胸だわこのゴールドエンブラッディローズ様の前でセインよりも老人ボケした頭をお持ちの流石天下にその名も轟く大海賊よねでも頭に来たからやっちゃっても良いかしら」

一息に言いながら、淡々と弾丸をギャンガルドの足元に撃ちつけた。

ギャンガルドに対しては、堪忍袋の緒も切れやすいらしい。

「聞く前に撃ってるじゃねえか！」

「ひ、ひどいよ」

ギャンガルドのみならず、セインにまで心理的なダメージを与えている。

「気が短いのよ」

「キャプテン、ここは大人しく、ちゃんと話したほうがいいですぜ？」

タカが困ったように言うので、ギャンガルドも眉毛をハの字にしている、セインが眼鏡をずらして目元を拭いながら、ムツとした顔を向けてボソリと呟いた。

「君、キヤルより大人なんだよね？」

「うお?!」

とぼっちを受けのご機嫌斜めの大賢者からは、背筋が寒くなるような殺気が漂ってくる。

「そういう切り替えしかよ」

「大人が子ども扱いされてどうするのさ。それに、いいかげんにしないと、そろそろ僕もキレるよ？」

につこりと微笑めば、ますます殺気は肥大して、おどろおどろしい。

「キャプテン。俺、恐い」

「安心しろ。俺もだ」

安心できない慰め方をされ、タカはとぼっちを受けられないよう、海賊王から離れた。

「こら」

「だって、ねえ？」

部下にまで見放され、ギャングルドはまた肩をすくめた。

「仕方ねえなあ」

「仕方ないんじゃないでしょう。今度は本気で風穴開けるわよ？」

「僕だったら風穴どころじゃないよ？」

最強のハンターと最強の剣の双方に、それぞれ銃口と剣の切っ先を突きつけられて、ギャングルドは万歳みたいに諸手を挙げて降参する。

「分かった、分かったって」

「へえ？」

「信じられない」

「なんでだよ！」

「そりゃあ、日頃の行いが原因でしようなあ」

タカにまで、うんうんと、首を縦に振りながら、しみじみと言われてしまえば、本気で降参するしかない。

「お前、俺の手下だろうが」

半目で睨みつけられ。

「だって、俺お嬢が好きだモン」

「あら、ありがと」

ねー、などと二人で首を傾げ合っている。

「ちえー、もっと先延ばしにしてやろうと思っていたのによー」

懲りないというのか、本当にセインとキャルで遊びたかったらしい。

タカはキャルのご機嫌取りに連れて来られたようで、船の連中には迷惑この上ない。

何でこんなのが海賊王なんだろう。

セインは思ってみたものの、逆にこんな男だから海賊王なのだろう。一癖どころではない。二癖も三癖もある曲者だ。

「まあなんだ。二人には良い話なんだと思うぜ？」

「前置きはいいいから、ちゃっちゃとしやべって頂戴」

腕を組んで、キヤルはもうこれ以上、ギャンガルドが話を先延ばしにするなら、容赦しない雰囲気だ。

「お嬢様は恐いねえ」

片眉を上げ、にやりと笑う海族王に、キヤルは負けじと、艶のある笑みを向ける。獲物を狙い済ました獣の目だ。

タカなどは、初めて見るキヤルの表情に、禿げ上がった頭に冷や汗がにじみ出ている。

「事は、お前さんたちの探し物のことさ」

凍りつくようなキヤルの視線に口笛を吹き、楽しそうにギャンガルドが口元を歪めた。

「探し物って、ギャンギャンに関係ないだろう？ 何でそんな情報、僕らに提供してくれるの？」

ギャンガルドはぎょつとして、思わずセインを見つめた。

「何？」

「いや、大賢者にまでその呼び名で呼ばれるなんてなあ、俺はこれからどうすりゃ良いんだ？」

「いいんじゃない？ 呼びやすくて。ギャンギャン」

「うわあ、止めてくれ」

この男にしては珍しく、本気でいやそうな顔をするので、セインはこの呼び方は、海賊王対策に、おとつときにすることにした。

「お嬢たちの探し物って？」

「うん、色々ね」

タカに訊ねられて、セインは言葉を濁す。どう説明したものか。大概の大人なら、笑い飛ばしてしまうような探し物だ。

しかしそれは不要な危惧だったらしい。

「見つけたらタカも連れて行ってあげるわ」

「本当？」

「もちろんよ」

何を探しているのか分からなくても、キヤルが言えば、タカも嬉しそうに聞いている。

キヤルを知っている人は、彼女が口にしたことは容易に信用してしまう。そんな不思議なところが、キヤルにはあった。

もともと有言実行派のキヤルなので、日頃の行いがそうさせているのか、それとも、彼女の内側から来るものなのか。

どちらかといえば後者なのだろう。

セイン自身が、キヤルの夢のような言葉を信用してしまっているのだから。

「まあ、なんだ。ちょっと前に立ち寄った王族の船に、どうもお前さんたちの知り合いが乗っていたらしくてな」

「・・・船って立ち寄るものなの？」

「そりゃあ、たまにひもじくなれば食料とかお宝とか貰うしなあ」

「ひもじいっていうの？」

「それどころかあんた達の本業でしょう？」

なんだかんだで喧嘩腰（前書き）

またまたお待たせいたしました。何度やっても喧嘩を始めてしまうので、もうどうしようかと……。とにかく、UPです。もうちょっと続きます。

なんだかんだで喧嘩腰

海賊業といえば、略奪だ。

ひもじいから略奪するのかどうかは別として、まあ、自分たちと別れて間もなく、何処かの船を襲ったらしい。

「それで、どこの船を襲ったって？」

海賊が襲うのだから、それはそれはお金持ちに違いないか、たいそう立派な商船か。

「……まって。さっき、王族って、言った？」

ふと思ひ当たって、セインは青ざめた。

「おう。言った」

当たり前のように返事が返ってくる。

「王族なんかの船を、よくもまあ」

呆れ返るセインにギャンガルドはにやりと笑う。

「王族ほどの金持ちは、そうそういないだろ？」

それはそうなのだが、王族は王族だ。

どこの国の王族だろうが、警備はそりゃあもう、もの凄いことだろう。普通なら、いくらなんでも避けるものなのだ。

「目の前にお宝と食料と、きれいな女がいりゃあ、仕掛ける理由は充分だろう？」

「成功すればね。王族相手だもの。収穫は凄いだろうさ」

「へっ、なあに。手前の国民から搾り取ったモンを、ちいっと分けて貰おうってんだ。別に悪くはないだろう？」

悪い悪くないの話ではないのだが、どうもギャンガルドの頭の中では、それで説明できてしまうらしい。

「……まあ、いいや。それで、僕らの知り合いの王族だっ
て？」

「おう。なんだか知らねえが、お前さんの話をしてたからよ」

「何で船を襲って僕の話になるのさ。そんなの、セインロズド目的

の会話なだけだったんじゃないの？良くあるもの」

セインロズドの名前など、あちこちで話の端にくらい上るだろう。まして、王族などの権力者であれば尚更だ。

「おいおい、それくらいで、わざわざ俺が大賢者探して陸に上がると思ってたのかよ？」

「君ならやりかねないだろう？」

すっぱりと言われれば、さも嬉しそうに、ギャンガルドはにんまりと笑った。

「気持ち悪いわね」

「ホントホント」

キヤルが眉間に皺を寄せ、タカが相槌を打つ。

「こら。お前、俺の手下だろうが」

「だって、気持ち悪いモンは気持ち悪いっすモン。やめたほうがいいっすよ？その顔」

自分の手下にまで言われて、ギャンガルドは眉毛をハの字にした。「だんだんこの二人に似てくるなあ」

突っ込み方から会話のかわし方まで。このままでは船長としての沽券に関わるではないか。

「良い傾向じゃない？いつも人で遊んでいるからよ」

いい気味だといわんばかりに、キヤルはニヤリと笑って、ギャンガルドを睨み上げた。

「さて？」

ギャンガルドはとぼけてみせる。

「まあ、ギャンギャンに関しては、あとでタカとキヤルに叱ってもらうとして」

「おいおい。なんだあ？何で俺がこの二人に叱られるんだよ？」

セインの言葉に、ギャンガルドが抗議すると、セインはにっこりと微笑み、いつの間に構えたやら。

ギャンガルドの首筋に、セインロズドの切っ先が、またもやスレスレのところであぐらまきしていた。

「それとも、僕が叱った方がいいのかな？」

海賊王が、刃を突きつけられたまま口笛を吹き、不敵に笑う。

「やっぱ、惚れちまうね」

「むさくるしい男に惚れられたって、僕にそっちの趣味はないんだけど？」

ちよっと前に、尻を思いきりこの男に撫でられたのを思い出し、セインは心底嫌そうな顔をした。

「ま、物騒なモンはしまってくださいや。きっちり話を進めようか」

刃先をつまむギャンガルドの手を叩いてどけさせると、セインは剣を一振り払って、脇に持ち替えた。

「・・・しまっちゃくれねえのかよ？」

「前に言っただろ？君は信用できないからね」

油断大敵なこの男を前にして、セインは一時たりとも気を抜く気はないようだ。

「やれやれ」

ブツブツと文句を言いながら、ギャンガルドはようやく腰を落착かせた。

「で？私たちの知り合いの王族が何？」

キヤルが話を促せば、ギャンガルドはにやにやとキヤルを見やった。

「見当は付いてるんだろ？」

「そりゃあね？わたしとセインが知ってるっていったら、一人しかいないもの。・・・というより、王族もいいところじゃない。王様でしょ？」

「へえ？」

わざとらしく驚いた顔をして見せるので、キヤルもセインも、カチンと来た。

ドドン！

「のわ！」

すかさず撃たれる。

「あーあー、キャプテンも懲りないっすねえ？」

「いいの！俺はこれで！」

「へーい」

あきれる部下に噛み付く海賊王。

「ホント、君らクイーン・フウェイルのクルーは、苦勞するよね？」

同情すれば、タカがこくこくと、何度も首を縦に振る。

「それでも俺が好きだろ？」

「あー・・・」

ギャンガルドに面と向かって言われれば、禿げた頭を真っ赤にして、タカが言葉に詰まる。

「自惚れさんだわ！自惚れさんがここにいるわ！」

「自信過剰なヤツって嫌だよねー？」

キヤルとセインが二人でこそ話し込めば、ギャンガルドがフツと微笑んだ。

「なんだあ？二人とも。俺に惚れたか？」

ちゃき

すぐそばで金属音。

右のこめかみに銃口。

左の首筋にセインロズド。

「だから、僕にその気はないと言っているでしょう？」

「私だって、ギャンギャンなんか無理だし」

恐ろしく冷たい空気に挟まれて、ギャンガルドは身動きが取れなくなつた。

「ああ、だからキャプテン、少しは懲りて下さいよお」

泣きそうなタカが、キヤルに縋り付いて、ようやく二人はギャンガルドを解放した。

「タカを連れて来て正解だったなあ」

パタパタと顔を手で扇ぐギャンガルドに、セインもキヤルも、冷たい視線を向けたままだ。

「とにかく、私たちの知り合いの王族なんて、この国の王様その人

しかないのよ。分かっているという態度を取るんだから、容赦しないで当然でしょう？」

「僕らで楽しむより、他にいくらでも楽しませてくれる相手がいるでしょうに」

「命がけで楽しめる相手なんか、そうそういねえよ」

からかった相手にからかい返されたり、下手をすると冗談が通じず、本気で命が危なかったりするのだが、それさえ楽しいらしい。

「いろんな意味で命がけっすね」

ハンターの中でも凄腕で知られるゴールデン・ブラッディ・ローズと、伝説の大賢者相手であれば、どんなことでも不足はないといったところか。

しかしそれにしても。

「こんなことで命を落としたいなら、いくらでも落とさせてあげるわよ？」

からかって命を落とすなら、命なんていくらあっても足りない。

「ええと、そ、そうだ！お嬢！王様と知り合って、凄えじゃねえかい！」

タカが必死に話を元に戻す。

「知り合っているか、どちらかと言ったらセイン絡みよね」

キヤルが気の毒に思ったのか、タカの話に受け答え、気の良い海賊船のコックは、ひとまず胸を撫で下ろした。

「僕がらみっているの？」

「だって、おじいちゃんの上司でしょう」

「いや、上司って事じゃないんじゃ・・・」

国王とその臣下は、別に会社勤めをしているわけではない。

「まあ、似たようなものか」

とりあえず納得しておくことにする。

「思いつきり省略するけど、僕が昔仕えた人の子孫が貴族だね。それで、王とも繋がりがあるんだよ」

思いきりと言うとおり、思いきりよく省略して説明したが、それ

でタカは納得できたらしい。

しきりに感心している。

「へえ！旦那はやっぱ一味違うお人に仕えてなさったんだなあ」

「・・・」

「なんすか？」

「いや、何でもないよ。あの説明でよかったかと思ってね」

きみは一味どころか二癖も七癖もある人に仕えているじゃないか、などとは、気の毒で言えない。

「彼はもともと騎士だったしね。それで、王様が何だって？」

ギャンガルドよりも、タカから話を聞いた方が早いと、セインはタカに話を促した。

「ああ、そうそう。なんだか旦那、やらかしたみてえじゃないですか」

「は？」

国王がどうしたのか聞きたいのに、自分が何かをやったとは、どいう話の展開か。

「愚痴ってましたぜえ？セインロズドのせいで、我が親衛隊はすっかり自信をなくしてしまった、とかどうとか」

口真似をしながらのタカの説明に、思い当たる事があるので、セインは言葉を濁した。

「あー・・・」

「まあ、そういういながら、エライ精鋭ぞろいで、苦労したんですがね。船がでかいわりに一隻でうろついてっから、国王旗なんか出してるけども、王族の端くれのどれかだろうって乗り込んでみたらいけねえや。王様そのものでやんの。のん気な王様も居たモンですよ」
普通なら、国王ともなれば護衛をつけて嚴重に、団体で航海するものだ。それを一隻で航海をしていたというのは、この国の国王らしいとか何というか。

「彼は君らのキャプテンと、似ているところがあるからねえ」

しみじみと、セインが呟けば、タカはうん、うん、と、首を縦に

振っている。

「そりゃあもう。用があるなら余を通せ、なんて、大音声で登場して、一気にキャプテンと意気投合ですよ。珍しいもん見たなあ、ありゃあ」

「ギャンガルドと意気投合・・・」

それは確かに珍しい。

海賊はマイペース（前書き）

すみません、パターン化してますがお待ちいたしました。ようやく更新です。ほんとうに毎度毎度（涙）お持ちさせています。最後までお付き合いしてくださる方が、どれだけいらっしゃってくださるのか、この頃不安になって来ましたが、そんな作者の気兼ねなんかお構いなしで、海賊王は我が道を突き進んでおります。

海賊はマイペース

「それで？彼はなんて？」

「おお、そうなんですよ旦那！おれっちもびっくりしたんですがね、旦那とそっくりなのがいるって言うんですよ！」

「そっくり？」

それは顔なのか何なのか。

「なんです？えっと、ちょっと遠いらしいんですけれどね。王様会議みたいなのがあってですね」

「王様会議・・・」

どんな会議なのか。多分それはいろんな国の国王などが集まる世界規模のかなり重要な会議なのだろうけれど。王様会議などと言われてしまうと何とも形容しがたい。

それでもタカが一生懸命しゃべるので、ツツコミは入れずにおく。「その会議で、どうやら旦那みたいに生きている伝説みたいな人物がいるって、他所の国の王様から聞いたらしいんですよ」

「え・・・っ？それはどういう事？」

「セインみたいに非常識な生きている化石が他にもいるっていう事？」

横からキャルが、非常に辛辣な質問を出した。

「生きている化石って、僕、化石？」

密かにショックを受け、心の奥で泣きながら、セインはタカに話の続きを促した。

「まあ、その、そういう事です」

キャルに睨まれながら、タカは頷く。

「それで是非とも、その話をお前さんに伝えてくれって言うんでなあ？」

タカの頭を肘掛代わりに、のっそりとギャンガルドが割って入った。

その顔はいつもどおり、のらりくらりと笑っているが、どう考えても楽しんでいる。

「……わかったわ。セインのような人物が、この世にもう一人いるのね？」

「うん。そう」

見上げるキヤルを、白い歯を見せてギャンガルドが見下ろした。

「どうする？ お嬢ちゃん」

しばらくギャンガルドを見つめていたキヤルだったが、盛大に溜め息を吐き出した。

「どうするもこうするも、ギャンギャンの言う事なんか信用できないもの。どうもしないわ。私たちは私たちの旅を続けるだけよ」

そう言って踵を返し、セインの服の裾を引っばった。

「ここでギャンギャンを捕まえても良いのだけど、行くわよ。セイン」

「キヤル……」

セインは、うつむいてこちらを見ようとしないうキヤルを片腕に抱き上げて、いつもの大きなカバンを逆の手に持った。

「悪いけど、海賊王の君の事だもの。何かと引き換えなんでしょう？ 国王と海賊が取引したなんて、国民に知れたら大変なことになると、彼に伝えておいてくれるかな？」

セインはキヤルを抱えたまま、ギャンガルドたちへ背を向けた。

「それで、良いのかい？」

意外そうに、ギャンガルドがタカの頭をぐりぐりといじりながら聞いてくる。

「だって、僕は仲間を求めちゃいないもの。もし、その人物が本当にいるのだとしたら、僕みたいな大馬鹿者が、この世に二人も存在してしまうことになる。それは、ありがたいかとは思わないのだけだね？」

「ふん？ ま、取引してるってのはアタリ、だけどな」

タカに邪魔されて、彼のつるつるの頭から両手を離しながら、ギ

ヤングルドはセインの背中と、担がれたまま大人しくしているキアルから視線を外さない。

「じゃあ、君は国王からの伝言を、僕らに伝えたのだし、取引は成立したわけだ。僕らはこれから行くところがある。新しい約束も出来たしね」

振り向きもせずに歩き出したセインを、ギヤングルドは止めなかった。

止めなかったのだが。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

野原を抜け、ゼルダのお屋敷も完全に見えなくなり、馬車も通る街道に出た。次の宿場町の看板も見つけ、目的地も定まり、キアルも自力で歩き出した。

「あら、セイン」

「何？」

「あれ、そうよね？」

キアルが指差す方向には、民家の屋根。看板のとおり、宿場町が見つかったのはお昼前。

「ねえ、キアル？」

「何？」

「僕ら、考えていることは一緒だと思うんだけどさ」

「ええ。そうね」

ここまで来たら、いつそ誰が振り向くものかと、二人とも黙って、ひたすら進んできたが、それももう限界だった。

「走る？」

「ダメよ。追いつかれるわ」

「じゃあ、いつそのこと？」

「・・・・・・・・・・それでも良いけど、それはそれで、相手の思う壺みたいで、なんだか癪に触るわ」

「とりあえず、出しても良い？」

言うなり、セインは両手を持ち上げ、一度体内に納めた剣を取り出そうとしたが、キヤルが止めた。

「町の近くで、セインロズドは出さない方が良いわ。だったら」ドドン！

振り向きもしないで、素早くスカートの中の銃を引き抜き、後方へぶちかます。

「のわあああああ！」

「お嬢！俺！俺もいるから！」

海賊の悲鳴が二つ。

「いつまでもくっついて来るからよ！」

「用事が済んだんだから、船に帰ったら良いのに」

走り去りながら、キヤルとセインが交互に怒鳴る。

ギャンガルドは、二人に伝言を伝えた後も、何食わぬ顔でぴったりと、キヤルとセインの後に着いてきたのだった。タカは当然、付き合わされている。

「キヤルに渡してくれて頼まれモノがあるんだけどよお！」

ギャンガルドが怒鳴り返す。

「嘘よ！ギャンギャンなんか、この世でいっちばん！信用できないもの！」

走る足の早さもゆるめずに、キヤルがまた怒鳴り返した。

「ほんつとうに、信用されてませんね。キャプテンって」

「うるせえ。そうそう人に信用されてたまるかよ」

信用されたくないというのもおかしい気がするが、キャプテンなのでなんとなく分かる気がするタカだった。

ぶつくさと文句を口の中で呟いて、ギャンガルドとタカは二人の後を追いかける。

「ねえキヤル。僕の剣を出すのを止めるなら、銃を町の近くで撃つのもどうかと思うんだけど」

「いーのよ。撃ちたかったんだから」

そんな会話が、前方から聞こえてくるのに、タカはしみじみ泣き

たくなった。

「本当に、ほんつとうに、本気で嫌われてますぜ、キャプテン」

「嫌われてたってこっちが嫌ってなきゃ良いんだよ！」

「そりゃあ、そういうもんなのかなあ？」

「そういうモンなんだよ！納得しとけ！」

「はあ。じゃあ、納得しときます」

海賊はどこまでもマイペースだった。

「投げるから受け取れよー」

あんまり間延びした声が後ろから聞こえたので、イラついて、ついキヤルが後方へ振り返った。

「えっ、ちよつと、何？」

こっちは何も構えてもないのに、ギャンガルドが何かを放り上げるのが見えて、キヤルは思わず両手を伸ばす。

ギリギリ指先で捕まえたのは、小さな小さな、木細工の、可愛らしい人形だった。

「これっ」

なんとなく、ゼルダに似ているのは気のせいだろうか。

からん、と音を立てて、関節部分がちゃんと動く。大人の手の平に収まる大きさなのに、つくりはとても凝ったものだった。

「さっきの森の中で、背中の曲がったおっさんが、大事そうに持ってたよ。それ、お前さんに渡してくれってさ」

いつの間にか、すぐ傍まで迫いついていた海賊たちだったが、キヤルにはもう、そんなことはどうでも良かった。

「あんたたち、ピーターに会ったの？」

キツと、ギャンガルドを睨み上げた。

手の中にある銃のトリガーに、しっかりと指は掛けられたまま。「おいおい、よしてくれ。何にもしちゃいねえよ。でっけえ屋敷の近くを通ったら、あんまり変わった風貌の男が、顔に似合わねえ人形なんか持っているから、なんだか面白そうで声を掛けてみただけだよ」

肩をおどけてみせるギャルだが、キヤルの眼光は、ますます鋭くなるばかりだ。

この男の事だ。もしかしたら、ゼルダ屋敷のオートマタドールを嗅ぎ付けているかもしれない。

海賊はマイペース2（前書き）

お待たせいたしました。今度こそ最終話にしようと思いがんばりましたが、すみません。まだ続きます。タカが頑張ってます。

海賊はマイペース2

「信用してくれねえのかい？」

「あつたり前でしよう」

ギャンガルド相手に何を言っても、多分話が進まないで、セインは困った顔をして、ギャンガルドとキヤルの間をウロウロしているタカの襟首を捕まえた。

「苦しいっす、旦那」

首が絞まったタカを、くると回して自分の方へ向かせると、目線を合わせるように、両頬をがちり掴んで、にっこりと微笑んだ。

「どうなの？」

「うわあ」

怖い。

頭が固定されてしまっているので、思わず、目線だけを泳がせるタカだった。

海賊王だって恐れる無敵の微笑を、一般の海賊の自分が直視しては心臓が止まってしまうに違いない。

「こらこら、俺の大事なコック長を殺す気か？」

「だって、君じゃ埒が明かないから」

自覚はあるらしい世界遺産並みのこの賢者は、実は相当腹黒いのではないだろうか。

「だめよ、タカのご飯はおいしいのよ？」

「止める理由がそこですか」

悲しくなってくるタカだった。

「大丈夫だよ。その気だったら、とっくに、ね？」

「・・・・・・何が？」

恐ろしい発言を、さらりとされて、タカの背中に冷や汗が流れた。「うう、なんだかあの屋敷の変な噂は聞いてましてね？」

ついに観念した。

「こら。そこで吐くのか、お前は」

「すいやせん、だって命は一つっきゃ、ないもんで」

「微笑まれただけでって、簡単すぎるだろ」

「あっしはキャプテンほど心臓に毛が生えてないんで」

「お前ね・・・」

セインに頬を挟まれたままなので、ギャンガードへ目線だけに向けてみるが、納得をしているのかしていないのか、微妙な顔の海賊王に、タカは眉毛をハの字にした。

誰だって、手に入れたら世界を手に入れられる、なんて伝説まで付いている、聖剣兼賢者相手に、喧嘩なんか吹っかけたくないものだ。

「どうもね、死人が生き返ったとか言う屋敷が森の中にあるらしいって話を聞いてましてね。そりゃあ、うちのキャプテンですから、興味を持つでしょう？ほんで、どうも旦那たちっぽい二人連れが森の中に入って行っちゃったって話と、どっかの道具屋で、なんか凄い剣が、その屋敷から売り飛ばされたのに跡形もなく消えちゃったってんで、こりゃあ、お二方が屋敷に関わったんだろうから一石二鳥かなと」

頭を固定されたまま、なるべくセインを見ないようにと目線を彷徨わせて、とつとつと、タカがこれまでのことを話し出した。

「まあ、屋敷に着いたところで背中を丸めた男に会ったのは本当で、なんだかやたらオロオロしてましてね。それで、キャプテンが話しかけたんですが、余計に驚かせちゃったみたいだったんで、俺が話を聞いてみたら、まあ、お嬢にそれ、渡してくれって言って、泣くんですわ」

「・・・・・・それは・・・」

「・・・・・・目に浮かぶようだわね」

本人達は知らないだろうが、ピーターは彼らを海賊だと知っている。しかも声をかけて来たのは、一般的に言うところの、泣く子も黙る海賊王なわけで、それはそれは恐ろしかったに違いない。

「泣いて人形を差し出されたら、まあ、ねえ？」

お人好しのタカは、ぐずるギャンガルドを宥めて、ピーターの願いを叶えるべくキヤルたちを追いかけて来た、という事らしかった。

「まあ、帰り道にまた寄ってみれば良いんだしな」

にやりと笑うギャンガルドに、一発。

ドン！

「のわ！」

「ピーターの贈り物を届けてくれたのは、感謝するわ」

煙の出ている銃口を向けたまま、キヤルがにこりと微笑んでいる。

「……似てきたな」

「なんか言った？」

「いいや？」

「とにかく、これ以上ピーターを怯えさせないでちょうだい」
話し振りからして、オートマタドールのことは感付いていないらしい。キヤルもセインも、このままシラを切り通すことにした。

「それに、死人が生き返るだなんて、馬鹿らしい話だわ」

ふん、と、鼻息も荒く、キヤルは断言して見せた。

「そりゃあな？ 古今東西、似たような話はあれど、大概は仮死状態だったのを勘違いしたとか、別人と間違えていたとか、オチは付き物さ。俺だって信じちゃいねえよ」

顎をつまみながらにやにと、ギャンガルドはキヤルの話に合わせているものの、どうも胡散臭い。

「信じちゃいないわりには、興味津々みたいだね？」

「だから、微笑むなって」

茶化す海賊王に、セインはそのまま訊ねる。

「死者が生き返るなら、君は何を望むの？」

死んでしまった彼の妻を、生き返らせたいと願うのだろうか。

「……」

しばらくの沈黙の後。

「なーんにも？」

「何も？」

「そ。何にも」

ずいぶんと、あっさりと言うので、セインはギャンガルドの顔をまじまじと見た。

ようやく解放されたタカが、ぷるぷると頭を振っている。

「死んだ人間を生き返らせたって、何にも良いことなんか、ありやしない。死んじまうから、生きていられるんだろ？その点、あんたは辛いよな？」

この男は、痛いところを突いてくる。

「さて、ね？」

自分は、死者を生き返らせることができるのだとしたら、一体何を願うのだろう。自分への疑問を、そのままギャンガルドへ問うて、跳ね返されてしまった。

「あら。セインが辛いはずないわ。なにせ、絶世の美少女と一緒にいるんだから」

二人の間に、キヤルがグイ、と、割って入る。

「誰か将来美少女になる予定？」

ギャンガルドがからかうつもりでキヤルの頭を撫でようとして、頭突きを食らった。

「黄金の薔薇を前に、良い度胸だわ！」

「だって、お前さんまだ幼じよ、へぶっ」

二発目を食らう。

「セイン！笑わない！」

指摘されるものの、笑いが止まらない。

「いや、ち、ちが、違うんだ」

「何がよ!？」

「ま、待って、止まらない、ははっ」

まったく、セインはキヤルに頭が上がりえない。だって、彼女のたった一言で、自分はこんなに嬉しいのだ。

「そうだね。今は、君がいる」

涙を拭きながら、セインが頷くと、キヤルはセインの足を、思い

切り踏んだ。

「なんで踏むの?!」

痛い足を抱えて、先ほどとは違った涙が出る。

「今、じゃないでしょう? この先ずっとって、あたし言ったわ!」

「うん。そうだったね」

キヤルが恐いので、身を引किながら頷いた。

「えへへ」

顔がにやければ、キヤルに睨まれた。

「なによ? もう一回踏まれたい?」

「いやいや、何でそうなるの?」

ふるふると首を振る。

その二人の後ろで。

「あーあ。相変わらずかよ?」

「キャプテン、まだ旦那の事が諦められねえんで?」

「そりゃあなあ」

物騒な会話を交わす海賊に、キヤルがべえっと、舌を出す。

「…………お嬢とワンセットにしたらどうですかね?」

「…………一回考えたんだが、お前、出来ると思うか?」

「無理ですねえ」

「分かってんなら聞くな」

「へえ」

さらにぼそぼそと声を低くして、海賊二人は思案にふける。

「で?」

「わあ」

「びっくりした」

キヤルの超どアップが二人を襲う。

「ええ?」

背の低いキヤルの顔が、自分たちの目線にあることに再度驚けば、何のことはない。セインに抱きかかえられているだけだった。

「お、驚かさないで下さいよ」

「ふんだ。セインはあげないわよ」

がっしりと、セインにしがみ付いたキャルに、まるで猿の子だと、海賊二人は思ったが、口には出さない。

「分かってますよ。とにかく、お嬢も旦那も、俺たちと一緒に王様に会ってもらえないですかね？」

ギャンガルドが口を開こうとするのを、タカが遮って、早口に訴えた。

「さっきも言ったけど、僕は城へ行く気はないんだ」

抱えたキャルにしがみ付かれながら、セインが踵を返すので、タカは慌てて二人の前を遮った。

「頼みます！一緒に来てもらえねえですか？！」

必死な様相に、セインもキャルも、眉根をひそめた。

「一体、どうしたっていうんだい？」

「その、実は・・・」

しどろもどろに、タカが言うには。

「まったく恥ずかしい限りなんですがね。キャプテンが王様と仲良くなったって話しましたよね。それで、何て言うか・・・ごによごによ」

「なによ、はっきり言ったら？」

「うう、うちの馬鹿キャプテンが賭け事をしちまったんです！」

勇気を振り絞ったらしいタカの大声は、その内容と共に、賞金稼ぎの少女と伝説の大賢者を驚かせるには充分だった。

「もしかして、その賭け事の内容って」

キャルはセインを指差した。

「キャル、人を指差すのは良くないよ」

そんなことを言っている本人を目の前に、タカは泣き出してしまった。

「う、う、そおですー。うちの馬鹿キャプテンが、馬鹿な賭け事をしたばかりにっ！」

涙を拭うタカの禿頭を、がっしと掴む大きな手。

「ほっほう？お前、自分のキャプテンに向かって馬鹿だろう？」

そのまま、泣きつ面の鼻をつまんで、ぐりぐりと回す張本人に、タカは悲鳴を上げた。

「いだい！いだいっす！ぎゃぶでん！」

「止めなさいよ、見苦しいわ」

「見、見苦しい？」

キヤルの冷たい言いように、ギャンガルドは思わず鼻をつまんでいた手を離す。

タカは頭は掴まれたままで、無事だった鼻を両手で労わった。

「賭け事がどうのって言っていたわよね？どうせ、あの王様とギャンギャンの事だもの。セインを連れて来られるかどうか、賭け金をかけたんでしょう？」

「良くお分かりで」

感心するギャンガルドを押しつけて、タカはさらに訴える。

「金だけじゃねえんです！それだったら俺たちだって、キャプテンが飽きるまで付き合えば良いんです。でも、でも！」

わっと、堰を切って泣き出すタカの頭を、慰めるように撫でまわすギャンガルドだが、なんとなく、いやな予感がして、セインは口に出してみた。

「あのさ。賭け金以外に何かあるの？」

「お？あるっつーか、なんつうか。つまるところ、アレだ」

言い辛そうにしているギャンガルドの手を頭から振り払って、涙と鼻水でぐしゃぐしゃなまま、タカはいきなり、がばりと頭を下げた。

「お願いしやす！仲間を助けると思って！一緒に来てくだせえ！！！」

「あー・・・」

事情が飲み込めてしまった自分に、ちょっと腹を立てながら、キヤルは深い深い、溜め息をついた。

「ようするに、連れて来る事が出来たら、お金がもらえて、連れて

来ることが出来なかったら、クイーン・フウェイルのみんなが向こうに取られちゃうってわけね？」

泣きながら、タカがこっくりと頷いた。

「なんだか、士気力強化を図るとかで、うちの連中の闘いっぷりが気に入ったとか何とか言って、王様が」

「まーいーじゃねえか。こうやって見つけることも出来たんだし、後は連れ帰るだけだろー？」

相変わらずくちやくちなまま、タカはギャンガルドにしがみ付いた。

「うわ、おま、くつつくな！」

「ひどいっす！ひどいっすよキャプテン！あんな、俺たちだってこずった親衛隊を一人で蹴散らすような旦那ですぜ？お嬢だって一筋縄じゃいかねえってのに！だいたい、キャプテンがお嬢と旦那に嫌われてるってのに、俺、俺！」

ちーん！

「あ、ばかやろ！」

ギャンガルドのシャツで鼻をかむ料理長に海賊王は諸手を上げて降参した。

新たなる道連れ？そして旅立ち（前書き）

海賊の登場でなんだかおかしな方向に話が進みましたが、ようやく「2」も終わりです。今回の連載は更新が1カ月に1度というスロースペースっぷりで、大変申し訳ございませんでした。ゼルダ編、ともかくこれにて終了です。

新たな道連れ？そして旅立ち

「そんな大事なことを、どうしてもっと早く言わないのさ」

半分以上呆れ顔で、セインはキャルを降ろす。キャルはキャルで、呆れるというより、心なしか眉がつり上がり気味だ。

「なんっか、おかしいと思ったら、そういう事だったの」

ふん、と、そのまま自分の大きなカバンをガラガラと引き摺り、セインの腕の裾を捕まえて、海賊二人の脇をすり抜ける。

「あ、あれ？お嬢？」

涙で目を真っ赤にしたタカが、不思議そうに聞いてくるのを、チラリと見やって、無言のまま、ふい、と、先ほどまで海賊と追いかけてっこをしていた道に戻り始める。

「お嬢、いいのかい？」

やっと、キャルの意図を理解したタカの問いに、答え返したのはセインだった。

「キャルが行くっていうからね。でも、この森は、迂回して行くよ。それで良いね？」

「な、何よ、行くとは言っていないわよ、行くとは！ただ、みんなにはお世話になったし、また会いたいっていうか、そう思っただけ！」

「ほ、本当に？」

思いがけない二人の行動に、タカは、先ほどとは違った涙を流し始めた。

「うああ、すまねえ！旦那！お嬢！」

感涙に咽ぶタカの肩を、ギャンガルドがぺんぺん叩く。

「な？お前連れて来て正解だったろ？」

ちゅいん！

甲高い音が耳元を掠めて、ギャンガルドは冷や汗をかいた。

「お城へは行くけど、誰もギャンギャンと行くなって言っていないわ」
髪の一部を弾丸で短くされて、ギャンガルドは普段なら男前らし

い、日に焼けた顔をだらだらと崩した。

「俺、そんなに嫌われてんの？」

「今更気が付いたの？」

冷たい答えが返って来た。当然である。

「あ。タカは別に一緒でもかまわないわ。というか、一緒に来ないかしら？」

「あ、良いんスカ？」

更に追い討ちをかける賞金稼ぎの少女は本気で容赦ない。

それに吊られる自分の手下もどうなのか。

「じゃあ、とりあえず行こうか？」

それでも平然として、一行に近づいた。

「て、え？え？」

近づきざま、ひよい、と、セインを肩に担いで、ギャンガルドはのしのしと進んでゆく。

「ちょ、ちよつと、何いきなり担いでるの！」

相も変わらず読めない行動に、セインは慌てふためいた。

「だって、怪我してんだろ？」

担がれたのも不覚なら、気づかれていたのも不覚。

「でなきゃ、男なんか担ぎやしねえって」

「……ふーん」

前科があるこの男に、そんなことを言われても、全くもって説得力がない。

「ちよつと、何で気が付いたのよ？」

キヤルがあわててギャンガルドの前に立ちはだかった。

「なんとなく。賢者の動きにキレがないしな。お嬢が一人で銃なんかぶっ放してるし、セイン・ロズドも出させないくらいだから、氣遣ってんだろうと思ってね」

なんとなくでそんなことまで見破るな。そう言いたかったが事実なので押し黙る。

「だからって担ぐ理由にならないだろ！」

ごん、と、セインがギャンガルドの頭を殴って、無理やり地面に降る。

「痛ってえなあ」

思い切り殴ってやったのに、さして痛くもなさそうに、殴った頭をさする。

確かに、ゼルダに貫かれた傷は深く、治癒しかかっているとはいえ、実際支障がある。誤魔化していたのに、よりもよって、この男に気づかれてしまうとは。

「だ、旦那がそんな怪我しているなんて、オレ気が付かなかったっすよ！大丈夫なんスか？」

「ああ、もうほとんど治っているんだ。気にしなくても良いよ」

心配そうなタカに、セインは笑って見せた。

「でも、俺に担がれるくらいの怪我だけだな」

しれっと、海賊王は余計なことを言う。

「ギャンギャンが余計な手出しをしなければ、セインだって、さっきの町でゆっくり治療する事だって出来たんだわ」

ぼそりと、キヤルが恨めしそうに呟いた。

「うあ？」

下から恨めしそうに睨みつける少女の目線は、先程よりも恐い。

「人形、届けてやっただろ？」

「タカがね？」

恩を着せて回避しようとしたが失敗する。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

睨み合ったまま、しばしの沈黙。

「よし！決めた！！！」

キヤルがいきなり大声で、ビシッとギャンガルドを指差した。

「うお？」

「どうせギャンギャンだもの。イヤだって言っただってついて来るわ」
「よく分かってるじゃねえか」

当たり前な顔をするギャンガルドを無視し、顎に指を当て、考えながらキヤルは続ける。

「このまま捕まえてお金儲けたっていいけど、それじゃクイーンの皆に悪いし、なんてったってセインの怪我は事実。だったら」

ふん、と、腰に手を当ててふんぞり返り、キヤルは銃をギャンガルドに向けにつこりと、艶やかに微笑んだ。

ゴールデン・ブラッディ・ローズが、絶世の美女と言われる由縁。心臓までもが凍てつくような、逆らうことを許さない、つややかで妖しい微笑だ。

「ギャンギャン、これは大きな貸しになるわね？」

しまったと思ったがもう遅い。

「ツケというあげるから、覚悟なさい？言っとくけど、私の貸しは高いわよ？」

とにもかくにも、ご同行を許された海賊王と、その料理長だった。先が思いやられると、海賊の料理長と、伝説の大賢者はひっそりと思うのだった。

「お嬢がお前さんに似てきたと思ったんだが、逆だったんだな」
キヤルが眠ってしまった後で、ギャンガルドがセインにそう言ったのは、旅の途中でのこと。その後のお話は、また後ほどに。

FIN

新たな道連れ？そして旅立ち（後書き）

おかしいな？もっと盛り上がって終わるはずだったんだけどな。なんていうのは作者が一番思っていることです。未熟者ですみません。本当は屋敷から出て、ピーターに見送られて終わるはずだったんですけども。せめて海賊に見つかったところで終わらせておけば・・・。本当に、本気で海賊の登場は全く頭に無かったんですが、さて終わろうとしたときに勝手にできてしまっただけ。ギャングギャングめ。今回は、時間をさかのぼって、キャルとセインの出会い編で行きたいです。続きが読みたいって言う方がいらっしゃるかもしれないですが、とにかく、諦めず最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7713a/>

HEAVEN！ヘヴン！HEAVEN！ 2

2010年10月8日13時09分発行